大正十三年九月下院起業

小特旌議

八

特別
14
1919
366

176634

小物雜識

大正十三年九月九日起筆

時方問の書物を漁り広く土井子爵家なども出づる
反故数十點を贈り、今の子爵の先代は姫子の人なり
しと覚しく、珍奇の史料を多く含させて鄭寧
に保存せらんを、流れに大名の道具なれば宮ハ絵
で粉を極め、毎紙墨紙の代と入れあり、古河文庫
の大小の印紙、茶紙に捺してあり、土井家は土井大炊
頭の裔なる子爵にて、古河の城を取り、印文古河と
ある所以なり、此の史料を玉石混合して用ゐ立て
さるものも少からず見受けられば役立つべきか

38- 9155

を構ひ入れ候ゟ、尚ほ以上の外文書二種あり、一八今切関所改の出役又世人殺害改と唱へ細書と享保二年一統新古之書つゝ唐船出没（沖貿易を試又ゟ）ゟ対馬を取締りとる際の一件書類なり

この二種の文八宮しゝあるゝ、土井家に伝りるこゝ（ゟ）

文書也左に目録を載す

一 智恩院鏡銘 拓本 四枚

元禄十六年の年號あり 鏡身に

仏像あり

一 蒲桃図説 一冊

故本 図二枚附陪 栗本丹洲著

江都病科侍医 桂川甫賢改并図

一 天皇御来世帯次第 一冊

一 御遷幸供奉人物図 一冊

共に彩色ある上乗の写本也

宮井豊長写 一枚

一 風輦之図 一枚

一 南都春日神楽図

右八共に彩色あるゝ粉写なり

一 大塔宮鎧直垂雛形并図

鎧一直一垂 并に鎧水干二具の模

形如何にも精巧のあり寸尺并故実

考証附属 惜の雛形も添へり

来歴に就ては左の記あり

大塔宮紀伊湯川氏に錦の御

旗と御鎧直垂を納ふ定家か末孫
湯川次左衛門と云ふ者蒙物屋敷
の家中にあり次左衛門の御旗
御鎧直垂を持伝ふ　此外御旗
義也并感状数十通あり此先年
喜右衛門と云者に備へまゐらせ也
文和元年甲申六月廿四日撰象
右撰象一具色茶褐色一具ちゃ色
錦金時代の味淋漬を見ふ
袋の表に書云　酒井左京亮所献也
于時天保十二年辛丑月宮成　とち
り

一　義経愛妾舞衣之図并定子寺書類

下総国葛飾郡中田宿定子寺八静を
養育する寺といふ静の遺物とて懸軸
と舞衣を所持す舞衣は後鳥羽院の
烏帽子と伝ふ其図を見るに日月雲鶴
烏帽子上段に蓬壺の七七双の龍
其下に岳る三山に因る蛙蟆龍の舞
衣とこれ同じ蛙蟆龍の舞
摺物を出す北寺より北舞衣を授るも
撫しなりと見しき原物を添
ふ其比孫也　寛政十二年白河楽翁
も物と一説書　これを納る

門を寄進せられ、家ハ内外二個ある
て家宅と白河藩の庄屋中六氏の名
を署す、又遺骸を埋めし石と杉の木
あり曾つてハ碑を建てん計畫もありし
由、又光寺に此の紀念物の移るまで
この流華七詳く知る一也深く考へ
云く

私淑代考武州菖蒲郡岩中川邊領伊坂村
地内に杉大木有之右ハ静御境印に面往古
より倚る所村役人ハ私田村に節に少
之由来一百年ハ有之右村地境に高
柳村と一村有之右村に往昔高柳寺

と云寺有之右寺に静御遺骸大
杉に境印に面且高柳寺に倚つて
引寺に移る寺節に移り市時ハ日光道
中中田宿江引寺に成光寺と云ふ面村
役人ハ少之右話ある中上ハ以上

安政五月　中村八大夫

静の舞衣の後島羽院より御領ありこの
うハ石の内ハ有之ハ文殊菩薩ありこの
時代ハ古くしかも思ひのほかに偽托ありこの
ようかなし

一義経差物軍配団扇　数枚
差物(旗)上頭に扇面を描く銀色日の丸せ

左右と左の如く聯書し下に四名あり

敵者風前塵火予者如強岱　源九郎　義経　花押

陳大敵眼光義地退散

おもさ四尺六寸六分

軍配い高さ大きさ表面の左右に金字

あり表面の左右に

一扇聚千兵一弗退敵軍

一風行萬國一扇隱能身

背面の和歌を紹す　師拝詠歌是記者也

名のこきく虎と

めのまえ　沖那王　花押

ひろ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

北二品の花木と就ていい記する不可

一天子着御之芳履　二枚

用形之紫法令のごと甚以異なり

附帯の解法ニ曰

天子御庭廻之節着御之芳履

堅長八寸二分

横巾　六寸六分

厚サ　平　一寸程

但回りハうす

藁ノ中ヲスキニテ振ルモノ也鼻緒ハ

奉書紙ニテ巻ル也

右者御手水之役生駒山国と申仁ニ加州
播三郎江御来所花世天保八年十酉七月廿九
日於京師二条宮之

一 裳代（ショウダイ） 一具
天子の御衣ニ模形ニ外ニ解説紋枝
ニ図ニ添工

一 朱舞乗仏如意并留国
一 日蓮赦免状 并本国寺寺宝
一 赤穂義士百像
一 大坂城 并 天主台絵図
一 慶長年間禁制札写

此等一々注するに暇あらず
享保度迄之変改の沒由有職ニ添行時代なし 竹上八北沒の沒を沒
一 今切関所改 文書 三通 とるあり
女流文
髪改の仮書 二通
写松平主殿正より大井大隅守
ニ充てたるもの
女流文庫文法の年号あり
幕府の御下賜関係の品の貴重な
りしかい北等の文書と見て書像し得べし
女性と節ての別しも関所のやかましかり
しかい故に、其上集女流文ならるあり

其欲主らし其の海の妻、或は懐妊、何れも
行く、駕籠に乗ることを記し関
所無手形（免状）発行（ママ）手形ともと書き
第一後来出入らし俄路出来し者拙者方へ
てこら仰せ、云りと立流なもと領主の
名と判を署し、関所を預る大名と完
関所番（ママ）の手判を受けとるもの也、検之
旨詳りし婦人（ママ）施巻を受ける日之似
乗るものこの方こと各自の体裁
丈を見せ、偽装（ママ）、関所を
例とも婦人の髪を解き改め方
此の書状の内こと共細書ありこれし

史料の一端也

一、唐船注進覚書并一件書状　一袋

寛保二年以前長崎奉行と唐船出没密商と托
して国禁を犯し沖貿易を為す二付幕府
ハ兵を打掃ふべしと大井大炊頭、若国の
奉書出る外に右打掃に砲撃法を記し
るこの一通あり日に偵察注進の為に部屋
奉書横帖に綴じこの二十年と云う二冊長
り唐船乗組の唐人の名を記したるもの一通深
海底へ投棄ての後の国也、南時沖貿
易を如何に嘉永と幕府かえ帰りとなかの

狀を見るに、その表裏の元偉を得ること
五沖雲の如く行のん欲する也、予曾て見たる用
撓ること砲聲の如きの峻嶮を今の時と較べ
て自然天然童子なる感あり 頃回想の
の回情起見すべし

○一昨大正十一年壬戌十一月八蘇古公書聖の拓を
得て文と月とを同じくす実と公の逝後八百四十
年と云う、当時文人種々の文拓を試み紀念とす、即
人を招て亦何等の事無きを得ず、唯書聖即
興四本を得、乃ち前後書聖拓を一百六十三印
に分割したるもの也 梨冨寺の岳と石井渡石等

同所前記、

九月十九日記

○往年内藤文定の家に山陽外史の綱目帖を見る、而して
其の何人の帖なりしを忘る、山陽の逝るを編ずるの逝び
再び北帖を見て、その山陽自写の孔石村畫訣
なることを知る、蓋し殿岑の為のみたし也、帖
尾に山陽の跋あり、石村を評する一度
眼まくるべし、北二跋山陽録に入る、しかし偽り
なりと云て其文を存す

九月二十日

殿岑前流家に畫山水猶余為點
染于詩讀間也偶後清人孔石村畫訣
有舎於心因手写以寄筆之謂先獲在
心、要之能脫畫匠習氣乃一の功業之渦

不渇不足論也辛巳六月十九日山陽外史頼襄
後千蕃薇園之東軒時新築園成数
日而迄樹井皆活時辛亥遠留名中金
栗蘭亭香祝襄凡欲代吉跋因眼疾不化
細字十年今一為而為之

□　□

余嘗倣井明為一幅題曰孔石村創意
渇渠自謂未曾有化米水點設齋
色皆用焦墨之渇筆是渇字機関也
毋托黄鶴山椎之手乳創於孔也但
以也為渇渠孔為如耳乎信但卷甚
古今而墨用之不則每幅徒成雷墨不入

具眼之観不可為以為如何襄又後
□　□

○石油時報に余が随筆を載せること二十回に及ぶ、二十回以後の材料を今日数時間に直り口授筆録せしに、其目左の如し

一　菊雪卵の文　一　蹴鞠とベースボール
一　中島棕隠の詠歌　酒尾氏と併称の歌面
一　井伊大老の茶と其評
一　俗人大老節と一茶　俗客行脚の行状
一　刻印の楷法の気合
一　寺八幡宮の俳味の府
一　歴史的古材を以て作りたる家　二件
日誌の秘密

次回重複を厭はめ是あり

九月廿日記

○碎花集二冊を贈られて此頃寝ながら読むべき屏風
に稿料の狂歌集なり赤毛の衛門と題する書を載
せたり、是狂歌を好まず、むかし名人のこの流れん
より、消息を兼ねるは一つなれども、品々に着想と
風なるべし、狂歌はあるの数の名人の集と限り読むべ
きものの、何も同じことなるべし、狂歌を別にして
歳あり、諸を題にして百首を詠じ、風手の
能のさるべきなり、古今の聊か初秋

遠の秋数うちうつる此夜人　諸百首と一
みよし　ぬしまもれ　あしの花の
まちうつるべし　花の一本

初秋道

秋のうつるあまの花えはあつまの花えはおらさきをつくり分かん
れとこ氣のあつま路こちの初秋道一をつういたれる百首
武家屏風
煙えてちへ飽るれさめるせめるる先を何てふせうん
雲の日友人の許りあくけこんのよりと現はい
いのちこそ飛もこ似ぬん何のものいさ敷嶋やき概
雲の屏風遠情
世をとつくくしうはて獄屋にまかりそうまに折こめ
久米の仙人
仙人もよの母ところハひとつまそ後ん心同じ谷川のこ
仙塚を造て戸のこけこと

董のえのなかの身も床の海苔弟一義をいむさを
もくさ

忍恋

涙ぞとあらんとんつかしや志のひとさこふ恋の重荷哉

宮天人恋

羽衣のうらをこうけて乙ひくさとうなふ面しとそこちの
のくそうき

宮机恋

毛氈をこうけてをちきる唐机白元の星石四文ろ〳〵て

槿

大気ろる高の朝典の花衣さいてハさろる共ゆ〳〵れ

古寺め印花

晃あかき名ハいとそれとめ郎花女人恋をも踏おへて咲

夏山

新根山あしのひるを吟うえの上れ落つく笑の花人

蓮

本とけてもう若ゆを蓮の花いさ舟をいけえうち

芙江の義髪せし秋本きて

うう花山しきを又ハうしらの雪解して心の花のときを湯ぬ

古雲の志い花ろるにうれ白雲れ情い風月

ハいさるハ北とあけていくゆ〳〵くんてハるゆ世

砕ゆる身城えふくし壺中の天地を瞬

眺こえてついの白髪のくをハろ如

いとつくる品の親父とろうひさおめの紙えハ酒のい

禁酒しえへりしとき人のやえんと世ろゆ表しよ

里うゆのりうかとき わうう梅酒ろ〳〵バ手かられやえ

朝坂

酒

なかく世ハよろこひ烏酒のんで四かぬさの何るうくんしうあり

絵柏の

色いと伐手にまかせ写る梅さくらぬかてや鳥し祝こしとやゆ

○無師に困んで出て国を過る、今年神田の出物を居ル

しと終に諦めず、まひ毛る一二得ル事有り、

前日宇の久の出の須の考久本を得しが余ハ幸に下巻

を得て完本となる、おもしろかるべしとて梅歌

のもとう、是の歌の表の紙ハ版つえ新ら蓬莱本頃る作ル

ここハ嬉の、是ハ表集ハ版つえ新ら蓬莱本

と表る鮮ハを久くに、豊稲を是ハ表ハ版後生

1ゝ考ふ、是ハ表集の版を用ひ見る事ハ

遺ハ前編ハ前編と分ち十四巻を収む、醉善堂六

部郭夢侍者、寸珍ものを世に版式住良し

金かす珍本筑中未記記二書可嬉を揮

筑す、五の巻の源出の源和四郎市川白猿

浜海横烏馬の心すを也：擬ひて後者を

話利しとるるを小説本こ物を家こ物をとして

既ハるる家ハ貴と言し、狂歌る兎夜狐ハ

筑中一部義すを芸元を前年内四春庵

ら作後を聖ましし、偽と方ハ跨る方投者ハ七人の

ふ、此者を者こ平秩東化の百るまかなりの記を

載すれども、その狂歌の状を綴り出す、狂歌の
時著名の作家を招き、化物百を演ず、化物
狂歌をもこれを冠詞とす、半紙に狂
百鬼夜行といふ者あり、今年
して比較し得べきなり、今年の北者に擬したるなり
ん、「るあ」の狂歌の「式」として年代の沿革にあ
る條紙に百鬼夜行とあるものと全く同じ、北者
く北者の條紙を移し入れたるなり、信濃の大地震
の図二枚、小松化丁未義光寺地震の惨状を二枚
に分ち図し、版本にて一枚に山の崩潰と活
を図し一枚にまとめ、六郡震蕩を図す、若
者、信濃中の平昌言とあり、鉛白と往古の信

濃の大地震を古書より抜出して詳かにす、北化図義
光寺地震を知るべき状なり、先は以上の
所なり、地震学者の北地震を元禄と記す
載もあり、前書に其切板を収めおきしが、図
に照合するを便とす、山の崩壊と湛水は
越外のこの也

九月廿三日記

○寛政外骨が出でて刊行し北図出の図「川柳と百人一首」
川柳や狂句に見えし外来語」と云ふ小冊子が書肆の廣野
店頭に見えしが、題れを購ひ入れ、一ハ川柳中とる人
一首の歌をモジリテ入れたるものを百人首の北者順と原
歌と異し、他の考証や批評をかくなり、一ハ川柳
中に出没しある外国語、これハ維新前の古き外

来歴に限って採集したものだが、コンナ風な分類して川柳を味ふのも一興あるべきものと思ふ。個様な分類ひ撰ぶと駄句の多く寄るのを蓋しむを得ざる、淡白でそれも仔り無味しろいが、志かしいろ〳〵な分類することハ面白ろい、合物とう風俗とう[illegible]分類をしたら楽しみなおもしろいものこの柴[illegible]ろ[illegible]ん[illegible]ろ

かあるゝ、まれに香煙を立てゝのぼるから、晴中ゝゝ奥深い（ヒドク）感じもしたのである、即ち斯る（）戦を為すゝゝお話ひ向きの仕業であつたと係し妖怪かあらう云ふもの、妖怪と畏怖するから心と暗鬼を生ずるのである、斯様の侵しゝゝいつもコワがらせる為めて何人か晴中ゝゝ悪戦を試みたを試むるが常例で、牛嶋先生が北の悪戦を試みたのである、二三人喫煙者を後香を立てゝ引下ると、四番目の者がキヤツト叫んで倒つた、それの立ふのゝゝ何物か晴晴中の有る、自分と思つて氣配がするから後向を立てゝ戻つたと、色蒼ざめて戦栗して居る、其内と仕業の奥で両足をガラ〳〵叩く音がして、満座の恐怖を一傍深からしめた、サア動うゝゝ誰れも行き手が無くなつた、中と年上の一人が勇を鼓して出掛けゝゝ間もなく、猛獣のあはり狂ひもする様な、そげしい足びやうしが聞こえたと、出ようとしたゝゝ狼狽して戻つて来て立ふのゝゝ、何うも知れんが様坐敷中を羽を広げて飛び回いるようなものがあるとゆので、一同唯ただことゝゝ、紙燭を拾ひくれ（検）ると出ようけると、クセ者を燈火を通けんと一数と上座の間と駆け入り金端と物を倒す様な騒がゝくゝゝと云ふと、漸やく正体を極めゝゝ、牛嶋先生が大きな座具を被り猛獣を擬して立騒いでいるのであることが知れたが、上座の男ゝゝ風煙が立かれ持茶を點ずゝる為めの行々の用意が立かれ、茶柄ゝゝもあつ

然が逃げ去る時に茶碗を投げたのでめの玉の響を
あしたのである、あの破損しくるあるに望翁先生
人も先生が大なるお目玉を喰つたことを起し出す、
る鬼夜叉と書いてあるのを見ると矢張り同じ様に進
あい人知れず賞品を拵へ込みて道を走きつて奮
かせるを、拳子を振られて牛の尾尾と思はせるようしてみる、
弾とおうしいのをあるこのあかへ知れず焼芋を四五本
ソト床の間にあげおき、手を觸れるこのあが面識のこのが
あると恐れたのを、後生が元体を見顕いさんと自
ら進んで嗜わりし模なるし、ちをつかみ戻つて人の制するを
も顧みず ハサくと喰つてのけたのを、さそは飯盛の迷
魂にあつたことが知れたとある、北の牡歌を拵の式を

見るに嗜らるに富と文墨一切燈の左におき祝料紙
を載せいの傍らに鉦鼓を置き、銘々歌を志
て後鏡を打ち、燈心一所と一百灯の燈心
り一灯の燈心をへらすべし、北の燈るに一百灯の燈
心歌一日もを供光の外に漏るを防く為め書
き紙を以つて燈を蔽ふを例とすと云ふ、最後百
首目あるを人い燈をけし男女の目を、陽の出
候を揺かして化物屋に用参さんと踊るべしとあ
り俗説はまくて七夕祭るを(和)皆のこの夜中、酒一升
を振棄ふべき定め也天の川の水のノンキ加減を見るべし
九月廿三日録
○故人となつた菊池略書を自分に先づて寄珍本田の英

集をやつた人でいつも■私しハ先輩でもあるが数に於て遥
かに及ハぬと云ふて北陸村品庵が全部の寸珍本を
引受つたといふから、慥に見て居たが、僅かに三四十
位しか無く、其も悪く方解んたものだ、自分の架中にも
い板ものゝ一つも無つたので失望した、英集百部及
バぬのに、寸珍本の英集家でもし此の間に云ひんたのハ
何かひあらうか、菊池氏の如きを集めるとなら
の■で七二三のものゝ如きを集めるとなら
ハ百種を容易るものゝ容易ある五百種に達するのが可な
り難儀で、それゝ以上千種まもとなると夢と難儀で
ある、兎角千部位■達英集をしてゐるけんぺ地方面
の味■知れぬ、略者の意見と一も得る不をもして二三冊

隅ちなる一冊庭を訪ふと、庭主ハ一冊の寸珍本を出してこんを
先生の面前にあらまほんとうを見せた
「千年以上社寺建物一覧表」と標題のある寸本で、いまだ
所持しるものゝ如からう、素人で黄ちつた、折角捜索
うけて一冊も得ず、却て隣家に一冊を得たのハ皮肉で
ある、此寸本を貰つて出庭と四時三反五峯の貴書を引取
つてまゝ、その傍にあるの、前のも多の嬉し得たが、更
に戦山かをうして多くの図書を検索し、自学
本をもが■交つておるめ、こと多くの書入があるから見
僅に「北道拾遺」の欄外に「海」の字を婚ふた外に夢宮図の注釈が、家義にうのから
を婚ふた、

九月廿四日記

○昨秋深更俳書をあさめて枕頭のさやく遺稿」を明る
諸氏北の著者木下幸文翁を巻頭の流を汲
又所謂る新派に属する人、共の孫する所なるも
自然と国学のことを説て文也の人も共趣旨雅のもと
情辞を巧妙を極む、余俗に於て一家を好み、和歌
に於て嘱望と北人を好むもせに真率なる自然の境
奇、而して情辞の妙小巧なるを首に推さい
を得ぬ、今ひの新句を如ます　九月廿六日記

山みのうへ情のうへれむかいてる人あり
何をとかとうのふとへ去ら好るも蓬はるをけしきこけ
河豚

小くるま魚の心を世の人のくちの丈をおそるへらこうん
仏のうへ人は月をあり
高山の月出てこ松くん休のたうせの音い涼しうけ半
此こうしく仏生不
のとうるる光しむるるあるいかにしい者の心の光
山みのうへ
すむ人い誰るあちうん人よりやのちうといふこのいちち自
初恋
いかうを恋の心を走りつうんあやしきこのい涙こけ
ひとち行のたやもるうん人志をすこの涙ある恋の心
樹陰納涼
屋ひの音の涼しき夕やこれ蛍死くる木のうんの庵

夕納涼

春の影もいとのきえくて初てすゝしくうつる川つらの里

船納涼

もゝとめらかうなく音もはしてみえ川上遠く行ハ雁

光甚

ゆるもたくうゑんつる夏の日さしもるこのハ葉ゆゑ

夏松

大ゝこハ風のひゝきもかゝまはてゝ夏こを松ハさひしうゑ

夏竹

いつハひの色と竹ハ夏風夏へまゝ相こを竹ハ涼しうゑ

餘暑夏深

秋風の吹ばなるべきものとし心思ひなさゝ夏餘の暑し

馬上餘暑

のゝて行馬つゝ夏山ひとりなるまゝ餘の暑

樋

垣もゝたゝく朝白の一さゝうゝ夏ゝこゝ

虫

山寺の鐘ゝうちて後ゝ虫の音ハまゝ

寄流恋

流のゝとおつる流の音あゝ世ゝゝ恋ハとゝゝきゝ

寄門恋

今ハゝや人のけもひもゝくきゝあをいつまゝつゝゝちきゝ

寄鶯恋

重ゝゝひく牛ゝまゝゝくゝ紀の恋のゝゝきゝ

夜雨

いひ忘らるわびしきこゝのハひさかたの雨降るよひの猿聲

朝

何とそゝぐ姫ゝ雨あとのおきいつる朝の心ちかな

山

世の中ハうるさきこゝろをもつしかとさらハ山ゐ入んとぞ思ふ

山寺秋望

くゝ人の老たゝしさにたゝの山寺を秋ともる犬の聲ゝ

山家

うきことの絶こゝぬ山ゐあるゝゝ入て住人なきゝ世こゝ

やはらぐ心やすくをおもゝゝるとゝろとゝいふ山ゐうゝて

懐舊

ゝくのちき人志のぶもゝ〳〵ハわゝ方のゆるをひゝやしうける

山旅

こえはてゝくゝふゝとおもふ行末ゝきゝこえゝとしるつゝらを

椎路平蔵

柴人ハを見もらさんし山うゝけの庵のさわゝひゝけゝゝゝゝ

春月

梅花ゝゝゝ見セしとおもへゝや月の光のおぼろゝゝゝん

谷花

すゝ美さ色のくゝまの谷ゝとこゝそこゝ白く見ゆゝ櫻ゝけり

櫻花

雪をゝゝ見すて岩のぬゝるゝゝこゝ春のをしゝの限し

五月雨

おしなべて暑さ〻こそ思へ独ぬる わが身をくらしわびぬる

夏夕

夏ちかうきなるまゝ松のもすそ〻みをとゝぎす

漢五月雨

はら〻とふるの雲のそこゝろ谷川の音おそろしく聞えけるか

夏月

おもしろとも端ゝ那うらにあこうち夜は月かゝりすゝしあるき

蛍

我宿のむくらうゑ茂りて蛍あまたとまりぬ

嵐山月

嵐山月の高

嵐山松の高ゝけくとゝ

夢

夢を秋きゝて見まゝ秋うゑし池の汀に夢の花さく

月前花

ひるはなをゆめ〻見ゆる山河を月のえゝさは花ゝ

秋萩

武蔵と探花の数をかゝへゝ萩の枝をはらへうゝける

まつむしの夢もつゝうゝ入れ萩きゝ者

落葉

五もゝ〻あゝ〻ゝ庵の古池あゝ〻ゝ葉をちゝ〻

探花時雨

もつゝゝ探さゝ見ゝ〻ゝ花ゝ時雨といえゝ

燈邊閑淡

埋火の下に心もうゝけゝかゝ愛ゝ心のうゝ

北天竹の実

[illegible]風もきらさる花ハさたやめのゐ(ゐ)ひこもるの田ひこ[illegible]
花柳れるうるさとハ其風の心も空すまふ〳〵らろう

[illegible]百首の内

問やらて人をいましとせしほとに[illegible]まさくもさたるうる[illegible]

夏恋

あをつちの根のちうもおよはめをつ見るき人の心をも[illegible]

深夜別恋

世うしのふ恋のくるしきるうれと待てわるう一夜こな[illegible]

日くらし

日くらしの鳴ふるゆく山里のわめくの風ハ身をしる[illegible]

秋庶

あしひきの山ぢのへふしうも猶ぬれぬるや雁の巡り[illegible]

白梅

雪の木つゑふことを[illegible]雪ハ梅の梅ぢるる花ふる[illegible]

階梅

うゑの花さうぬそうる[illegible]雪もとろのしるをろうれ[illegible]

朝床て雪をきくこと

雪のきてる〳〵鶯のおこさえし鶯の夢のまとしけ[illegible]

この頃を雪ぢる[illegible]日ぢ七る[illegible]海

なんぬ世いあうんやまを雪の[illegible]日かくれていひとの[illegible]

恩待恋

去ぢいつ〳〵人待宵ハあやうくに筋ぢの鏡ぢ逢くれ[illegible]

夢後恋

人志見ばおもしろく人を夢うつゝとさめての心誰かたゞ
の時殺業中一二篇本を猶ひ得ざるべし一二部
しおくべきものあり、　九月朱吉記

一　東國名山記　一冊

韓國名山の勝槩記なり簡單の
文なれども頗る詳細のものなり、卷尾に
徵するに東京外國語學校の教韓國校
友會報刻なりと雖ども明治四年頃
解こなれたる流暢にして佳なるものなり
余未だ此書の原刻本を見ず旅行
に便なることなれども内地にも此書を見
ることを求んと無し

一　新撰たし書ぶり　二冊

日漢文に野獲詩に題の國色なる
ことく和歌なるも「たし書」の色なる
べきに先ずこうとき、余和歌のこうときが
初めて也、文政三年
和と北書を見るい
京都に刻したるものなり　倭者は澄亮
と云ふ、本凡例をもつて「たしがき」
に記したるものの前に建部の綾足の倭
しとなるものあり、是を中興の八早川廣
海が更に補ひたるものなりとこうこれを
其の再版と合せて更に增補したる
もの

和歌の「たし書」なのいろ〳〵にわけども、往々数
既のちかきあの方の歌、たし書なども和歌
の書きそえ書きあることすくなくあるも
あり、人々詠る和歌をば、をのを受くる人
〻諒解あるべき筈なれども、尚注釈書
たしかきを附するもあり、皆ひがことなり、
是を撰集するにいろ〳〵の「たし書」ある
の例をその業とするべきも、普通ハたしが
きハ和歌を稱んする場合を除きて
書かせざりしなり、自家の手控なれハ
何人の場合何の為の此歌をよめるなど
他の覚えとなるべきことをかきつけ置くことも

等しらるるあるべくしてうるん、撰集ニあるべく
の「たし書」ハそれとそれハ和歌の心充分
なれども、場合〻撰者が書き添くるなり
また、之れを書き添くるを必者の家集
などの「たし書」を参考し引用もあるべく
なれども、心家のこのしるし「たし書」と為す
べきなれ、古へハ多くの場合注意
を添く或を「たし書」を要するなどの注
ハ注意するなれ歌をも書き添くなり
かるし、撰集の「たし書」も此等注意参
考して心の及ぶもあるハし、後世要なる
き事をくどくたし書」このくハ古来

る度ごとに学ぶべし。殊に手紙のごとく始る人、
[illegible]「ぶり」の凡例と説けるに聊
[illegible]と学ける人との習こ
[illegible]の理解しがたきこと往々
あり、これ寧ろ消息の特徴なる凡るべく、和歌
こゝにもこれと共通を同ふすることあり、特に
漢詩を書とする和歌に於ては、漢文漢詩
[illegible]の題詞をし、一篇の間を[illegible]書こぶ
[illegible]、彼此の間を[illegible]おのづから経庭
あるべき数個と此者を得て所懐を述るも
此方の凡例と説く所を一概に如出しなる

九月朱雀天皇

○昨の秋病に乗じ東台に散策、閑台中の震災震
覚会を見る、これを震災湯（年紀念の記念、倍しに
[illegible]ことのみ上四のが未一会場外に毒物池に未二八月
傷ありて、震火に罹りし[illegible]件其他震災六角の紀念
物を多く陳列せり、形大にして最も重きこと[illegible]（里）搬
る不便なれ、出陳のものも概ね小品なれども、なれども
惨火を逃れ出り得る[illegible]品を多く出てゐる、印刷
器械の[illegible]其際[illegible]行しなる新聞や雑誌
九八鐵字版なる[illegible]問[illegible]会場にも搬入ることなりし会場
を扱ひたるは勿論なれ地震にて破壊したる瓦斯（紙）
等、一束の釘や鉄の類が焼けて一つの塊をなす

法隆寺器械の焼けて其経を失ひ、碩子の点検の駁けて其の形を失ひ、おなじく此等のごとき数巻の暇なく、中に高麗の感に打たるゝ八七八寸の厚さ積うさ拾弐枚紙帯が固結して形を成し、紙質に混じあるもの、銘拓性のごとき業が猶列の如く氣をうたれ彩る現象を生じ難得ぬこと思はれ、殊に悲壮の言を高しとなす一巻の言葉を綴て被時腐と数えん其の中に数人の異稿を新るとなん其の中に一人一言のつゝを言うるとうて巻尾に其紙数千人を列記しとるもの、大七言味深き紀念物と又受けとる、実に大の高名に会うもの

なる燈（兼末に行脚）施主の数その間に来る
ものを合せ行る事あり、その数七見受け
ず、実に絶世表の数や地震の害を免
れ難き器械類をも出源さるべき、巻末に
の第二合併の末に列り見る
○此流廿四年の頃奈良県の多賀集といふが出版し
上社寺史）の一冊表と云ふ冊子を閲するに、未一位を
い奈良県内に九十七件の多きあり、滋賀県之に次き十八
件、大阪府七四数、京都府十一件、長野県
十二件、再版は皆十件以下にて二三件乃至五六件の
多きし、北表は同一寺社の建物を別に録し

あるハ年代各々異なるこのかなて、その建物の坪数を
録しあるに、例へハ東大寺の[illegible]年以前に建物と記
したるハ、法華堂、手水屋、北つ、手水屋、鐘楼、
東南院経庫、観音院経庫、南
大門、轉害門と[illegible]件に分ちて各々年代と坪数と
を記しるかことく、一件と云ハ二社一寺の謂なるさ
[illegible]、坪数の多きハ記録の寺の薬師堂五十五
坪を第一に推し、東大寺金堂の五十坪と
[illegible]仏法隆寺の大
講堂五四十五坪之ハ次く、尚法隆寺ハ二百五十坪の西廊
あり、堂ハ[illegible]故に[illegible]別記するも最も坪数

の大なるハ[illegible]坪数の多ハ[illegible]一坪の
もあり、尚法一千年以上を経る[illegible]ハ
亀、推古天皇十二年[illegible]仁寿、和銅大同、聖武天平、
雲鳳、承和、霊亀、養老、弘仁、延暦、天仁、天長、嘉
祥、天智、大化、白雉、神亀、長元、朱鳥等にて年代
明らかなるハ年号ハ[illegible]時代とす
社寺何れも多く存するやと[illegible]神社の四十二
寺ハ百弘[illegible]前の件数とハ別にして社寺の[illegible]
第[illegible]寺の建物の存[illegible]坪数に於て
ハ更に寺[illegible]或ハ[illegible]
なる表と撮りしるし、此表ハ果して正確なるやを
知らず、此表を作る後、年代の[illegible]

又々茂れしかりしかも長年月を経て正確の説と思いんさんとも、大勢の時代に表と極り知ることを得んか、日本建築の如き脆弱のものにして千年以上のものを良を始めとして殆んど各所に有りを見んば奥外国なるものを多きを感ず、也竟寺社人家と離れおるが為め火災の厄を免れんと欲す保護を加へくるるも亦るるべん、北野寺と雖ども多くは今日保護中物を以て如何の注意を加へつつあるも、年を経ると共に消滅を免すべし、北京を見るに、東京方と比べて千年以上の寺社一も無るべしうん武蔵国に千年前作書の物無りしかうとあるーと一も火災の為め消滅せざること推測し難からさる也、今第三の度に我つ五百歳後と千年以上の中に拘究許存するやとうるるも、[illegible]義[illegible]の左の三件と

○きさるる也

大日二　堂　二十二坪　東海道　日光　観音堂
同　仏　社殿　十四坪四合　北越沢　薬師　宗教堂
同　像　昆沙門堂　四十九坪　南越沢　浦佐　善光寺

武蔵国にあるものにあること思ひ及ぶ北条と極る

九月廿七日録

○四五年前京都に於ひる新友人に依て松尾の西芳寺を訪ひ其の庭園を見て赤寺の什物を見ーこと有り、北寺の庭園を観る光芳の

味を以て立陸ひ〻大池あり、志賀樹天〻参〻と書く、
満園芸蓋〻と亦地を見す尾後数十の礎を拾
つて登る不あり、一門あり入れば更に一境地を開く今
八園日治堂宇頗廣すと雖も幽家の趣掬
す〻し、寺僧に北園庭夢窓四の仏の不とあり
仏〻園の係を張ひれ果て西芳寺の庭園
紅葉の事を載す、其文〻〻見る不と吻合
するを以て、暦応二年己卯の條下に云く
夏四月卓錫西方数院作禅院、北寺八聖武天
皇天平年中有釈行基者云〻力化衆中、嘗
建仏寺凡四十九所、今之西方其一也、後百年
平城天皇太子、弃儲宮、為沙門、天皇封為

真如親王、居之久〻〻再来五百年、凡庸相継
而住、寺殘甚、檀越某親戚厚禮勤請師
忻然曰、吾素慕亮座主之風、而今得西山居
為不亦善乎、輒改西方舊名、為西芳精舎、掲
額蓋取祖師西来五葉聯芳之義也、仏殿本安
無量壽仏像、今以西来坐扁焉、堂前舊有
大樹花枝、春時花敷稠密、殊妙為洛陽
之観也、昔仏光師爺題掲花偈云、満樹青低烟
煖紅、飄〻白袖是春風、現成一段西来意、一片
西飛一片東、何其宜哉、北境之北北似乎識記也、
殿南新建一閣、其上安奉水晶宝塔、名曰無縫
塔之中、貯如来舎利一萬顆、閣之下曰瑠璃殿

堂閣僧舎之間廊無環行、隨其地宜、繚繞回復、
皆備禪観行樂之趣、開浩池、道寸伏流、刃出石
罅、潺々如洗玉、可喜也、白汀之洲、怪松之嶋、蒼
樹之蔭、間錯其上、舟泛漣漪、館影乱中、天
下絶景、似非人力之所能也、名池曰英金、舟所泊
之亭曰合同、又直閣之南北、立二亭、南名湘南、北
名渾北、披奇覇秘、百度一新、京城卿士大夫、騁
人墨客、洎四方来游者、因北斗観、始嚮師道者、
往々有之、時赤迅筆、題廊壁間云、仁人自是愛
山静、智者天所樂水清、莫怪思憂敬山水、只因
藉北礪精的、構小亭、掲以礪精、又於山之後絶
頂設亭、窓遠、其所入門曰向上関、前榛開徑、為

四十九盤、而登危磴、曲折之間、苔滑雲粘、蒼木
陰森、未到半山、別卓小庵、扁曰指東、用然秀
才問意産主故事也、云々
当此其康永元年、四月、右大上天皇、西芳寺に幸
の事を載す、観応二年、地震の為、西芳山、崩潰の
事を録す、此頃師重患、為太上皇、観臨度を問ひ十
数の後、帝も臨幸、度を問ひの事、と記す、師の塔銘
にも西芳寺の事を載す、前物文を略叙しなるべ
んべ、美と載せず、要すれば西芳寺いまが晩年、益々の
不也、はの七十七、寂の北の京、北の庭
園い京都に於ても最も名園と称せらる、金閣寺、
庭も之れに則りなるものと侍べくらう　九月廿七日識

○古池素三帝寸珍画帖を拡げて、家蔵寸珍書画帖
既に百と元つ、多くは北男の供給に係る、皆獲るべき
「和鳴」の二字題署天保丙午春三月の巻首五
枚皆古壺の酔意毫墨を画中に淋漓たり、
無を寫す、石あり佛手柑あり、蓮果あり、皆白雲外史
と署す、皆印有り、唯此一画に筆を以て圃の印を
此に、石菖春秋二景二枚淡彩を施し画も意あり、梅
花日月を画く、長崎海田三枚石を画し瑣則成を
と題す、栗の図絵に云ふ北地方多見栗樹凡士太夫
宅以近野外村落無所不種蓋寒国之物矣と
仙蓬の寫なり、一画耶馬渓を寫す
其の題に云く偶此小品頗寒郁馬之半角因憶紀

雪渓不能自禁」と一隅に「画狂画家画」の印を捺す、
海田の画、画家の画なり、「狂風敷」ある所以也、外に級
山衣海、古衣屋の屑少、等の特徴あり、多少の趣味
を寫す、小物序採筆のまゝ
故人川村西五趙凡夫刻摹古印五十枚を
世に流布する趙凡夫印譜に収むるの印を北
印譜に模倣の手に帰し後西五の手を後
る趙凡夫摹古印譜二冊西五の上梓するこの
印を北印を収めず、西五張して後印の沿革
を知れと欲せしに、近日未之人之んを書らん
と其に図る、「今日なる人もし北印の優を問はゞ、
余曰く趙凡夫の印を鑑賞するこの菊池惟重
画家に拾て

拜啓秋冷の候愈々御清榮慶賀の至に御座候陳者今般國民精神作興の爲に活用する目的を以て伯爵勝精君より海舟先生遺愛の別宅たる洗足軒と其の移轉敷地とを本會に寄贈せられ本會は喜んで其の寄贈を相受け申候此の敷地は池上村洗足池の東畔に在りて海舟先生の墓並に西郷南洲先生を祀りたる留魂祠に隣接し且つ日蓮聖人の遺蹟御松庵にも近接し精神作興の爲最も有効に活用せら

の外多くあるべきも、多くの人心を大雅の刻印を寄ろ珠重ち。大雅の印は一顆百円と心得べし、趙の印之れに準ずべし五十枚を五千円とするべきなれども、枕畑すれば拳印なれば、或は一顆五十円位かも知れぬ、先つ全部二千五百円以上五千円以下の間に優に売れるべきなれば、余之れを賜ふの方法、而も他手に渡らんことを祝す、堀井と賞つしめよと勧む、印篋すると海屋の題後あると少く

九月廿日法

○清水谷公爵は今日山成信夫氏を案内して

るべき場所と被存候間洗足軒を移して中樞
と爲し清明文庫を設立して國民精神涵養に
資すべき圖書を蒐集し尚ほ講堂をも設置し
て講習研究の道場たらしむるの計畫を相立
て申候に付ては右設立の趣旨を宣明し計畫
の概要を開陳し御高見をも拜聽仕度候間御
多忙中恐縮の義に候得共來る十月三日(金曜)
午後四時東京驛前日本工業倶樂部に御光來
被下度此段御案内申上候

○先哲叢談後集に四方の書を得て淚を揮
飼敬亦の柵外書を錄しるるあり、卷末の跋を見
るに摩崖碑南の花を借覽し、其の詩ふこと位う
せて所見を錄しうとあり、翻讀すること能ず淚
元にを見る事の如く、惟だ本文を離れて解し難き
ものあり、一本の刻本の柵外に三人を錄し(採)た閲
のみ即可也、敬所の跋に云く
余近年數移居、因戯賦一絶云、西歟東僑或
從居、夫妻家計共身雲、瘦顔猶具一雙
眼、隨看堆黄天下書、未窺、患眼廢業年
餘、終日一目、須借先哲叢淚、杜士毅(摩崖碑南)
此書詳諸儒履歷、可愛歟也、但惜擇而精

間載宜妄、士毅言糸正之、無使讀者惑、因
午睡之餘、略標愚見、加以一二評論、且削正
揚辭失宜者、以累之、自笑今日家汁益窘
老年所覃作病眼一隻、狂奴故態猶再

戊寅七月十一日　敬所誌

北冊敬所の標評の外に長宜園山賀名海氏、今矣三
人の標評を交ぜ、原本欄外に北三子の書入あり、と
知るべし

○山陽文録と嚴しく云ふ一冊を得の流十二年刊行山陽
の遺文を輯めたるものなり、卷首に鷲峰敬堂の
序あり、ここに隨者山陽の執筆とあるを辨
こ抄出す

山陽敬子嘗て文評を作れり、頗有
所改竄、山陽未肯悉從其說、因而筆
如細絹、我文如緑布、細絹貴則貴、不可以
補綴綿布、其所以卓然別成一家者在此
蓋就字句精粗論其巧拙、安足以知山陽、
山陽ハ僕ハ大家文の序を作り正を一篇と云ふ、一
篇如の蟠黄をかくす、唯此評をかくす、山陽
の再び云ふ、と云り、改竄從横、雖黄珏々、其
の行々皆有、嘗て其の考しを見る、其の刊本
僕ハ大家ニ載する所と比較ス、一篇の改
竄と往々不合あり、而して其取捨ニ
就て山陽の意思を推ることあり、実ニ敬堂の此文

と為す

○昭文図書を渉り来て得たるもの

一二ちり

一沖縄集　十月一日記

北書の流三年鹿児島藩の刊行と
伝う蓋首に八田知紀の序あり
琉球人宜野湾朝保が三十六家
の和歌を書して版に刻したるもの
なり、沖縄集と名つけたるなり
和歌を輯めたるもの海内にも
もこれと同しかるべし、明治
後の刊本なれども稀歌

一玉葉新詠集　官版　二冊　合一冊

文化三年に刻したる官版なれども尤も稀歌
の書なり、十五行細字本なれど宋版の面
目あり、多く漢代の艷体の詩を収
む、

一赤穂義臣對詩　木活本　二冊　合一冊

北方大石良雄外十六人細川家に預けら
れ泉州の藩士其方堀内某が義士
に渡きを賜はりたるものなれど官本なれど
尚布するこの多し、この書の素朴な
年号並に紙が播仙間書肆の

本法家と関係するものとして入手し得易

かるべき

一 新醫 一名尚古医典 二冊 合一冊

此書我邦上代の醫法を諸書に就て考証したるものにして和漢の引ざるべきものを多く著者として

管米民之助なる巻首に序を加へ而して

の此書を深く信じ和漢を載せ

又冊後頼理、本石春庵、才の序を

載す天保年間刻する所にして、吉中

医心方の偽書なることを論する條あ

り、亦多察法のみならず此書に出でたるを

岸什分神遺方と共に日本医家の史

料とすべきものか、大同類聚方并に金

蘭方共に偽書なること医心方に類する

日板毒思なる中に考証あり

○山崎光治氏より先人の遺せる杯一個を示せられた、山

崎先人は杉崎楊亭の門人にして酒を嗜んだこと、楊亭の

日録中にも酒に関する逸話を載せて自

身の戒とした、高好な友人より杯を贈られたことを前に記

したが、自先生の杯と副へて銘の寸戒のみを贈られ

たが、家に二個あるから一個を好るといふて特に寄

せられた、其杯の径二寸三分程もある白磁の大杯で

外部に「庵思也再斯河」の六字を陶工に命じ作らせ
かせてある共箱がつきこれ柳亭先生
庵銘とあり、且つ前の野村氏の「花鳥」を中井敬所が隷書で
入れて副つてある、其の表紙に
杯銘 松崎慎坐先生四題 とある、自分は此の交りもあ
り、二人の風味もあるから喜んで此の贈を受けて
（十月三日記）

○稀書複製会で出した浮屠和尚銘、今記は不
記の体を具し稀覯のものと云はれてある、今と複製し
て原本を岩崎文庫の花鳥の外に庵銘の新た
てあるのがそうらしいから、稀んなこゝろ、後もて見
てあるのおもう味を感じる、浮屠の詠歌や詩を

多く取めてあるが、本文を浮屠とつゝく誰か昨近の徒
が偏墓ふしたるものといふ、浮屠の銘文は銘は元
永十年の仲冬ひ、挿絵を浮屠に見せて二人の
随伴者が同じてある、其の二人は誰なのであるうまま
に新んめ、此の前版は萬治二、六年刊行の
門版とあるのを編者の罪名を表
作はあるとうの浮屠とあるらしく、下付るは又五挿
が又十とか也ら又の字が脱してある、図は上下巻
とも二十八ある、或は芳川河宣の筆描きと
云が萬治二年に二八人僅に十四年きるさ
から、過ぐる此書は別人であり、若流
後に伝へ傳弘したものとすれば河宣のあるべきはず

言ひ難い、後日確定する迄の事業ひきつゞき（十月三日録）
○去る一日早大出版部を於て臨時株主総会をひらき
新株拂込残額四一株に付拂込を決し即時
拂込をすつかり、自分の持株新二百八十五株に拂込金
七千一百二十五円也、この金額は代理部より年三分
六厘の利を附し五ヶ年賦返済の約束にて借入れ、
此拂込方法に就ては前述の如く一旦は
銀行より借入の方法に據るべきかと考へたるも出版
部の在金を擔保とするは穏かならず、弁護の上出
版部より会資会社より代理部に低利資金として
貸付株主は代理部より借り受くるの方法に依る
ことゝ、但し株主中一部の如き無田大学に対しては此例に依

らず無利子の資金を役拂金として支出し毎年配当
を以つて支弁せしむることゝ、他の株主中一人の
又自分から出金しこれを他に全部代理部より借入
ることゝ、毎年二期の配当を以て元利を拂ふ迄
年間の完済の出来る計算にて、代理部（も利益
中より出屋を手数料として支拂する筈、余の部
四百持株主の弱の拂込いこんとも三万円位にて
る譯にて、出版部が新る方法に出でゝ、此年配当率
三割と上り人の嫉視を買ふ恐れもあり、納税率を高
めるの不利もあるが、かゝる資本の拂込をなくし配当
率を低くめ、且つ順次の乗じ完済全部拂込を
完済し他の面倒なることを防しいるせ

○昨年の震災前略ス脱稿し居る余が俗業頼山陽
其後折々増補一つ二日を移す間、ことし七月に残りあるに
至りて心つきあるこの事業情しも日々校訂を
免れず、今日漸々全部の校了に至り、一方印刷に回す
迄に至り肩の後々なる思を為す、校数の見申し
つき為めるが蓋し一冊五百頁
に近かんか半年中に印刷を了り、新年
友人に贈ることを期す、校正は大石君に委ね
しもの也

十月三日記

○三田村鶴為氏大奥に仕へし奥女中の生
活状態の研究を近刊の中央公論に発表せり、一
読すべきものなり、嘗て鶴為氏は古版本に奥
女中と同一なるの上巻図書頒と惟一あり、奥女中
玉鏡と云ふ宝鑑暦法の別なるを得たり、他に徐入の
ものなりという

○御四阿後東蒲原郡日出谷の公園に碑を樹
て土喜家平田氏の功績を偉なる筆を執れ八余
さまざまの係かあり、土地と余の間なる墓
墓なりしところ、平田氏も熱心の人、碑
の題文は親友の手を成る、その也き余の拙筆
に係る、地碑の陰幕の式を特に拡えて
行きの板なるべき、ここにうるへ一生の記
の切り板きを収めておく　大正十三年十月
八日記

日出谷公園に聳え立つ丈餘の碑

絶景の地に集まる名流

莊嚴を極めた除幕式

東京市原宿日出谷村に在る日出谷公園碑の除幕式は五日午前十時半から擧行された

當日は來賓として手賀に平田豐次郎氏、嗣子次六氏に合はつ子さん、新潟からは新水力電氣株式會社々代理奥山鑑敏氏、及び上杉塔之太氏、北浦原の旗野美乃里、津川町から關根東浦

管理局調査課を廢止
一、商船學校を文部省に移管
一、經理局を廢止し經理課とし
一、官房に屬せしむ
一、通信課は郵便課に併合
一、調査課廢止
一、電氣局技術課を業務課に併合
一、管理局調査課を廢止
一、庶務課を監督課に併合
一、經理局の營繕課と調度課を廢止す
一、第二原簿課の廢止

中村青年會支部長、遠藤庄次氏等に記念品を贈呈し來賓として關根郡長、吉田秘書官長、相田警察署長、津川町長の祝辭があつた後平田氏の謝辭、主催者の答辭で閉式し引續き山上に於て祝宴を開いたが清田氏の挨拶、平田氏の祝歌談あり清田氏の發聲にて平田家の萬歳平田氏の發聲で日出谷公園の萬歳を三唱して全く式を終つたが、同村は當日一同業をやめ式に參列し午後からは青年の相撲を催した

日出谷公園碑文

故阪口氏の撰

掲日出谷公園に建設された碑石の文は左の如くで阪口五峰氏の撰で成り書は市島謙吉氏、篆額は荒井賢太郎氏である

日出谷公園碑

東京之東蒲原郡。亂山層巒大盤亘。阿賀野川貫流其中。鐵路沿之北走達新潟。信要樞之區矣。郡人平田君豐次郎。其先左京亮舜範。蓋名氏族以驍勇著。所謂會津四雄之一。蓋名氏亡後子孫

収穫した後の莖を畑中に放棄して置いてはならない若し是れを放棄して置く時は冬眠の害虫が是に寄生して翌年は畑を痩せさせる原因となるから收穫後の莖は早く畑外に放棄せねばならないのである最後に乾は大正十一年に火乾は今年から乾地で新に試みたのであるが乾は生育時季及び乾燥時季に於ては僅期の成績を揚ぐることは出來なかつたが干乾は今年初めての試みであつたが比較的良好な成績を揚げ

の覺醒を促した式後

慰安

は故めてみの中で催された越後に生れ取り分け西蒲原地方に永居住して居り年から種々な事情の下にマダ彌彦參拜も出來ない人々も多數ある事を思へば悅は大したもので配達人の歡樂は

▲三十二年前讀、卷古寺店西村

◇大竹座

一日より秋季第一回別興行、西班牙文學プラスユ、パユエス氏原作主演ルドルフ、ヴアレンチ氏助演、ライラリー、ニアダー、ナルデー嬢出演「血と砂」九卷、亞キネマ提供、宮島健二關係、鈴木榮子主演、愛の牢獄五卷、帝國キネマ國特作品、潮みどり、市川百々之助主演、清盤と安珍市川猿谷、要三郎、泉春子主

ル映畫名花ホープハンプトン嬢演舞踊哀話「麗の明星」全六巻、市川荒太郎、喜十郎、東愛子主

歌舞伎代劇「江戸の花」「祇太吉松」全五巻

實昭示來。玆歷幾司風世也矣。

大正十一年壬戌小春月

衆議院議員勳三等阪口仁一郎撰

從三位勳一等荒井賢太郎篆額

日出谷公園に聳え立つ丈餘の碑

絶景の地に集まる名流

莊嚴を極めた除幕式

東蒲原郡日出谷村に在る日出谷公園碑の除幕式は五日午前十時半から擧行された

當日は來賓として手賀に平田豐次郎氏、嗣子次六氏並に令嬢はつ子さん、新潟からは新潟水力電氣株式會社代理奥山龜藏氏、及び上杉瑞之太氏、北浦原郡長、相田津山警察署長・吉田稅務署長、關山町長、並に隣村各町村等數十名であつた日出谷に清田常太郎氏を初め渡邊日谷村長、渡邊青年會長、渡邊部分會長を初め多數の人達の出迎へがあつて一同驛前の休憩所に休憩し夫より**數町**を隔てたる岩倉山なる日出谷公園に向つたが日出谷公園碑は故阪口氏の撰

日出谷公園碑文

故阪口氏の撰

揭日出谷公園に建設された碑石の文は左の如くで阪口五峰氏の撰に成り書は市島謙吉氏、篆額は荒井賢太郎氏である

粤之東蒲原郡。亂山層巒大壑盤亘。阿賀野川貫流其中。鐵路沿之北走逢新潟。信要樞之區矣。郡人平田君豐次郎。其先左京亮舜範。蓋名氏族以驍勇著。所謂會津四雄之一。蓋名氏亡後子孫末昭示來。茲庶幾可風世也矣。

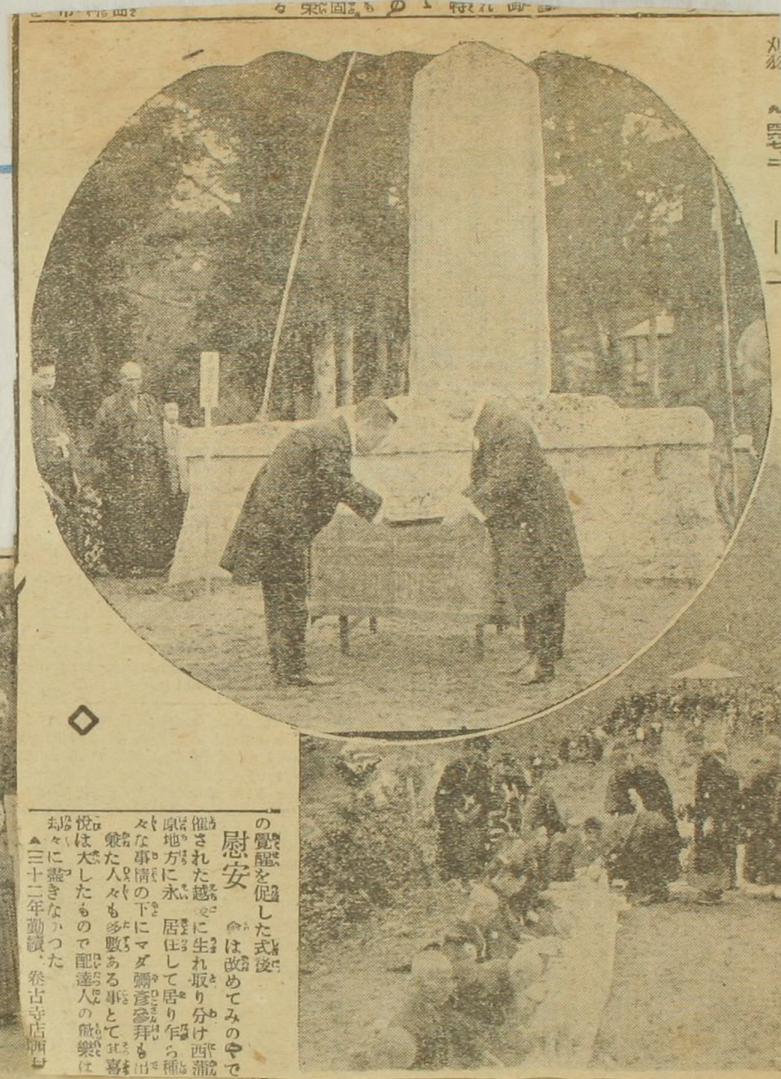
大正十一年壬戌小春月

衆議院議員勳三等阪口仁一郎撰

從三位勳一等荒井賢太郎篆額

市島謙吉書

管、商船學校を文部省に移管
一、經理局を廢止し經理課として官房に屬せしむ
一、通信課は郵便課に併合
一、調査課廢止
一、電氣局技術課を業務課に併合
一、管理局調査課を廢止
一、庶務課を監督課に併合
一、經理局の營繕課と調度課を廢止す
一、第二原簿課の廢止



日出谷公園碑除幕式

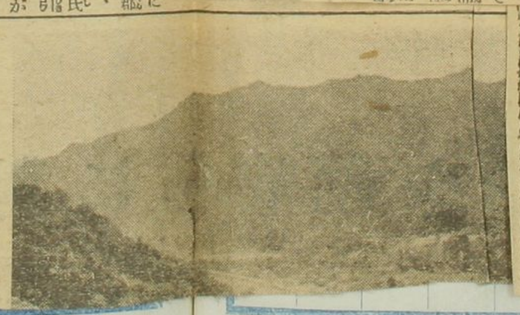
上 平田氏に記念品贈呈
下 碑前の祝宴會 前は忠魂碑

の覺醒を促した式後

慰安

會は故めてみの中で催された越後に生れ取り分け西蒲原地方に永居住して居り年ら種々な事情の下にマダ彌彦參拜もせず遂に人々も多數ある事として喜悅は大したもので配達人の歡樂は却々に盡きなかつた

▲三十二年勳績・巻古寺店酒



日出谷公園に聳え立つ丈餘の碑
絶景の地に集まる名流
莊嚴を極めた除幕式

東蒲原郡日出谷村に在る日出谷公園碑の除幕式は五日午前十時半から擧行された

當日 は來賓として手賓に平田豐次郎氏、嗣子次六氏並に令嬢はつ子さん、新潟からは新潟水力電氣株式會社々代理奥山鑑氏、及び上杉猪之太氏、北蒲原の渡野美乃里、津川町から關根東蒲原郡長、相田津川警察署長・吉田稅務署長、關山町長、並に隣村各町村長等數十名であつた日出谷には清田常太郎氏を初め渡邊日出谷村長、渡邊青年會長、渡部分會長を初め多數の人達の出迎へがあつて一同驛に休憩し夫より

數町 を隔てたる岩倉山なる日出谷公園に向つたが日出谷公……中村青年會支部長渡邊庄次氏等に記念品を贈呈し來賓として關根郡長、吉田稅務署長、相田警察署長、津川町長の祝辭があつた後平田氏の謝辭、主催者の答辭で閉式し引續き山上に於て祝宴を開いたが清田氏の挨拶、平田氏の感謝あり清田氏の發聲にて平田家の萬歲平田氏の發聲で日出谷公園の萬歲を三唱して全く式を終つたが、同村は當日一同業を休み式に參列し午後からは青年の相撲を催した

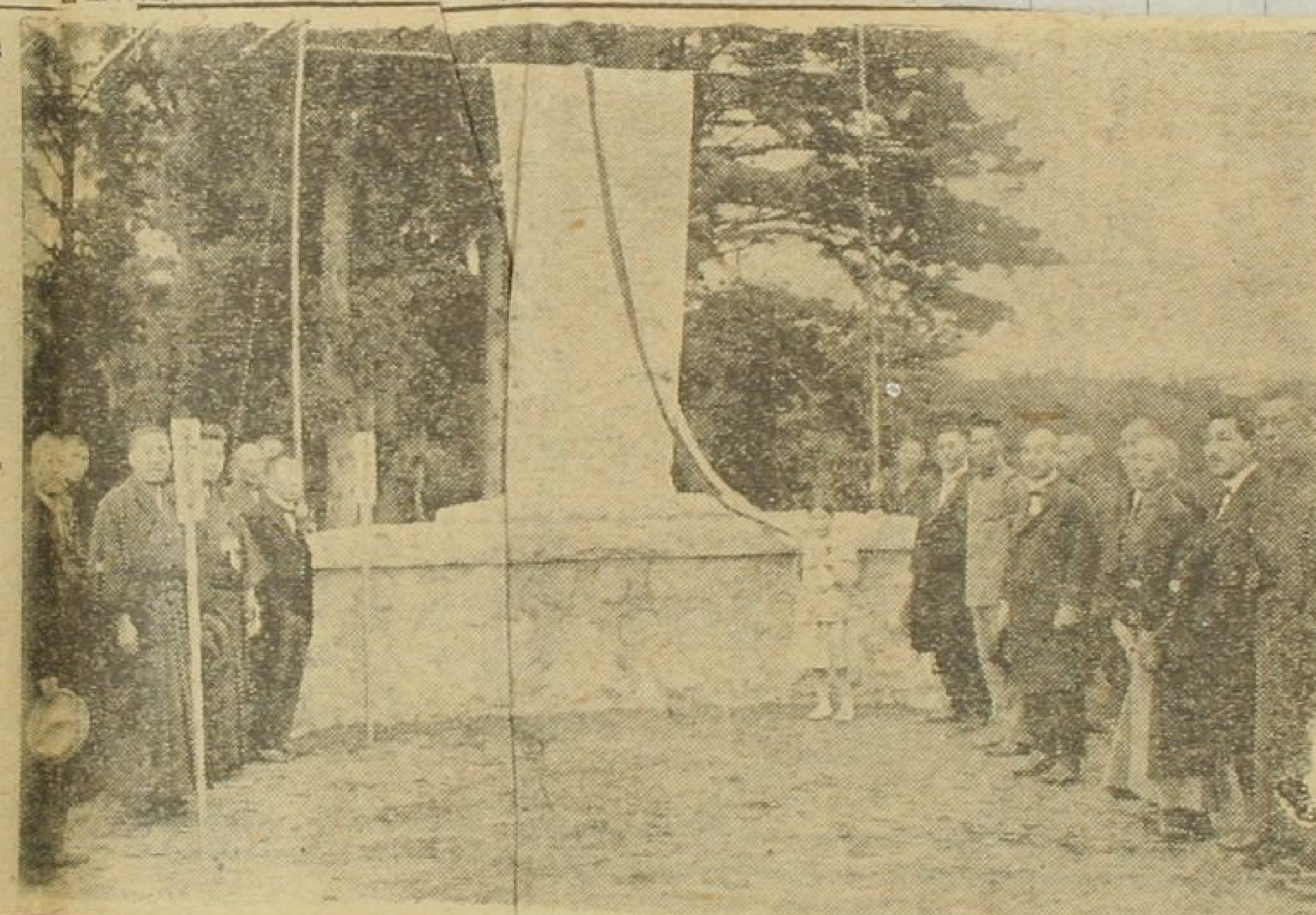
管
一、商船學校を文部省に移管
一、經理局を廢止し經理課とし官房に屬せしむ
一、通信課は郵便課に併合
一、調査課廢止
一、電氣局技術課を業務課に併合
一、管理局調査課を廢止
一、庶務課を監督課に併合
一、經理局の營繕課と調度課を廢止す
一、第二原簿課の廢止

日出谷公園碑文
故阪口氏の撰

前掲日出谷公園に建設された碑石の碑文は左の如くで阪口五峰氏の撰に成り書は市島謙吉氏、篆額は荒井賢太郎氏である

日出谷公園碑

東蒲原郡。亂山層疊大壑盤亘。阿賀野川貫流其中。鐵路沿之北走達新潟。信要樞之區矣。郡人平田君豐次郎。其先左京舜範。蘆名氏族以驍勇著。蘆名氏亡後子孫會津四雄之一。



◇除幕のよろこび
（上）日出谷公園碑除幕の刹那
（下）公園より見たる日出谷村

園は前に阿賀の流れを眼下に見下し後には杳掛の翠樹を眺め風景絶佳の地である、此公園の中央に平田氏の頌德碑を建設した碑面撰文は故阪口五峰氏で書は早稻田大學名譽理事市島謙吉氏、篆額は前農相荒井賢太郎氏といふ何れも本縣出身名士の手になつたものである やがて一同碑前に參列するや渡邊日出谷村長の除幕の辭について平田豐次郎氏の令孃はつ子（二三）さんが薄桃色の洋裝で紅白の手綱を引けば白色の幕は切つて落されて丈餘の碑が現はれた、それより建碑委員長

清田 常太郎氏は工事報告をなし次で祝辭を朗讀し平田氏に記念品を贈呈し終つて工事に從事した清田宮平氏、小田島菊治、鈴木丑松、德灑支部長渡邊春勝氏、

業賈大明中。移居津川驛。爲會津藩御用達。出産饒尤富山林。而在日出谷村五千餘町歩。樹皆數閲蓊蔚參天。而峻嶺窮谷甚險絶。自古以來斧斤未入。君又沿長走川開鑿新道。自水澤至長走三里餘。役夫數萬人。糜貲十五萬餘金。川中巉巖交錯。君又剷之以殺險湍疏壅塞。於是伐採之計始成。于水于陸日運巨材。而自水澤至日出谷驛姑里許。孔道崎嶇行歩甚艱。君更投萬餘金修之。村中山擴木鹽殊之間地。青年團以無運動場爲歎。君劃驛北一區之地。劃公園以充之。村民亦得遊息之處。春秋佳日。老幼熙々成謂平出君之惠也。乃胥謀立碑謁予文。予於君非一日之雅。父老亦多相識誼不可辭。今茲八月自東京歸途過于此。清田常太郎、渡部宇三郎、遠藤勝太郎諸子導而觀公園。園據巖倉山故多松樹。平田君更移植櫻楓三千株。一徑盤旋而躋。山頂有雷神祠。祠前平潤。一千餘歩即運動場也。西有孤亭翼然架于峭崖上。俯臨形勢。平田君所經營歴々如指掌。清田子顧予語曰。當水澤西巍然摩天者爲棒掛山。蜿蜒流其下者長走川也。絕壁千仭走獸不能過焉。近者平田君規畫闢山門。道自三川村達阿賀野川、視既成之業。其工事尤更難。而其興功利物亦將有不可量者。宜乎村民稱其德不已也。顧方今時勢一變。不啻下蔑上貪亦凌富。滔々成風。而君與村民相得之深。如是雖由清田渡部諸子誘導得其。非君高義何以能致之。豈所謂富好行其德者非邪。予甚喜之。因記其始末昭示來。茲庶幾可風世也夫。

大正十一年壬戌小春月

衆議院議員勳三等阪口仁一郎撰

市島謙吉書

從三位勳一等荒井賢太郎篆額

育中に隨意に變化せしめて品質の改良に努めねばならぬ是れは一ケ月位で充分成功することが出來るから是れを爲すべきである、又大葉即ち莖の下位にある葉は比較的脆いものであるから早く收穫して

葉蒸を 早くすべきですこれは今年は昨年と同じく十二月初め頃から收穫するのですが葉蒸を早くするやうにし若しも此の葉蒸が遲延する時は其後の仕事が混雜するから是非促進方に努めねばならない、夫に是れは毎年當所から耕作者及び當事者に口癖のやうに常に注意して居るのであるが葉を

興行案内

新潟劇場 浪界新派の一人者として定評ある京山若丸は昨日より初日開演盛況を呈してゐるが殊に乃木將軍の一席が受けた尚六日の演題は花川戸助六（京山小若松）正直車夫（京山若清）科姫（山川丸）張春太郎 松鶴 名工甚五郎講二席（京山若丸）

◇松竹電氣館 三日替り

ways follows day, and when the night is darkest there is dawn at hand. The economic world always moves round; a period of boom is invariably followed by one of enchantment, which is in turn overtaken by a period of collapse, and depression. There can be no permanent boom, just as there can be no eternal prosperity.

An English oratorical contest for middle school students in Tokyo will be held at Keio University about the middle of October under the auspices of the Keio English Speaking Society, the members of which are upperclass men of the University.

The contest is to be held in place of the one usually held for students of higher schools. The Minister of Education is reported to have frowned on the practice of higher schools taking part in such contests.

Music Teacher: "Why don't you pause there? Don't you see it marked 'rest'?"

Pupil: "Yes, but I'm not tired."

日の英文欄（1）我が經濟界の

○文明論が十一月中文化歌舞会の雑誌を発刊するに付特に紀
に関し追懐談を述べんとせんとする世界に、自
家のもかく人と面白の業績を為せる当時
日を長くしたかの節々の如くである、文明
の推移を年代を通じて具体的に言ひて見る
無味かるべし、雑駁なる文化の混沌時代
往々相撞突を生じ相滑稽味が加はって、面
時の推移の跡を語るから、思ひ出る修養上可笑味
のある事実を挙げた。

一明治の初年に受けのような外国者の一二スマイルスの
主意編、譯者が中村敬宇であるから人名数字
（十三年十月八日記）

科書に用ゐられて居る、一時のスペンサーの進化説に
もとづき社会学を説くに、政治主義の盛
んであつた際、外人と筆談の浮気をかるスペンサーを
問ふて見つたことを、スペンサーを読したこと、廉吏級の
俗粧舞踏を流し、紙の政治思想、心後、
から起つた反動
一小説が西洋に倣り現物を写生
載ることを福地桜痴氏が
書いたに刺し時子が富士ともある書きき
と評した事、普文の小説、うちうんが戦争
主つ能はずしること、進に西洋小説の原色を模し
達人を出し得る事、ヤット徳川時代の小説
迄と謂ふ

一明治初年の教育制度、各藩一ていさうにて、自由であると共に果然学校に特色があり、その出身者も特色があると云ふ学校はすべて西洋をつくりたちつと、英語が好る教達し以、所謂ゴロ合ひ本に多く倣ひて来たること十年ら頃をもやうしとすること、政府のみ業務部と外人を多く用ひたるの比時に有る、所謂学校の規則と外人倫入し契約書を載せたるが如き一ヶ所の観ひある

一外人教授の内特に挙くべき人物、エドワードモールス（貝殻）文学教授ホートン（学生の思慕先生を困めること、法学教授テリーの法学の）論、フエノロサ教授の

講義の仕振り、深き印象を与へること、モールスカッテーの生物解剖、ホの教授方を定めたるモーレーの雄弁、中村敬宇の漢文の教授法

一日本に来た外人にいろく面倒な人物のあることと英国公使パークスの子、ボ氏学校の教授のキングが男傷の芝居を演じたること某校の外国教師が毎夜婦人を愛したること

一猶自学を唱道する福沢諭吉が廿五年間の保助者を政府に訴へし、靴の会社（西村紋三）の社員月助（ボ氏の足を助成して訴に助成したもの）

一蓬莱社を公使館として外四人と日本の名士階

後が初めて会し交驩しこれを以て條約改正の準備行為となる、米国公使の帽子が約矢しと失態と折角の思い立も水泡に帰しそうな

一 当日は薩摩にウエブスターの家者を賓客として、前略男爵の家族方をもそなえ、を前略男爵をはじめ、ホッケ●ッ公の引を及び、又外国人の夫人方、並に袖珍家者しに罪れしとなるあり強て憾中しこと、薩摩家者出版する事

一 文化輸入の第初風俗が區々に滑稽を極め、自分が初めの時分なれば早く別れを行つたこと、帽子の需用の一時も

多かつたこと、大学南校ひの学生が脚絆を横ゝて外国殿の海軍を学きなること戊辰の戦争に雪中里羅の脚を着けてみるとハ陸軍の前とするの三脚秋前ハ寒冷の上ハ雪を仏のとなる、首義陸三が初の戦争に参して初の事

時新聞紙に礼服着用生徒の名紙と称し、右尾と称して衛天文学の金紋里天鵞絨の社衣を着しこ生徒した

ます

一 京浜間の鉄道竣成の時開通式に、陸下親臨の海英国ども前と寄船者

馬車と云さんとし、其際御者をして其服装を馬の名人と御者とし、其服装を西洋に倣ふんとする方もとめ得ざるべし

一 維新後この新式流の印刷を始めし者は東京八丁堀の寝衣屋にして、弟十編の初号並に引つゝき第十編の二冊の初版、湯屋の遺失物を載せたるものゝ前の紙は多くこれを抱張形にせり、一冊につき二冊の字解を設くるものゝ前略男が滝男の意止を慶應年号と主張し、海外ひろめ流行を組んだ訳なれども、まいまいちゝ

なれは一種蔵すべきの字型を造つて今の世間流行の字の模倣なるべし、流版と為すべきなれば、之の解釈、或別なるべし、如何にしかきゝ、之を流版の大切味なるべし、其版いまだ或四方流行の下摺を直し、其版を引き今も流版社を造かなる者が有る

一 海軍業の印刷をなしこと、海軍孫が艦ちゝとなるべきの小艦を太洋に浮べて西洋と往復し無事を得るの事なること、住友の別子銅山の基礎奇績なること、振いさゝし時代ラロックとして外人を牧

ゆゑ備へん、漸やく約束成イザ起任とゆふ情
会に臨み、和船に乗つて海に渡ること危険
なれども承知せず無拠廣瀬幸平に八七
萬八千円の金を拵へて小蒸汽船を買ひ入れ
たり

一 世界の便利をなすもの日本の捨てもせず
歴史を繹ぬれば、馬関條約の結果外人と
通交を作ることゆゑ実に外交上一
抵不良の紀念碑なり、大限侯は捨て
此処の見多くの外人を引率し汽船にて
江戸湾を乗り込まんとの時に伊藤にて外人
が太廟を拝したいと申出るのゆゑ日本の

最敬礼なる跪坐を強ひられ其儀を六
ん外人が不満の跪坐をして後ろ指を指
のことなりしこと、伊藤博文氏拙
市に於て外人を引率して行かんとの時は
廣場会の施行せられ、音頭を踊
る婦人が五ツの拙者は外人を
喰つてかゝるコンナ場合の不便もあるの
うれを雪くすべく稼業を始めしことの
其情ガラ〳〵なること
一 政事堂を日比谷に普及まで大切の
つとに大概整ふ第の五十年一昔とゆふが
内沢十二三年の昔こゝ丁つて居る此日比谷の

繁昌する十年間、日ましに夜食ひるとに、此の追遠会を終結ハイカラに倣さんとて、芸人を招聘するに、ハ落語等を一切排斥し、その限られたる陽家引を手うすとなるとか三十名ひとうの中もあるとか、落語の集の者ひとつに、高座の家屋をすべて西洋式に改造おはせ、席上ニコライ氏が演説をやつて、飲食物を入陸軍の楽隊が奏楽をはじめ、これが陸軍の楽隊が民間の聘に応ずることあつてから始めてのことであつて、世を斡旋の肝要岸田吟香氏ハ盃を満座に勧めつ四へ

つて荒千の金を陽生に奏し、之れを音楽隊の費頭に充てしとそ。ハイカラの方向であつて、席上ニコライの十五年目に当れる日露戦争の時を引き出す機会ハ談話に移る

以上ハ談話し以順序を追つて談話しに入る業記ハ約百頁に亦んとする

上叙文化野蛮の既に、兼て日本文明と言の異一とする法令人の小倫の巻首に置く文化自人の為に擁護して為るのこれも義務さも比べ、其の故言の大意ハ左の如くである

昨年の大震災と大火災とは帝都を全滅
に帰しては、一世紀の間に築きいとれる文化、みるみる
有形上の文化も、一朝烏有に帰して、北文化の
由来をうと迄人で追懐し、どれも何れも築いとて
が誰れも惜つて築かれたが、その文化もどんな
賞歎すべき事があるか、どんな奥が付つ
とかを考へて見るのも、文化の研究や宣傳
を本旨として、ある市協会の務めあると云ふ
べきもの、実に大災の起る前に、佐野山氏の
文化の表彰を企ておき、種々の取調を従ひつ
あつた本会は、大災を経て見ると一層切に
此事を行ふの大切なる感ぜられたと云ふのも

如上のことも、実際があるばかりでなく、研究の
材料が堙滅に帰したもの、他のコンナ事を
合てることが、ちょうど困難を感ずると思ふ
かもあるが、現に北の大災に於て大切な材
料も実人を亡ひたことは、きっと親かるべ、例
へば明治初年から迄
北外人の氏名履歴のことも、ちょうどくの法宣者
の存したものとか、ちょうど既に他の文書と
烏有に帰して仕舞ったとか、本会も偶然震災
前に取調べを始めたものとか、或る方面の文書
八百冊、取つて、現に帝国大学の所蔵の外人履
歴の如きは百冊十人、直つてみるから、ちょうど

びとの比較をなす事項に関係ある書類を本会の副本を送付
し得るに過ぎざるべしと雖も、其の書類の中に外人の事跡
に関する書類を含むことあるべし、他の者有益なる
歟、永久に滅失せざる様保存し外人の事跡を調査
し取扱ふべきこと、百名位は言
ふまでもなく、原本が無くなりてみる
と云ふ仕末になる、実は原本が存在してゐる
としても、外人の氏名事跡調査は本会の経験
に因り甚だ困難を感じ、若し他日一十年
も後とせば、どんな困難を感ずることぞ
あらう、なほ本会はいくらか以前の年次
の外人を知つてゐる人がいい[redacted]存在してゐ

る、之後十年以上経つと殆んど外人の人も多大概
絶滅してあらうから、調査は甚だ困難なり
ましてや、それのみならず、外人中代表人物たる
のみならず、内国の人の氏名や事歴はおのづから倍
加りもし又取調の道もあるが、外人とならば
絶対とするの人全く僅に存するに過ぎず、文書に記き
ぬ、かゝる時に大切さを感ずるのである、本会が
二年間かゝつて集めた外人の氏名と略歴を二
万六千数名と迄入れ、氏名が各種の事門に
亘つてゐる、尚ほ此の上なほ多少あるけれども
代表的の人物のみを挙げるとすると、可なり

の取捨を要する、勿論本舎の取捨に漏れたるも
のもまた澤山あるやも知れぬ、六採ると可らざる
人を採ったこともあるかも知れぬ、邦産北斎翁
の場合と印刷と附したるも完備といえれ
ども、大成の後の完備と帰期すことにして、
先づ概略を知るの料として、勿論日本の文化
と寄與したる外人の文も、邦人の文も、
自身が大なる力のあったことは外人の数
つ其の功績のある人を挙げたるは外人の数
倍十倍するものがあらう、けれども今のはな
れを一々取調べるは煩に堪えず、北斎翁の如き決
して外人の功績の文を特に挙げる故高いはず、

が其の紀念碑と外人の履歴の文を収めたるも前
に述べたごとき理由の存するがゆえなり、文化の獨
立は極めて大切で、西洋の精神は徒らに外国の文
化を模倣し、後数千年の文に消耗すべきものなれば、
今日以後は日本は自から日本の文化を築くこ
とに力を致さざるべからず、復新
の事和に溯り外人の宝の所に文化は決して高る
可きものなれば、徒らに後年の数を生ずる基と
なるものもあるべしと雖も、之は当用と取捨
の宜しきを得るに為ちなれば、其の人と外
人に嫁す心きそなれば、外人に倣
うことは一概に外人に倣
することは勿論吾人の取らざる所の美を美

[illegible]を[illegible]と、[illegible]の批判をかく将来持續
すべき未だ小健全なる文化日ハ果して如何なるものか
を研究せざるべからず、これが文化顯彰會を
催すの大趣旨なり、文化を神祭して人を世にあらハ
すと共に、特に各所に講演を開き、既往文
化の得失をも批判せんと欲する日のひあり
○我邦初めて起つた大反逆罪、摂政太原下の
自動車に投擲したる、難波大助の公判ハ刑
法に基づき、最上級の法衛大審院に於て開
かれ、大審院長の其の指揮で始の前開廷と
なつたが、傍聽を禁ずる、新聞記者と雖も
許さるず、基くの官吏、義士各の弁護士に限
り入廷を許されたが、法廷内の事、記てハ、新聞紙
も書かれて初めて、校友高橋生弁護士ともに傍
聽を許されたが範圍のあつたが為の大略をかき得
ば、取調べの際被告ハ自己の印紙として法廷
内の礼儀を守らず、判事の問に答へてハ
何事も敬の所なく、時かれ答へなく、横田院長
なる主任判事ハ始終おやるかれ訊問し、飽まで
被告に悔悟を促さんとかめて、今又道人ハ悔
悟の心動くかもしれぬと誘動的訊問をなすと雖
ども、彼の冷然として、この行動を非と思ハず、
如何んぞ悔悟せんと操返すのみ、流石に温厚
を以て名ある判事も為すなく、漸や漸や

く訊問をうり、何分申立つべきこともあらば立てと、余
するに応んで彼れ小姿勢を改めて、清国何様の事
を語り説き出す所を少時聞けば、自分の斯る挙に出
なるも光竟支配階級の措置の宜しきを得さる
結果に外ならず、自分は何人に対しても此挙を敢
てしたるものなれど、自分と域を同じうするあの人々も
かく将来は益々多からん、現に自分の獄中に在る
士らも若入るる筈なり、「獄中雑記」に載せある其他諸
士の論文の如き言は焼毋うんも奚しまん全く
自分と同感なるべし、論する所なるべし、清国の招
亡あるん廿六歳の青年の一人と思はんさる所あり、
最後なる先輩に出でんすして事を企てることを望む

に謝し、親族に新しくも訣の辞を述べ、在獄中終始
厚交をかけたる秋卒も謝辞を陳べ、全く決死し
あしたるいんなる校子も校子なりとい
ふ有様なるも見れば全く何等の心を後ひ
深く誤信して終に至る能はず、大逆罪を以て断
頭台に立つあとの外なし、老父母兄弟親等
を御せんと新かんと法しなる本人の罪を弁護士の如きも
なし難く、三人の内一人は所域をなしたるものを就利益
に差出したるも言はず、他の二人七名は唯申譯まひな
所が陳しなるきさきといふ、十月分記
○なるべく日本に渡つてみる宋元あるの支那書に真筆で
ないあるべきことい言ふまでもなるべが、其の偽作の内の

[illegible]

の手に成れる支那畫丈けに過ぎないと想はれて居た。然るに山人は我邦各方面に於ける支那畫類を觀賞し、比較研究した結果我邦に於ける支那畫中には、朝鮮人畫家及琉球人畫家等の手に成れる支那畫の混在せる事を發見するに至つた。

李朝の朝鮮は、明朝に服從し、文物制度、其他殆んど明國を學び、非常に尊敬した。隨つて支那歷代の書畫類も亦朝鮮官民に珍重せられ、續々移入されたのであつた。而も是等の支那畫は、朝鮮畫家の贋作模寫する處と爲り、或は朝鮮人に、或は日本人に續々提供せらるゝに至つた。今日朝鮮の貴族閥家、李氏家、其他に珍藏せらるゝ支那畫を觀れば、間々眞筆の存在を見るも、大多數は朝鮮畫家の贋物である。斯の例から考ふるも、德川時代、若くは元龜天正時代前後に於て、朝鮮から我邦へ傳來したる支那畫は、其數決して少からざりしや察す可しである。而して邦人は朝鮮畫家の手に成れる支那畫を、全然支那人畫家の支那畫として之を受納し、之を珍重し、子孫永寶の家寶として所藏し來つたのである。朝鮮人と同じく琉球人に於ても、支那書畫を尊重し、之を僞作模寫したるは疑ふ可くもなかつた。福建、廣東の支那畫家にして、琉球に遊べるもの少からざりしは史實の證する處である。淸朝嘉慶年間の名家蒙泉外史、奚岡の如きは、再三琉球に遊び、同地の風雅人士に歡待せられ、少なからざる書畫を遺したといふことであつた。

琉球人の畫家の手に成れる支那畫が、我邦に移入せられたるは、何等疑ふことが出來ない。我邦の支那畫中に琉球畫家の支那畫が稀世の逸品として保存せられつゝあるは、一面頗る滑稽の樣である亦、邦人畫家の支那畫に比すれば頗る上出來であるからして、必ずしも輕蔑す可きことではないと思ふ。

夫れ斯くの如く我邦の支那畫は、支那人の手に成れる支那畫と共に、邦人及朝鮮人、琉球人等の手に成れる支那畫の混存することを知らねばならぬ。假りに我邦に於ける支那畫數を三十万幅なりとすれば、支那人の支那畫は約半數、則ち十五万幅、邦人の支那畫は約十万幅、朝鮮琉球人の支那畫は約五万幅と見做すこと相當なりと想ふのである。而して是等三十万幅の内支那人畫家の眞筆(贋作模寫にあらざる)は、多くも二千五百點を出でまいが、此の眞筆中に於ける稀世の逸品とも言ふ可き名畫は、其數殆んど百點内外に過ぎないと思はる。

我邦に於ける支那畫を判定せんとする場合は、數多の觀察を要するも、支那人及邦人以外に、朝鮮及琉球畫家の手に成れる支那畫の存在するを考へ置く可しである。例へば或る貴族の家寶に、李龍眠筆と傳ふる布袋圖がある。其の圖幅を詳密に鑑賞するに、ドウも支那人畫家の筆らしくもなく亦、邦人の手に成れりと言ふことも出來ない。特に印章の如き支那名畫家の用ふ可き印章でなく亦、邦人畫家の印章らしくも思へない。斯くて此の圖幅は殆んど判定に苦しむのであるが、茲に李朝時代の朝鮮畫家金石亭一派を想ひ出すに於ては、是れ或は朝鮮畫家の筆ならんとの想察を爲すことが出來るのである。李朝時代に於ける朝鮮畫家は、主として宋元明の支那

畫を學び、之を模寫し、之を贋作せるもの少なからざりしは疑ふ可からざる史實である。是等の繪畫は、朝鮮風雅人士の間に存在せると共に、其の一部は我邦へ移入し來れることも明白の事實であつた。朝鮮畫家中には、界畫の名手として支那畫家に勝れるもの、又は南畫の老手として支那畫家及邦人畫家に劣らざるものがあつた。而も精細に觀賞すれば、朝鮮畫家の支那畫は、其筆墨の軟弱無氣力なる、其畫格の品位なき、其落款の俗臭を帶べるなど、到底比較することが出來ない。琉球人畫家の支那畫に關しても亦、我邦の大雅や蕪村などに見るが如き、高雅なる筆致や潑溂たる生氣を有せず、何んとなく琉球臭味を帶べるを看取せらるゝのである。

然るに、是等の朝鮮及琉球畫家の手に成れる支那畫は、一旦我邦に移入し來るや、眞正の支那畫として歡迎せられ、或は東山御物に加へられ、或は大名の家寶と爲り、或は柳營御物に珍藏せられ、或は大寺院の寶藏に收められ、或は名家鴻儒の箱書を受け、稀世の珍品として有名と爲れるもの少からざりしは勿論であらふと思ふ。

我邦に於ける支那畫中、最も有名なる南宋畫家梁楷及牧谿の繪畫は、其大多數を贋作模寫なりと斷言せざるを得ない位いであるが、就中朝鮮畫家の贋作少からざるは殆んど疑ふことが出來ない。例へば、我邦の貴族某伯爵家に梁楷の三幅對畫幅を珍藏し、稀世の寶物なりと言はれて居るが、元來支那に三幅對の在在するが如きは、全然否認す可き事である。双幅、四幅、六幅と言ふが如き、對幅を見るも三幅、五幅、七幅と言ふが如き、奇數的對幅は、支那古今に於て之を見ることに爲つたのではあるまいか（所謂南宋牧谿筆達磨圖なるものは、其の描法から見其の無款名から考ふれば、李朝中葉の朝鮮畫家の手に成れる變態羅漢圖畫であらふと思ふのである。

李龍眠筆布袋圖の如きも、頗る疑問とせざるを得ない。支那歷代の畫目中に、布袋の名を見出せないのは、實に奇妙の次第である。我邦に於て謂ふ處の布袋和尚は、支那に於て彌勒菩薩と呼ばれて居る。彌勒菩薩の圖畫は、唐の畫家にして之を繪けるもの、宋の畫家にして之を得意とせるものがあつた。而も彌勒菩薩の圖は、我邦に於ける布袋和尚の圖に比較すれば、一見大に相違して居る。元末明初の頃より、漸く我邦に於ける布袋和尚に類似せる圖畫を見出すに至れるが、宋時代に於ては、布袋和尚の如き圖畫は名實共に存在せなかつたのである。

然るに、我邦の貴族某家には、此宋李龍眠筆布袋和尚の畫幅なるものが、稀世の珍寶として收藏せられて居る。李公麟（字伯時號龍眠山人）は、人物畫家として北宋第一の大家であつたが、其畫に布袋和尚を見るが如きは、流石の龍眠山人も地下に苦笑し居れるや想察す可しである。

東洋畫は、今や歐米各國の風雅社會及藝術社會に歡迎られて居る。就中歐米の畫家は、東洋畫を研究し、六朝唐宋元明の古畫に對して最も熱心に師事するに至つた。東洋畫と言へば支那畫も日本畫も朝鮮畫も琉球畫も包含して居るが、就中支那畫を以て東洋畫の代表に推さゞるを得ない。此の如く東洋畫の代表とする支那畫に就ては、幾多研究を要す可きものがある。唐宋元明淸歷代の繪畫を研究し以て、我邦に於ける支とが出來ない。況んや、中幅人物左右幅山水花鳥など言ふ三幅對は、全然支那人畫家の揮毫せざる處なるに於てをやである。

梁楷筆三幅對（中人物左右山水）にして、若し噂さの通り、其貴族の所藏畫なりとすれば、それは全然贋作なりと斷言せざるを得ない。何んとなれば、支那に三幅對なく、支那畫家は對幅に二種以上の繪畫を揮毫せざるからである。則ち、支那畫家は、中幅人物左右山水花鳥と言ふが如き、二種の畫を繪かず、山水なら山水を、人物なら人物を繪くのみである。三幅對の軸物は、實に我邦畫家の外、支那人畫家の繪かざる處であるからして、前記梁楷の三幅對と言へば斷じて支那人たる梁楷の眞筆にあらずと言ふ可しである。

牧谿筆達磨像の巨幅（某大寺院寶物にして現在は某富豪の珍藏品）に就ては、朝鮮畫家の手に繪かれたるにあらずやといふ疑問があつた。元來支那畫に達磨圖を見出すこと能はず、唐宋元明歷代の畫界に於て、達磨と名附けたる圖幅を見ず。或は羅漢渡水圖、或は巖居羅漢圖、或は維摩說敎圖、或は祖師授衣圖、などの畫名を見るも、達磨圖に至つては淸朝に入り、漸く之を見出せる位いである。祖師授衣圖の祖師と言へば、無論達磨に相違ないのであるが、而も此の祖師の圖樣は、決して我邦に於ける所謂達磨圖（巨眼一文字口の）ではなく、普通の羅漢圖に過ぎないのである。想ふに、我邦に於ける所謂達磨圖は支那に於ける巖居羅漢圖、若くは渡水羅漢圖を基となし、朝鮮人畫家の手にて一筆畫風の圖に變化され、更に我邦に入りて狩野畫派の蘭葉描にて、特殊の達磨圖畫を顧れば、我邦の支那畫は其大半支那畫家の手に成らず、或は邦人、或は鮮人の手になつて居る、則ち日本の支那畫と、支那の支那畫と頗る相違し居れる所以であるが、而も眞正の支那古畫を選み出し、之を研究するに於ては、我邦の美術界に多大の貢献を爲すことゝ思ふのである。（完）

●大正震災繪卷の展觀

大震災一周年に相當する九月一日を中心に　八月廿九日から九月二日迄五日間白木屋呉服店に於て桐谷洗鱗氏筆大正震災繪卷が展觀された。繪卷は高二尺位長十五丈餘の長卷で、卷首に當時の詔勅を揭げ、次に猛火に包まれし東京市の遠望を始め、最も被害の甚しかつた本所、深川邊、及び淺草公園、吉原邊の慘狀、日本橋、京橋、宮城前、丸の〻等各方面の光景を、約二十面に描き、之に一々詞書を添へ、終りに當時の內閣諸相、並に諸宗派の管長等、二十餘名の感想跋文を附してある。筆者は東京近隣の地に住し震後第三日より一週日餘、苦心慘憺、非常の危險を冒して現狀寫生に奔走し、材料を蒐集したので（東京に幾千の畫家が居つても、全市大混亂裡に於て、斯の如き努力を爲すは全く不可能であつた）此の大繪卷が大成せられ、之を後世に傳ふるを得たのは欣喜の至りである。殊に斯種の繪卷を作すは洋畫家には望まれず、亦日本畫家でも山水、花鳥、人物等の一方に片寄つた畫家にも望まれない。然るに多年浮世繪を以て立ち、佛畫に轉じて一派を創成し、加ふるに風景及人事の描寫にも、堪能なる筆者を俟つて成就されたのである。只憾むらくは、筆者の最も努力せし繪卷の最重要部が、一丈餘宛三ケ所に亘つて其筋の命に依つて、布片を以て覆はれ、展觀を嚴禁された事であつた。

光琳と乾山（下ノ二）

小森彦次

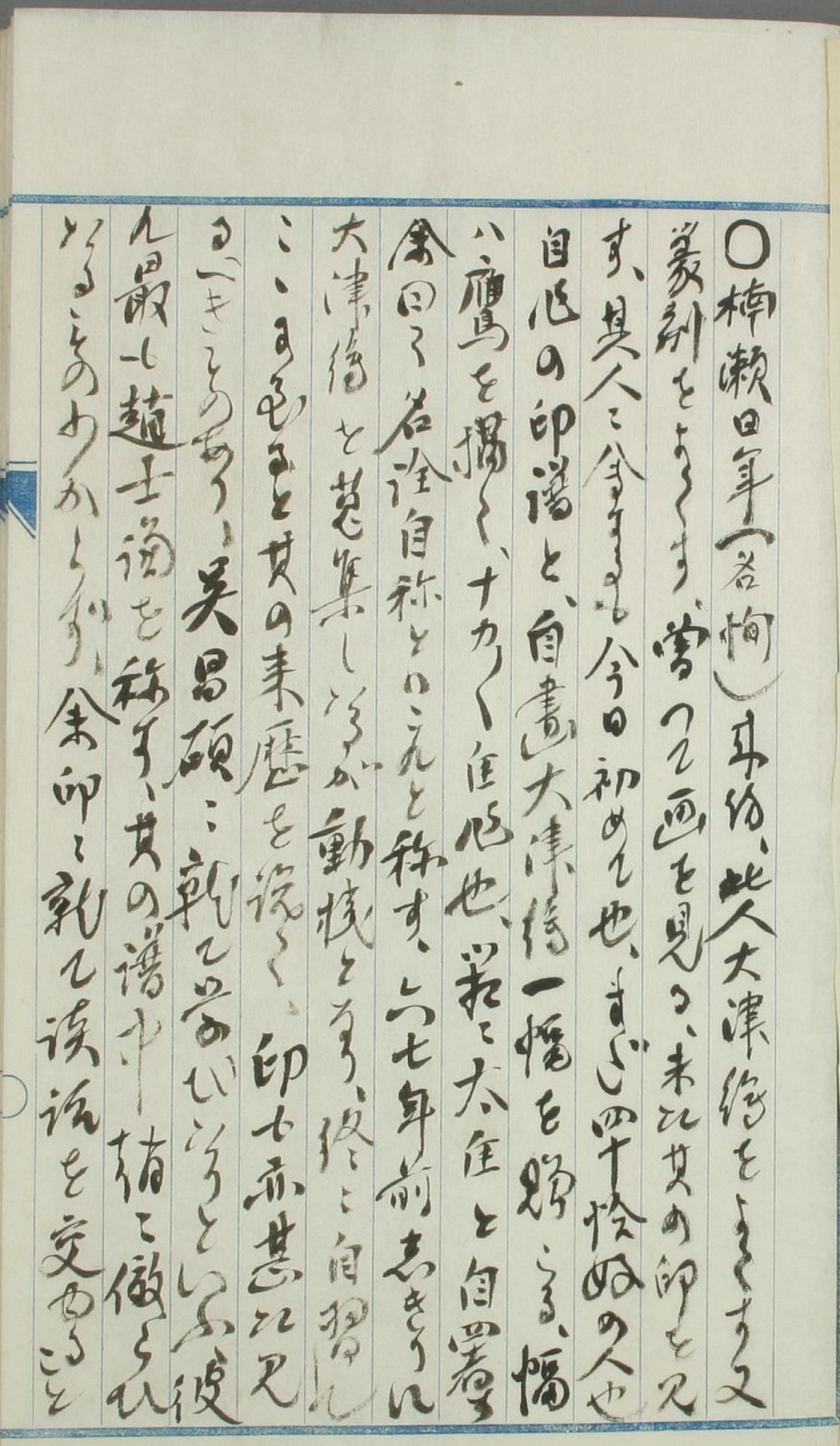
▲

斯くの如く、光琳にせよ、乾山にせよ、其の技風を繼いで世に立つた人々は、孰れも、あかの他人なのである。

光琳の畫風は、何帛、始興等に相次いで、酒井抱一が出て其の畫風を興したのである。然し、光琳の畫風も抱一と成つては、餘程、技巧本位に墮して、聊か、拵らへものゝ觀が無いでも無い。

抱一は、光琳歿後四十有餘年に當る、寶暦七丁丑歳（皇紀二四一七、西暦一七五七）――一説には同十一辛己歳（皇紀二四二一、西暦一七六一）――に、姫路の酒井家十五代忠恭の子なる忠仰の子と生れ、名を忠因と稱したが、長ずるに迨むで、自ら、大名の生活を厭うて、一向宗に緣つて出家し、抱一上人と號したのである。

繪は浮世繪から出でゝ、遙かに、光琳を慕ひ、遂に、自ら一新機軸を出だした人であつて、光琳を慕ふの餘り、能く、光琳の印を綴拾して、文化十二乙亥歳（皇紀二四七五、西暦一八一五）六月二日、光琳の百回忌を營むだのを切つ掛けに、「尾形流略印譜」一冊と、「光琳百圖」二冊とを梓に上したが、尚、文政九丙戌歳（皇紀二四八六、西暦一八二六）六月二日には、「光琳百圖後篇」二冊を世に公にして居る。先是、文政六癸未歳（皇紀二四八三、西暦一八二三）十月には、「乾山遺墨」



斯くて、抱一は、文政十一戊子歳（皇紀二四八八、西暦一八二八）十一月二十九日（一説十一月二十一日、或は十二月二十四日とも）に、遷化したのである。

▲

却説、乾山の方は、何うかと云ふと、伊八の歿年は分らぬが、乾山の歿後、八九十年から百年も經つて、文政、天保（皇紀二四七八―二五〇三、西暦一八一八―一八四三）の頃に、京都に吳介と云ふ者が出て、自分から、勝手に、乾山三世と稱して陶器を燒き、折柄、天保二辛卯歳（皇紀二四九一、西暦一八三一）乾山の百回忌、（眞實の百回忌は、天保十三壬寅歳（皇紀二五〇二、西暦一八四二）に丁る可きであるから、天保二年は、實は八十九回忌なのである。）と稱して、鳴瀧の土を採つて、香合を作り、是れを知人に配つたと云ふことである。是れは何うも、自ら、乾山第三世と名乘りたさに、名を賣る手段に行つたものとしか思はれぬのである。

次ぎは、江戸吉原の名主西村藐庵が、乾山第四世と呼ばれて居る。此の人は、天明四甲辰歳（皇紀二四四四、西暦一七八四）に生れ、近衞三藐院流の書を能くし、且、又、古筆茶器の目利きに造詣が深く、茶の湯、俳諧、琵琶などの諸道にも通曉して居つて、抱一上人とも親交のあつた程の人物であつた。抱一に後るゝこと二十六年、嘉永六癸丑歳（皇紀二五一三、西暦一八五三）十一月二十日に、壽七十歳を以て歿して居る。

次ぎは、五世とは云はなかつた樣であるが、三浦乾也（明治二十二年己丑歳（皇紀二五四九、西暦一八八九）十月七日歿、壽六十九歳）が、其の後を嗣いだのである。

二時頃に見てゐる、且つ余が家義の印譜を示し回覧す、十カ〆の才子也、今後往来を約して別る、彼れの印譜「坎龕印存」と云ふ、坎龕の別號也、十月十日記

雲火に羅つた城壁国手のやけあとから一個の大印があらはれた、見ると国手の氏名を刻したものであるが、鈕の南面に「丁鈍の印宮」が或る字刻されてあつて、正しく丁の仏と称ずるものらしい、多分印北丁の刻したものであつたらしい、何故に改刻したか、国手氏が丁を知らぬはずはない、それは想ふに改刻者の益田翁遠であるのを驚ろく者あるべき事柄である

もあるまいに、利慾の人だと日本人は誇つた、日本の支那に於ける間に古物印で騙る偽の高いものを武田と云ふ見出だす、中に日本の古瓦で模造したものがあるそうである、大分良い物それと古瓦ばかりでなく仏像を造り、鋳金の術、塗金の法、古色を帯ばしむる術も極秘である、物それと支那人も之れに一杯喰はされることが往々あるとの事、日本に於ける古印、古瓦の日本模造の逆輸入が無いとは云ひ難い、注意すべきことである

○十月十日、多数案中、幸ひ得た一二の書籍を左に記す

一 隔の蓋 精 後入

陶を切って扶詰をなし一面風俗をあらはすと共に当時の風刺を寓し絵の谷冊帖式数を[illegible]絵の中に[illegible]ヤレフケツリレフケの足掛[illegible]をあらし[illegible]其他猥褻の絵もあり、北斎一二冊八坊写に数見するこもうんとも十三冊の揃ひ者に極めて稀んこ、幕末の宮武外骨の北斎を引くこのうつと一笑を禁ずる能はず、北斎上方版也、上方にも[illegible]あるべし

一冊

一 墨淡

古梅園の[illegible]古梅園墨

淡墨墨業図第二紫墨の大版を拓して校こに上はもしくるこの墨を[illegible]る度毎用に心りなるこのうつるか余は北の墨業図を愛す

三冊

一 獻替録

萩原裕の著す所也校本ハ[illegible]本ハ[illegible]

かくこの[illegible]北斎ハ若者が学つ[illegible]

[illegible]出[illegible]首[illegible]学問所

[illegible]の検印[illegible]つ若者の[illegible]極め

て美[illegible]

一帖

一 江上外史 書簡

清人江上外史の書簡ハ文晁と[illegible]

えらぶ論こ、珍らしかきんと、著者の
自筆を刻して活版とす、ゆゑに
こ稿こ、北支の支那刻うえ、著者の
細字一行の自筆版を、愛すべし
尤、数乗中上海廣小路の拳骨書(なるべき)共陳
列の硯墨印肉并に出書を見る、蒙古新飯盛葉
の上海を高らし来るもの、富田のまれに公指動
きゆゑハ可し、唯此愛こ其の自筆と代價表を收
め他の参考こ資せんとす

十月十日 ちるす

一一號　一五、〇〇　二七號　二〇、〇〇
一二號　一五、〇〇　二八號　二〇、〇〇
一三號　一五、〇〇　二九號　二〇、〇〇
一四號　一五、〇〇　三〇號　二〇、〇〇
一五號　一五、〇〇　三一號　二〇、〇〇
一六號　一五、〇〇　三二號　二〇、〇〇

孚水畫房

價格表

古名硯目錄

一號	六〇〇、〇〇	一七號	一〇〇、〇〇
二號	四〇〇、〇〇	一八號	八〇、〇〇
三號	五〇〇、〇〇	一九號	一〇〇、〇〇
四號	四五〇、〇〇	二〇號	八〇、〇〇
五號	一五〇、〇〇	二一號	五〇、〇〇
六號	一五〇、〇〇	二二號	一〇〇、〇〇
七號	七〇、〇〇	二三號	七〇、〇〇
八號	一〇〇、〇〇	二四號	七〇、〇〇
九號	五五〇、〇〇	二五號	一二五、〇〇
一〇號	一八〇、〇〇	二六號	三〇、〇〇
一一號	八〇、〇〇	二七號	六五、〇〇
一二號	一二〇、〇〇	二八號	五〇、〇〇
一三號	五〇、〇〇	二九號	三〇、〇〇
一四號	一八〇、〇〇	三〇號	三〇、〇〇
一五號	八〇、〇〇	三一號	二〇、〇〇
一六號	一五〇、〇〇	三二號	三〇、〇〇

古墨目錄

一號	三〇、〇〇	一七號	一五、〇〇
二號	一〇〇、〇〇	一八號	一五、〇〇
三號	一五、〇〇	一九號	一五、〇〇
四號	一五、〇〇	二〇號	一五、〇〇
五號	一五、〇〇	二一號	一五、〇〇
六號	一五、〇〇	二二號	一五、〇〇
七號	一五、〇〇	二三號	一五、〇〇
八號	一五、〇〇	二四號	一五、〇〇
九號	一五、〇〇	二五號	二〇、〇〇
一〇號	一五、〇〇	二六號	二〇、〇〇
一一號	一五、〇〇	二七號	二〇、〇〇
一二號	一五、〇〇	二八號	二〇、〇〇
一三號	一五、〇〇	二九號	二〇、〇〇
一四號	一五、〇〇	三〇號	二〇、〇〇
一五號	一五、〇〇	三一號	二〇、〇〇
一六號	一五、〇〇	三二號	二〇、〇〇

列の硯墨印拔并に出書を見る、雲軒飯岩葉の上海を高らし素を右に、富田のまれ公指動き[illegible]八[illegible]、唯此度こ[illegible]の田邨と代價表を收め他の表表に資[illegible]んとす

十月十日 [illegible]

えらむ必論こ、珍らしかきんと、著者の
自業を刻して活版とす、ものハ日ち
こ稀こ、北方の支那刻うえ、著者の
個人一往の風致を愛すべし

艾陳
吟葉
拓動
と収
す

支那古名硯古墨展覽會

目錄

支那上海　樂石軒主人
會場　平水畫房
上野廣小路西入

古名硯目錄

一　端溪水巖大西洞　魚腦、蕉葉白、青花、火捺、蟲蛀、綠豆眼、自然硯
二　端溪水巖大西洞　天青、鵝鴨眼、蓮葉硯
三　端溪水巖大西洞　蕉葉白、東瓜瓤青花、蟲蛀、黃龍紋、自然硯　（吳昌碩銘吳藏義刻）
四　端溪水巖大西洞　魚腦、蕉葉白、鵝毛微星青花、火捺、長方實硯
五　端溪下巖舊坑　（一名）麻石、冰紋凍、天然實硯
六　端溪水巖　蟹脚青花、火捺紋　（保合太和實硯）
七　漆泥硯　御物式　（名工星樂生氏之作漆箱付）
八　端溪老坑　羊肝色、微星青花、自然蕉葉實硯
九　[illegible]　[illegible]
一〇　玉壺冰　嘉慶年製
一一　碧琳館　嘉慶年製
一二　愼儉德　嘉慶年製
一三　廷春閣　嘉慶年製
一四　畫禪室　嘉慶年製
一五　雅量可師　恭苑膠聲　乾隆年製
一六　經神字意　學貫百家　乾隆年製
一七　雕龍鐫步　雅推肉論　乾隆年製
一八　藝苑登聲　精詣數經　乾隆年製
一九　史卡永式　書聖畫禪　乾隆年製
二〇　一朝相業　品發五絕　乾隆年製
二一　萬古清風　徹骨凌雲　乾隆年製
二二　閩里餘齊　文林暎采　乾隆年製

以上

支那古名硯古墨展覽會

目錄

支那上海　樂石軒主人

會場　孚水書房

上野廣小路西入

古名硯目錄

一　端溪水巖大西洞　魚腦、蕉葉白、青花、火捺、蟲蛀、綠豆眼、自然硯
二　端溪水巖大西洞　天青、鸜鵒眼、蓮葉硯
三　端溪水巖大西洞　蕉葉白、東瓜瓤青花、蟲蛀、黃龍紋、自然硯（朱昌頤銘朱藏鼎刻）
四　端溪水巖大西洞　魚腦、蕉葉白、鵝毛微塵青花、火捺、長方寶硯
五　端溪下巖舊坑　（一名）鄉石、冰紋凍、天然寶硯
六　端溪水巖　蟹卵青花、火捺紋（保合太和寶硯）
七　蒜泥硯　御物式（名工陳秀生氏之作漢檀材）
八　端溪老坑　羊肝色、微塵青花、自然蕉葉寶硯
九　端溪明坑　蕉葉白、火捺、黃龍紋、綠砂班、鸜鵒血紋、大圓師妹寶硯
一〇　陶　硯　大明成化年製、染付山水樓閣（大圓寶硯）
一一　宋端溪　羊肝色、微塵蟹蝦脚青花（富士香銘）
一二　端溪老坑　微塵青花、玉楮寶硯（高雨村銘）
一三　澄泥硯　明黃泥、三星拱照寶硯
一四　端溪水巖大西洞　蕉葉白、微塵青花、火捺、馬尾綠、翡翠班、鸜哥眼
一五　端溪水巖大西洞　微塵青花、火捺、黃龍紋（五福寶硯）
一六　端溪舊坑　羊肝色、翡翠班、銀砂（長方寶硯）
一七　端溪明坑　微塵青花、火捺（自然羅漢硯）（李長銘）
一八　端溪水巖　蕉葉白、微塵青花、火捺、翡翠紋（乾隆製）
一九　端溪水巖大西洞　蕉葉白、火捺、微塵青花（乾隆製）
二〇　端溪舊坑　猪肝色、黃龍紋（鸜鵒硯）
二一　端溪水巖　微塵青花（長方硯）
二二　端溪舊坑　猪肝色、微塵青花、蟲蛀、黃膽（天然寶硯）
二三　宋端溪　猪肝色、鄭毓青花、黃膽（細絲硯）
二四　端溪舊坑　羊肝色、青花、（雲上旭日寶硯）（子才子銘）
二五　端溪水巖大西洞　青花火捺、胭脂暈、翡翠紋（仙絲寶硯）
二六　端溪明坑　羊肝色小硯
二七　澄泥硯　大明年製、桂花班（長方自然硯）
二八　歙州硯　水波紋、小硯板
二九　端溪明坑　小硯、胭脂血紋
三〇　端溪水巖　青花、火捺、胭脂雲（遊魚小硯）（阿部基銘）
三一　端溪水巖　蕉葉白、火捺（小瓜硯）（明新）
三二　端　溪　冰紋、胭脂結（蘇樂白參硯）

古墨目錄

一　寔事求是　大明天啓元年　程君房製
二　乾隆御題　乾隆三十年製　大圓墨
三　紫玉光　乾隆年製　曹素功製
四　神　品　乾隆年製　曹素功製
五　豐澤園　嘉慶年製
六　鎮水齋　嘉慶年製
七　品詩堂　嘉慶年製
八　九洲清晏　嘉慶年製
九　坪篠軒　嘉慶年製
一〇　蘭芳書院　嘉慶年製
一一　委寶藏　嘉慶年製

一〇 陶 硯

一一 宋端溪 大明成化年製、染仙山水樓閣（大師寶硯）

羊肝色、微麻青花、蕉葉白、微麻青花、火捻、馬尾絲、翡翠斑、鸚哥眼（高士奇硯）

一二 端溪老坑 微麻青花、玉格寶硯（高南村硯）

一三 澄泥硯 明黃泥、三星拱照寶硯

一四 端溪水巖太西洞 蕉葉白、微麻青花、火捻、黃龍紋（玉堂寶硯）

一五 端溪水巖大西洞 羊肝色、翡翠斑、銀砂（乾方寶硯）

一六 端溪舊坑 微麻青花、蕉葉白、微麻青花、火捻（自然羅漢硯）（李氏硯）

一七 端溪明坑 蕉葉白、微麻青花、火捻、翡翠紋（乾隆硯）

一八 端溪水巖 蕉葉白、火捻、微麻青花（乾隆硯）

一九 端溪水巖大西洞 豬肝色、黃龍紋（端溪硯）

二〇 端溪舊坑 豬肝色、微麻青花（乾隆硯）

二一 端溪水巖 微麻青花、蟲蛀、真膽（天然寶硯）

二二 端溪舊坑 豬肝色、微麻青花、真膽（端綠硯）

二三 宋端溪 豬肝色、鸚羊肝色、青紫綠青花、真膽（端綠硯）

二四 端溪舊坑 羊肝色、青花、（雲上旭日寶硯）（子才子硯）

二五 端溪水巖大西洞 青花火捻、羊肝色小硯、翡翠紋（仙綠寶硯）

二六 端溪明坑 大明年製、胭脂暈、翡翠紋（仙綠寶硯）

二七 澄泥硯

二八 歙州硯 水波紋、小花斑（乾方自然硯）

二九 端溪明坑 小硯、胭脂紋

三〇 端溪水巖 青花、火捻（小瓜硯）（何紹基硯）

三一 端溪水巖 蕉葉白、火捻、胭脂雲（遊魚小硯）

三二 端溪 冰紋、胭脂結（蒲團白參硯）

古墨目錄

一 定事來是 大明天啓元年 程君房製

二 乾隆御題 乾隆三十年 大圓墨

三 紫玉光 乾隆年製 乾隆年製

四 神品 乾隆年製 曹素功製

五 豐澤園 嘉慶年製

六 諦水齋 嘉慶年製

七 品詩堂 嘉慶年製

八 九洲清晏 嘉慶年製

九 圩藻軒 嘉慶年製

一〇 棠芳書院 嘉慶年製

一一 委宛藏 嘉慶年製

一二 蕉雨軒 嘉慶年製

一三 頤和書屋 嘉慶年製

一四 環碧樓 嘉慶年製

一五 飛雲軒 嘉慶年製

一六 古香齋 嘉慶年製

一七 敬芳齋 嘉慶年製

一八 翠雲館 嘉慶年製

一九 煙雲舒卷 嘉慶年製

二〇 玉壺冰 嘉慶年製

二一 碧琳館 嘉慶年製

二二 懼俊德 嘉慶年製

二三 廷春閣 嘉慶年製

二四 畫禪室 嘉慶年製

二五 曜晨可師 慕范滕聲 乾隆年製

二六 經神字嘉 學貫百家 乾隆年製

二七 雕龍鳴步 璀璨肉瀹 乾隆年製

二八 參差晉聲 精韻鏗經 乾隆年製

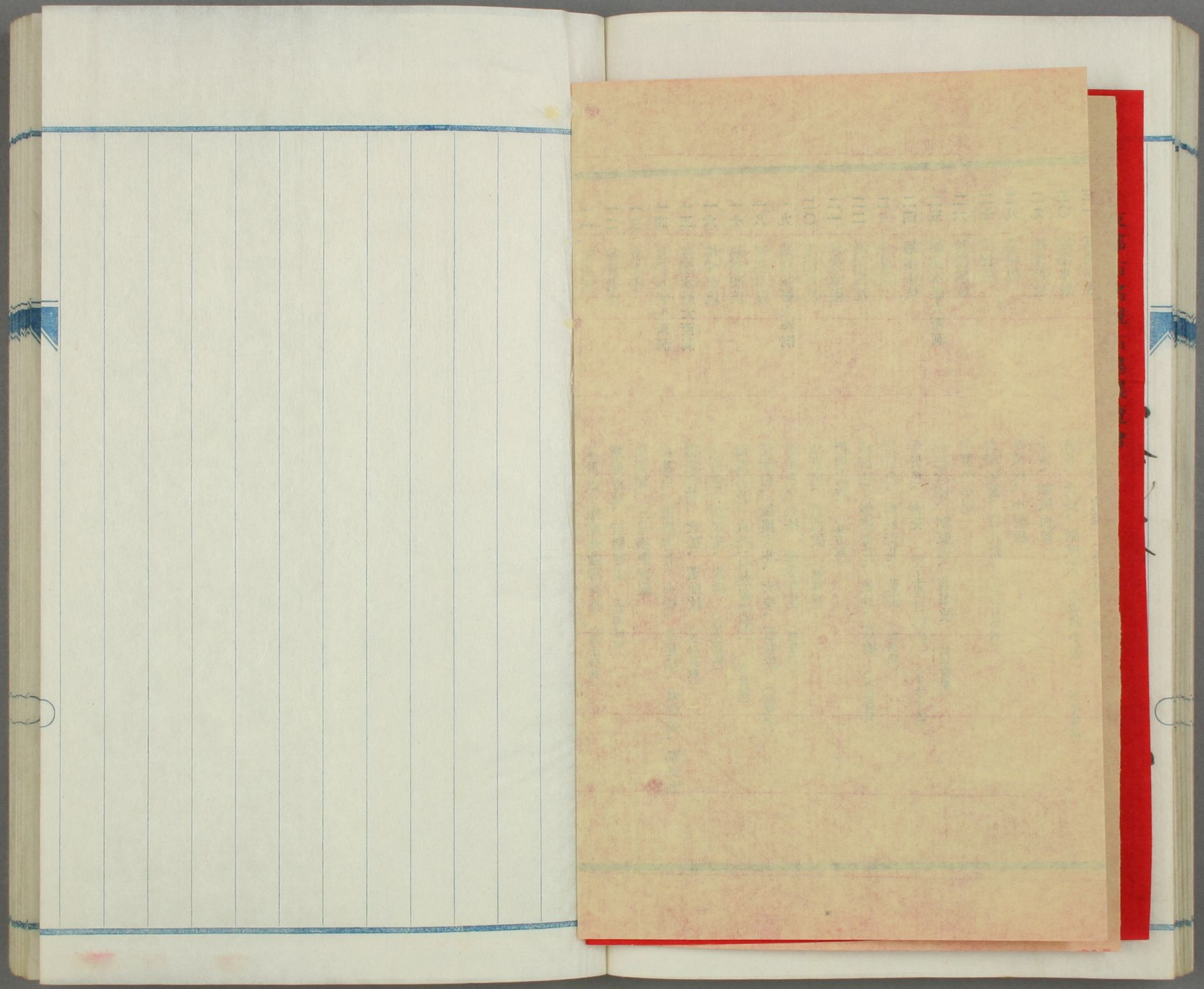
二九 史卡永式 書聚畫禪 乾隆年製

三〇 一朝相業 品要五絕 乾隆年製

三一 萬古清風 微骨凌雲 乾隆年製

三二 關里餘齊 文林藏采 乾隆年製

以上



○漸次脱稿に随業頼山陽の著作は小冊原稿を用いた為め二尺以上の堆を為すもの山高きが如し同紙が巨大なるに反し、活字本（一夕話の紙方ポイントより大きさ四倍）として実験にならぬこの見本がつかず、八ヶ月計算せしめたのみ約五百二三十頁ならんとあるうとの概算を得たり、山北原稿紙の内訳を見るに、山田殿城と書き直させたもの約千二百餘頁、これを新原稿の原稿紙に用いたのみ、各紙寸数の二倍とあるべし、自分が書きかへたのが四百五十頁これを字数が前者よりも倍して為す、一旦の山田と書き直すもの自分だけが出版せんとするのみならず、追ってこれを数ふるに数万に達す

四百五十頁かいつたものあるも、尤もこれが為めに一年以上出版がおくれたり、コンナ著述の出版は急くべきものへ、況し自分の写真十の者きは迄しかそうはならい、随分貧弱のものであつたらう

○先次故人とうたに西村時彦（天囚）の花木中名高いものが一題ある、これを伊地治本大学であるこれを足利時代（延文の頃）に伊地治家に僅う一本花を植てあつたのを西村と刻愛したのとせんへて為る、五山時代の霞刻本中に心あるが日本ひ訓點まむ附して版すれば大の二の八外ひるい、自分は之のを一段まるの様を得るこの

が、天因ハ歿する前に北海の震災を会し、其の後成
岡藩と新しい比、北陸地方けいはの都心へて既に高山
へ献納せり、自分ハ駿河にある筆記がまゝ利達
しきい、追つて入手し比上で更らに詳記するであらう
○栗本鋤雲の鉛筆紀事といふ一書ハ佛人カシヨ
ンの口授を鋤雲が筆録して幕末から明治の初年
に整頓と刻して出版するまでのなり、北原雅山得て関
する、佛蘭西の両説がいろ〳〵詞に巻くて吉いて
ある、其の中に魯佛が和講和後の事が記されて
あつて多少興味を感じたゝ如き出する
岡佛国近来敗国と誇示すべき盛産あるや
答 魯国既年和を講じて後帝新しく佛京へ入り

入れ列り謝す其時武国繁盛の第一たパリス城に
於て新に魯帝の旅館殿を設け殿中屋内を
盛花排列の為政こもるまで都も魯帝
左国の日の如くして一七伯りもさることなし去
れハ魯帝七其臣七陪第四の客人と共を
受えまして新に左国の志を為すの況人や
魯帝の左国にテレガラーフと設け左ちん
魯京ペイトルブルグの改庭の接待之こ南し
魯帝一言一動直ちに魯京と共に彼の国
朝野ともに安堵の志を為すの文ちゝ魯
帝七自国の挙動を日々新しく少きに大な
佛国用意の周密セるを悦び居り 北海新少

紙に載せて天下皆極盛の業と嘆美する是の所カレヨンなる人未だ詳かならず、左程に世と英国きあしざまに説く所あり、皇位継承の一義に就き左の記するところ英一貫一言英王西班牙のめきこと比々婦人継統の例間内にあるとは一人の妻嘉和廷に立てハ信光の君主賢に戎狄の道なりて以来ハ上古の名し

きさき

○鑄金家香取秀真の著れる鐘口年表あり又金燈籠年表あり、共に家蔵なるもの、後者は甚だ略のものなれ録する所少なし、此の年表に拠る銅鐘銘集せし

古くより有り、何れも奈良朝時代に生じたる、銅の燈籠は東大寺大仏殿ハ角銅燈籠ハ孝謙天皇の時代、田辺福寺南門前銅燈籠ハ弘仁七年なり、古有名なる鐵燈ハ其の目の偽いまもなく現物偽らず、蓋しの流の為め廣歩して七百年の寿を保ち難きも固るなり、燈籠ハ年代に於て最も古く、燈に記のあるハ正平二十一年後村上天皇あ義嘉嘉鐵鈎燈を最古とすといふ、以後文禄慶長に及び追々鈎燈流行表中に数見すれ、然れども其数の割合にあきハ北越地方に多かりと武ハ外国に移り移りわき武蔵にもとして大も多かるべし現に

国内地に存することを免れず原所を離れて一個人に帰せらるるものなり、元禄名低いたるき的材とあるし、文化文政頃に至り銅のスカシを表し寺の大門等なる所のすこしからのこの伝意をもて見るの勢迄るものといはざるべし、香西の説まは今は寺宝伝物段と為せらるる所の寺愛深き重の四件（後者は天文八年）鋳銅の鉦鼓花いろの形状文様他に比類なき奇物にして天下の絶品なるべしといふ、又芝文昭院廟の石数十基の細彫基は正徳二年の作なるものなるが空前絶後の大作とすべしと云ふ

○広瀬宰平の自伝『半世物語』と云ふ二冊を得て読む、是れ住友家の鋳山係官吏なる人の著

鋳業史の材料なるべきこと勿論也、住友家は大商豪の商人なれば、別子の銅山は長く物産なれども一時は閉ぢて沈淪し、政府なども借入を交渉と迄なりしなれば、広瀬の共ふしなるべし、北海道の共ふしなるべし、一時は住友の邸宅と校園とを共の窮状を示しなることあるべし、住友家に忘るべからざる功績のあるは勿論なり、伊庭貞剛分司伝を編めて広瀬の片腕となり、外人と同家に大なる功績あり、殊に八幡瀬の釈成を始に帝国に初めて起こしたりなり、伊庭は一面識あり、北海のことき今漫とするも能わず、因者録して保存すべきこと也

○京都大覚寺にて此度品々出版いたす後宇多法皇宸翰弘法大師傳は一本を獲て閲まるに、大師の略歴を漢文にて叙したるものにて、筆跡大師の風格あり、正和四年三月廿一日の款識あり、大覚寺の宝物にて著名のものなるが、此の帖に摺り初めて見るを得たり、宸翰は敢て珍らしからざれど、亀者の著書に成る高僧傳は珍らし、大正三年瑞璃版に附したるなり

十月十一日録

○蕉路道芝一記七冊（会二冊本）を始め得たり、此書元禄十五年の刊行にて、蕉陽小路常也の序あり、本書は人の編に成る、挿絵のみ

らずあり、古くは蕉路の補ひ書は恐らく、此書を第一に推すべし、蕉路同人等代作馬同が、あるも、時代明らかなきものなり

○四人異見人なる一巻の書、偽軸にて、北斗の寸尺は、多分小粉屋の定尺にて、拙者まるものなる、展べて見ると中に花冠あり、仏の如くなり、疎林うるはしく、椿山あり、門あり、西北は、椿山あり、色雲あり、雲あり、西北は、つしもあるが、別に真筆とも、合掌が動いたる、小粉屋にて、百許の寸珠書、帖あるが、いまだ、蕉林色、椿疎は缺けたるも、数多く他の画あるも、眼目が、濁れて、みては無かるべし、幸に一巻に六七の眼目級のものが、絵のまつてあるのを、何者の仕業にあるか、婦ひ、ならず

又比巻首ニ人口稠密ノ序アリテ影響ハ獨逸
法ノ手ニ成ルモノアル

○世界列國ノ盛衰ハ動力ノ貧富ニ依テ利害得失ヲ世ノ
中トナスニ比シ、文明ノ進人ニ四ヲ分ツモ動力ヲ多ク使用シテ
ハ文明ヲ計ル尺度ヲ動力ノ消費量ニアルモ云ヘル
動力ハ文明ノ進ハ進ハ[illegible]多量ニ仕用サルヽカラ、動
力ハ將来ノ需用ニ極ク得ルヲカ、早クカラ問題トナリ
テアル、単ニ動力ハ石炭石油ノ如ク限ラルヽモノヲ
ハ、隨分心細イコトデアル、石油ヲモ決シテ出産ノ多ク
ナク、石炭ヲモ無尽蔵ト称セラレ、累進的ニ消費ガ多ク
ナルトスルト二三世紀モ経ヌ内ニ無クナツテ仕舞フ係
シ学術ノ進ハ進ト動力ノ新源ヲ発見スルカラ、

一概ニ悲観スルモ及ハヌケレトモ、風ヤ潮ヤ火山ヤ太陽ヤ水銀ヤアルコールヤ
ドハ皆ナ動力ノ源ヲナス得ルコトアル、勿論世界ノ
情勢ハ皆ナ動力ヲ一旦電化シ、光ヲ与ヘ熱ヲ与ヘ
ノ高ク用ヒラルヽコトヽナルヤウ、恐ラク他日ハ国際
的ニ動力会社ガ起ツテ、餘ツタ動力ヲ足ラ
ヌイ所ニ売ツテ有無相通ズルヤウニナルモアラウ
斯ノ如キハ空想ニアラズ、比較的近キ將来ニ実現
スルデアラウ

○亜米利加ノ移民ト国人ニアルモノ古クハコトデアル、日本ノ
移民モ亜米利加ニ於テハ小問題デアル、先ヅ移民
民撰任決議ハ、亜米利加ノ国人命ニ関スル大ナル基

點から蒙しに成るが、日本人等の考へでは、元来亜米利加人は英國種だ、チユトン人種と屬する、其の建國の初め、新教徒の内ピユリタン教のものが移住したのであるが、追々舊教徒のカツリツク宗流のものが移住し始めたが、うつテン民族、ひは伊太利スウヱヒは西班牙人である、これが或る時代から潮のごとく流れこんで、其數の多き事を以て數へる位である、ここに異人種の混合を見、ここに異宗教の混合を見ることゝなる、カツリツク教と屬する民族は今日米國の數に上つて、羅馬法王の代理が盛んに威力を振つてゐる、殊に北米の南部の勢力を閑却することが出来ないやうに思ふ

もすると外者の屬する感例を受くるやうに成る、亜米利加は異民族異教の集合の根拠地であるから、亜米利加の移民は、亜米利加から、亜米利加の徒の司配するものとなるべき氣の接ぬることは一トト面白いことである、移民杜絶の新行は亜米利加に於ても容易ならぬ事であらう、亜米利加の山川世の移民史を知るものは何人も首肯せざるを得ないであらう

○川合基度の話し　趙凡夫印度のこと海つ処、趙は日本と何う特別の緣因もあるかしら、日本は評判が甚だ良く、印度と重大な関係がある、私は支那人は趙の事を知らぬ、現に羅振玉の如き金石の大家が諸を全く知らぬ、日本に来て初めて

其の印象を見ると云ふ、マサカ羅氏の見識の狭い方
と云ひたくない、高尚な方面を感じて考き学めておく

○南部人寛二郎氏は石油創始時代のことをゆめへに中ま
前の北海に移れば文化進捗後に入んでもよい程の滑
稽を生じたことがある、石坂昌孝の石油と手を出しての
苦労談の話しの中に、米国人ダンといふを傭ふに
北男は極めて人格の方つに、おまけに石油採掘の
金は幾度を思ひたる男であつたが、唯に米国の稼
の機械を国しに力タロージを所持してゐたことを
ロージの中にある石油採掘の機械を国してあつたことを
を種にサカ石油の投の中にあるかの如く思ひなして、石坂
一杯喰いし、石坂も後に其の人となりを知つたが、北の

ダンのツーくーと一ツ減ち来ふるものに、三年間
の給料を積算して石坂に要求した、石坂も度すら
理由がないと云ふのに、法廷に訴へたが、高等裁判
に物を、外人に法を無つて、我法権の振はない時代
であつたから、外人の訴訟に、石坂は国果
北が金が無いので、終にヤブレかぶれに暴挙を主て
北、其を強盗をやつて其金を得、其を以ダンに拂
北、発ち商品の面目を主て、そして自分は罪を
へと切人せを上ドリ心配して、北者をゆ少
の妻細は至りて、苦心した程痛
出して、石坂は助かつたといふことである、ダンのこと

ちかき外人もわかるべき事的に未だ来ることを思ひ給ふべきなり
ぬ、一概に外人とは云へ、ハ活印刷あるとあるべきハ勿論
誤つてゐる、その一例をしるしておく
十月十四日の記
○今から十三年前即ち大正元年の新聞に連載された
余の随筆のもりこみ一冊「双魚亭閑話」が新潟新聞
社から戻つて来た、北のもりこみの外に貰つてあることハ全
く失念してゐたが、これを無いものが納めてある、余の
初對面録」といふ、これも、家に共移を所おく見る
かるが、これらも新潟警察の四畳半の「と題して
十日むこう連載に記事ハ新潟新の教育史料
として逸すべからざるものである、これを書くのハ自分の記

臨むこうひろく、先ず手かゝる之のを先ずと再び世者くことが出来ない、なほ
沈六年新潟学校に学ぶ者は所見も附帯してゐる、
○名所旧跡ハ時代を経ると徒ひ地形変化に変遷
ある澤山から、其の繁盛と後世の異なることゐるハ
言ふまでもないが、真逆六朝の形勢がこんなに変りし
すまいとこと思ふ、脳を絞しても名所と云へハ何人も感
時の必き期待をいくらか持つが常であるから陶つて
歩記す、目分は支那の南京を知らないから秦
淮を見ることが、風景の記と接すると事分のものとなる
ある、北所ハ花柳の地で美人が多く、古来ここを論ず

支那の入り口（十七）

日本及日本人（十月號）

鼠骨

秦淮の畫舫

或る雨の日の暮れ方、土地の紳士諸君十數氏によつて秦畔河畔の金陵春に招かれた。蓋し南京第一の旗亭だといふ前觸であつた。私達は非常な興味を以て其夕を待つた。愈〻行つて見ると、磚敷の狹い路次を潜るやうにして這入るほど、入口の御粗末なのに不審を打つた。それでも「君子は盛德愚なるが如く良賈は藏して虛なるが如し」とかいふ支那の諺を思ひ出し、入口は斯く平凡貧弱だが、內に入らば宏壯絢爛、必ず私達の膽を奪ふのだらうと想ひつゝ進んで、右手の小さな入口に達すると、主人側の人々が恭々しく黑の禮裝をして出迎へられた。導かれる儘に狹い穢らしい廊下を過ぎて室に入る。其處は餘り廣くもない、天井が低く、四壁は黑ずみ、唯だ古い掛物を其處此處に下げた外には裝飾とてもない。圓卓を中央に椅子が澤山に置いてあるが、其卓も椅子も餘り美しとはいへぬ。何だか魚河岸の納屋裏に在る飲食店のやうな氣がした。念の爲め「これが南京第一ですか」と質して見ると、全く嘘いつはりのない第一有名な而かも古い歷史を持つ老舗だといふことであつた。

私は水に突出たベランダーのやうな廣椽へ出て見た。其處には蒼黑い水が流れてゐた。橫に長いから少くとも川といふ感が與へられるが、其の流れるでもなく流れぬでもないやうな穢らしい水は、むしろ運河又は溝と言つた方が適切なくらゐで、是れが秦淮だとは、どうしても受取り難いものであつた。高いのや低いのや、黑いのと白壁のと、思ひ〳〵であるが、見すぼらしい事に於て一樣な家々が水を挾んで櫛比してゐる。對岸には家並の齒が拔けた所に、柳らしい木立があつたりして、今ま歇んだばかりの雨空に、烏が淋しく飛んでゐたりもする。日は未だ暮れ切らない、家も人もあさまに見える。對岸の小路から岸に出て來た頭は女だ。笊を抱えたのが水際に蹲んだから何をするかと見ると、米を磨ぎ初めるのであつた。磨汁が白く黑い水に溶けて行くあたりに、チョビンと魚が飛び上つたりする。女は流れ寄る青藻を搔き分け、舞ひよる水馬を押しのけつゝ磨いでゐる。「易水に葱流るゝ寒さかな」蕪村の句を想ひ出す。風蕭々として壯士去る易水も葱が流れては少々滑稽感をそゝると考へてゐた私は、今ま青藻が流れ女が米を磨ぐ秦淮の水を見て、蕪村の句から受けた滑稽な感じは引込んでしまつた。萬里の外に居て想像で易水の

寫生を偶然にやつてゐるものとも思へた。

突如として目の前に大きな舟が屋根を出した。それは左手から推して來たものらしかつた。梶音もなく艫臍のきしる音も立てず、人聲も發せず、默つて棹さして來たので、目の前にニユーッと現れるまでは米磨ぐ人を見てゐた私の氣に付かなかつたのである。川幅一バイあると思へるほど大きな舟であつた。否や舟が偉大なのではない、それに取付けられた屋形が大きいのであつた。人が立つて未だ天井の高いのを覺えるほど高い屋形、それが朱や碧や金で美しく塗られ、其軒は球燈や風鈴などで飾られてゐる。さうして裡には二三の房が仕切られ、房内には卓子や椅子が置かれて居る。何も知らぬ私でさへも、一見して「是れだな、畫舫といふのは、有名な秦淮の畫舫が」と氣が付いた。

これです、畫舫が、……今日は暑いと思ひました。此處を選びました、雨ふつた、畫舫は少いも知れまつせん

比較的達者な日本語の説明は私達に蛇足であつた。畫舫は私達の倚る欄の直下で停つた。棹手は米とぐ女と語り始めた。女が何か高聲に呼ぶと、路次から十二三の小兒が出て來た。女は米笊を抱えて消えたと思ふと直ぐ又た現れた。さうして小兒と共に岸の石垣に附着してゐたやうな小舟に乘つて畫舫に近いた。畫舫の棹手も其小舟に乘り移ると見ると、三人して畫舫を洗ひ始めた。夫婦親子であるらしい。

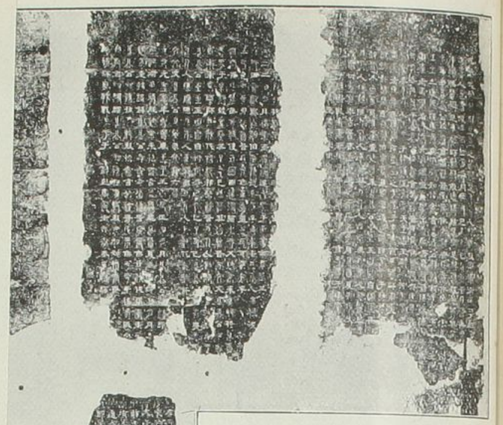
未だ早い、も少し暑くなると、たあくさん出て混雑する、雨續いたから出なかつた、で洗つて用意します

私達は日毎の暑氣に早や降參してゐた。それを未だ季節が早く暑さが足らないから畫舫が多く出ぬと説明されて、少し怖ろしいやうな氣がした。親子三人は切々と洗つてゐる。さうしてゐる内に暮色が蒼然として川面を掩うて來る。洗つてゐる三人の顔もおぼろになる。それでも水あかりで洗ひ續ける。私達の部屋へは既に燭がともされた。畫舫に灯を點さぬかと待つてゐるが未だつけない。三人は洗ひ終つたが、畫舫を棄てゝ陸に上り、夕闇の路次に消え込んでしまつた。

木蘭之枻沙棠舟。玉簫金管坐兩頭。美酒樽中置千斛。
載妓隨波任去留。……

李白の江上吟から想像して爽快なものとして畫舫を考へてゐた私は非常に落膽した。よしや季節に入つて、此川面を塞いでしまうやうに、澤山な畫舫が、灯を連ねて去來した所で、それは畢竟邯鄲遊俠子輩を娯ませるに過ぎないものであると相場が決まつて居る。江戸錦繪に見る、墨田川首尾の松あたりの屋形船、その方が遙かに詩的で雅趣に富み、日本人の私を滿足させるものであると思つた。それでも遺がに秦淮の名は私に懷かしい。飽かず黑い水を眺めて物を思つてゐた。

室では既に酒宴の用意が出來た。私は命せられる儘に席に就いた。圓卓を圍んだ十七八人、卓上には佳肴が取換へ引換へ運ばれる。白衣の給仕男が忙しげに其間を斡旋する。「風吹柳花滿店香。吳姬壓酒喚客嘗」とは李白が南京を去る時の詩句だ。酒を壓して嘗めさせる吳姬が周旋することゝ想像してゐたのも間違ひ、男子の給仕で極めて豪快に談論を交換して盃を擧げ健康を祝し合ふのも私には意外の一つであつた。



石經

石經は漢から始まる。三國、六朝、唐宋以後にも是を見る。近年まで殘存するものゝ内で最も古く權威ありとせられたのは唐の石經であつた。尤も漢代の石經拓本もあつて珍重されてゐるけれども、それは一小片に過ぎず、無論石は無くなつて唯だ寫眞で見るだけで實物を見ることが出來なかつた。然るに天津の周禾木氏は出土した魏の石經方一尺弱のものを藏してゐる。これは大篆、八分、小篆とで書かれ、小篆が非常によく出來てゐるので、世に之を三體石經と稱し尊重し、吾々も其拓本を得て研究してゐた。所が兩三年前に大變なものが河南省洛陽から出土した。それは幅四尺、丈け四尺といふ大きな物で而かも兩面に刻してあり字も亦殆んど漫漶して居らず、如何にも立派なものである。秦の李斯の小篆が殆ど滅び、漢にもよきものが殘らないのに、斯樣な堂々たるものが發見されたのは眞に書道の幸福で常に寶物として珍重すべきものである。此の石經は前きに周禾木氏が一片を所持した關係上、[illegible]

寫生を偶然にやつてゐるものとも思へた。

突如として目の前に大きな舟が屋根を出した。それは左手から推して來たものらしかつた。梶音もなく艫臍のきしる音も立てず、人聲も發せず、默つて棹さして來たので、目の前にニユーッと現れるまでは米磨ぐ人を見てゐた私の氣に付かなかつたのである。川幅一バイあると思へるほど大きな舟であつた。否や舟が偉大なのではない、それに取付けられた屋形が大きいのであつた。人が立つて未だ天井の高いのを覺えるほど高い屋形、それが朱や碧や金で美しく塗られ、其軒は球燈や風鈴などで飾られてゐる。さうして裡には二三の房が仕切られ、房内には卓子や椅子が置かれて居る。何も知らぬ私でさへも、一見して「是れだな、畫舫といふのは、有名な秦淮の畫舫が」と氣が付いた。

これです、畫舫が、……今日は暑いと思ひました。

此處を選びました、雨ふつた、畫舫は少いも知れまつせん

比較的達者な日本語の説明は私達に蛇足であつた。畫舫は私達の倚る欄の直下で停つた。棹手は米とぐ女と語り始めた。女が何か高聲に呼ぶと、路次から十二三の小兒が出て來た。女は米笊を抱えて消えたと思ふと直ぐ又た現れた。さうして小兒と共に岸の石垣に附着してゐたやうな小舟に乘つて畫舫に近いた。畫舫の棹手も其小舟に乘り移ると見ると、三人して畫舫を洗ひ始めた。夫婦親子であるらしい。

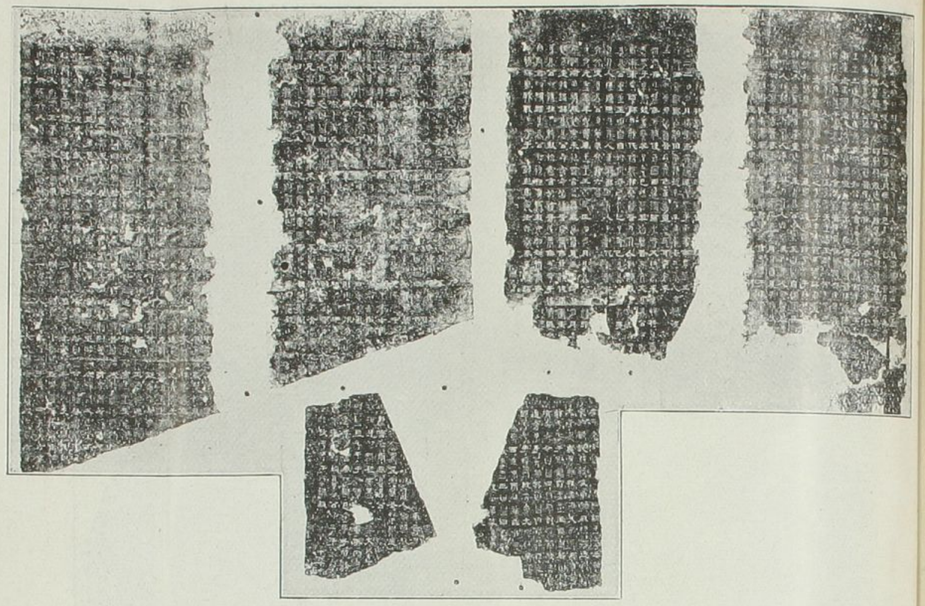
未だ早い、も少し暑くなると、たあくさん出て混雑する、雨續いたから出なかつた、で洗つて用意します

私達は日毎の暑氣に早や降參してゐた。それを未だ季節が早く暑さが足らないから畫舫が多く出ぬと説明されて、少し怖ろしいやうな氣がした。親子三人は切々と洗つてゐる。さうしてゐる内に暮色が蒼然として川面を掩うて來る。洗つてゐる三人の顔もおぼろになる。それでも水あかりで洗ひ續ける。私達の部屋へは既に燭がともされた。畫舫に灯を點さぬかと待つてゐるが未だつけない。三人は洗ひ終つたが、畫舫を棄てゝ陸に上り、夕闇の路次に消え込んでしまつた。

木蘭之枻沙棠舟。玉簫金管坐兩頭。美酒樽中置千斛。
載妓隨波任去留。……

李白の江上吟から想像して爽快なものとして畫舫を考へてゐた私は非常に落膽した。よしや季節に入つて、此川面を塞いでしまうやうに、澤山な畫舫が、灯を連ねて去來した所で、それは畢竟邯鄲遊俠子輩を娛ませるに過ぎないものであると相場が決まつて居る。江戸錦繪に見る、墨田川首尾の松あたりの屋形船、その方が遙かに詩的で雅趣に富み、日本人の私を滿足させるものであると思つた。それでも遠がに秦淮の名は私に懷かしい。飽かず黑い水を眺めて物を思つてゐた。

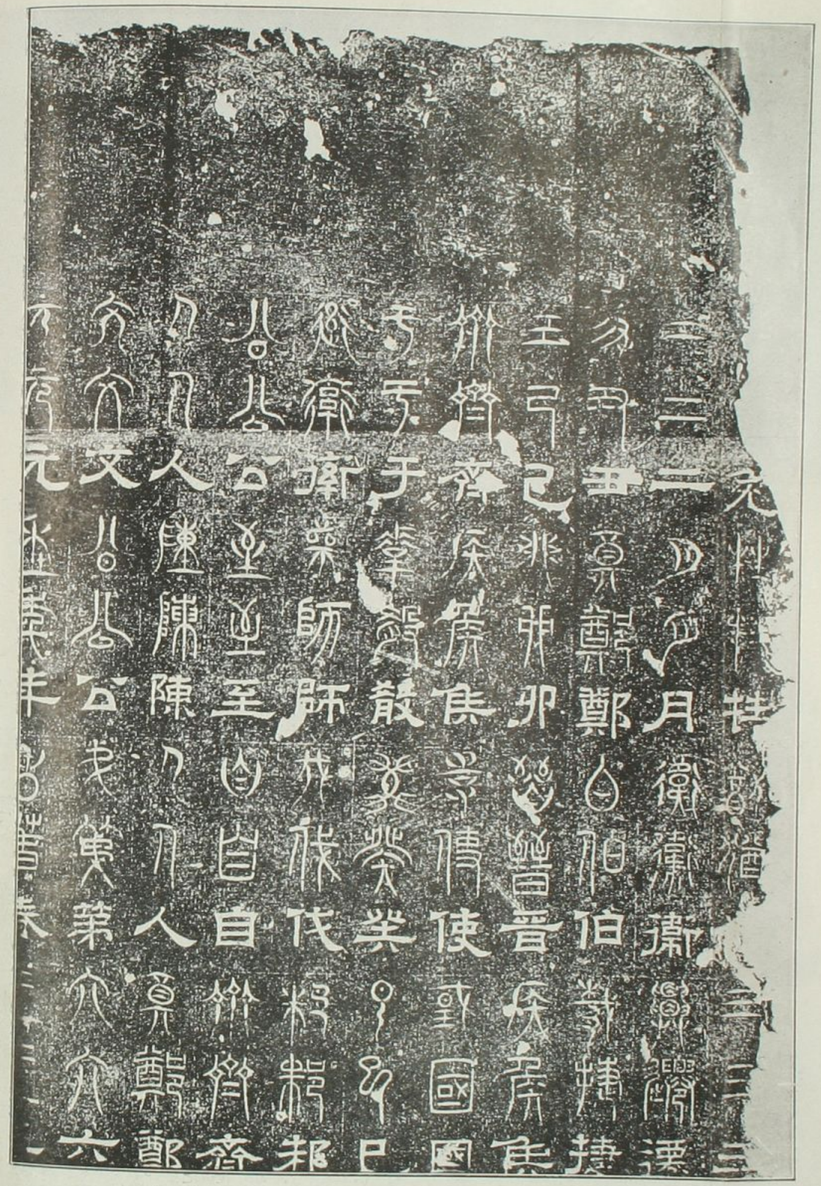
室では既に酒宴の用意が出來た。私は命せられる儘に席に就いた。圓卓を圍んだ十七八人、卓上には佳肴が取換へ引換へ運ばれる。白衣の給仕男が忙しげに其間を斡旋する。「風吹柳花滿店香。吳姬壓酒喚客嘗」とは李白が南京を去る時の詩句だ。酒を壓して嘗めさせる吳姬が周旋することゝ想像してゐたのも間違ひ、男子の給仕で極めて豪快に談論を交換して盃を擧げ健康を祝し合ふのも私には意外の一つであつた。



石經

石經は漢から始まる。三國、六朝、唐宋以後にも是を見る。近年まで殘存するものゝ内で最も古く權威ありとせられたのは唐の石經であつた。尤も漢代の石經拓本もあつて珍重されてゐるけれども、それは一小片に過ぎず、無論石は無くなつて唯だ寫眞で見るだけで實物を見ることが出來なかつた。然るに天津の周禾木氏は出土した魏の石經方一尺弱のものを藏してゐる。これは大篆、八分、小篆とで書かれ、小篆が非常によく出來てゐるので、世に之を三體石經と稱し尊重し、吾々も其拓本を得て研究してゐた。所が兩三年前に大變なものが河南省洛陽から出土した。それは幅四尺、丈け四尺といふ大きな物で而かも兩面に刻してあり字も亦殆んど漫漶して居らず、如何にも立派なものである。秦の李斯の小篆が殆ど滅び、漢にもよきものが殘らないのに、斯樣な堂々たるものが發見されたのは眞に書道の幸福で常に寶物として珍重すべきものである。此の石經は前きに周禾木氏が一片を所持した關係上、發掘者は先づ拓本を周氏に送つて買はんことを勸めた。周氏は直ちに八千元に買ふ約定をして荷物の到着するのを俟つてゐた。賣主は半途に慾心を起し、石を故意に二斷して持ち行き、一つが八千元、二つ合せて壹萬六千元だと言ひ張つたので周氏も非常に立腹して悶着を生じ石は賣主が持歸り、交渉が容易に圓滿に纏らずに居た。其事を吳佩孚氏が聞知し、我が管轄地から掘出したのだから納入せよと命じたが、持主は恐れて藏匿した。吳氏は兵士を差向け家探しをし、主人を縛し、床下から發見して持去つてしまつた。今も多分吳氏の手に在ることであらう。吾々が所持する拓本は二斷後のものである。圖は第二片の字で、上から大篆、小篆、八分の順序になつて居る。

中村不折記



の自分の閑隙に録したる隨筆八二十數年を経て
纔に冊位を為すに至りぬ、其の中から印刷の新しきを
どれ撰んで載せたらよからんかと考へて考へた末の
切抜きの法を採る事七十冊餘に及ぶ、最近五六年間
に出版したる
此等の中から取捨を敢行し
八、西洋文藝家の
一冊、日本文藝家の
光一文法」二冊、光と大隈侯の一言一行」一冊
であるが、今又頼山陽と閑
版に取りかゝつたが、何れも
世に最初から出版するものが、
故日々推移して一廉の小説となると人八

惜しいから版にして纏めて置けと勧める、一旦
新聞紙に公けにした四篇であるから、少数者にも
あらうが既に人の目にも觸れたものであるからと終
に決心して楽つて版にする義が起り、校正の労
をもとらず、四五冊の随筆を刊行したことは
時流に投ずる点もあるが多くは変人がいかに敢
て残骸を拾て強いて苦情が版元から転つて
来るのを恐れるに、大隈侯は二版まで出した養
気一夕話は書画骨董味のものゝ称賛を得た、書画
骨董は一種の趣味であり、エラそうな材料を得ると
の帳中秘として有る、解剖の泡を西洋花火が今の
文学者の中を觸れ廻るものゝ方面の多く

く収まつてゐる、リテラリーアスクドローツはいくらも
あるが、自分のものでも随筆の物を得ておるつもりで
ある、是が明治の中頃から多い為め変行
ハ多い、別名書淫百四十四冊を標題とした方が
よかつたと思ふ人、日本を後人に人ハ陸奥国
ろいと云ふてゐる、先角変を目的とする題
のつけ方が何等肝腎である、自己を他人の若
書きをいつも変れば変する癖を有する癖
さえ自分のものまでも全く反対ひし酒色しに遠
事、憲しいようして、変れる名を選ぶといふ訳で
ある、乃ち義気一夕話の随筆も頼山陽
のものである、他人の著であるば、モット人を驚く題が

二月さんぬけたるを用ひとし敢て表を用ひと云ふ本
根がつき畳つて俗に人を惑きつけるい雲丸とうくて
仕方のものもあるどうせ廣ろく流布を期するの
ひもるに、性に折角ひまつぶしに輯録しに何る
冊の内から或評でも活字の形とうつに云ふ丈が
幸と云へば幸であるのに、或る友人の云ふを君い意
外の絶者家に表の為行しに云ふ場合一種の趣味
がある、「随者」「勢山堂」が出版、更に次ぐに他
の随者を出しいらどうかを云ふまでもある、自分も一
冊に附し云つたが、おかし自分が多少骨を折つ
て書いたものでまだよえらの刊書の間に収めるこの
つたらを默想すると、一冊位の材料に充分ある、

十二

少しく業をがくんに直に印刷に附すこと出来
るから或る機会に活字を使ふ
らう、差当り記臆を辿りや、繰まつたこの
を挙げたこと、左の如きこの分ある、

長篇一　狩宮田夢渡　石沙的形に連載すこと
〃　一　小野戸雑話　〃　一　山東京山と鈴木牧之　附紀行
〃　一　万万話　已後
〃　一　酒飯味の則
〃　一　印刷飯味談
〃　一　茶儀の飯味の源
〃　一　和蘭雨和

地震資料展覽會出品目錄

一、信州の地震分布圖（長野市西澤順作氏出品）

二、記象　これは昨年九月一日より三日間長野測候所の觀測に依るものである（長野測候所）

三、大日本地質圖　二枚（八木貞助氏）

淺間山燒岳關係

四、淺間山爆發光景　大正元年五月八日爆發の光景を故大森博士が寫眞に撮つたものである（長野測候所）

五、燒岳の噴煙（上）淺間山噴火坑底（下）いづれも故大森博士の撮影にかゝる（長野測候所）

六、群馬縣より見たる淺間山の鬼押出し、これは天明三年の大爆發の時のものである故大森博士撮影（長野測候所）

七、燒岳の噴火坑　故大森博士の撮影にかゝるもの（長野測候所）

八、大島三原山爆發光景　故大森博士が夜中に撮つた光景（長野測候所）

九、大正十一年三月九日淺間山より噴出したる火山彈（八木貞助氏）

一〇、淺間山の模型　淺間山及其附近の地形を模型としたもので昨大正十二年攝政宮殿下輕井澤に行啓遊ばされた際台覽を賜はつたことがある縮尺五万分の一で頗る緻密に出來て居る（八木貞助氏出品）

一一、淺間山に關する震災豫防調査會報告（長野測候所）

一二、天明三年淺間山爆發に關する古文書二冊これは小諸藩の御用信屋の人と御留居牧野八郎左衛門の手記になるもので何れも其年の日記である（小諸町淺間山研究會出品）

一三、今を昔の物語　淺間山に關する記事だが作者は判らない（本社佐久支局出

品）

一四、大町地震寫眞八枚　大正七年十一月十一日本縣北安曇郡大町地方に地震があつたが引續いて數十日間に亘り毎日小震あり町民屋外に避難し戰々恟々たり此寫眞は其當時の撮影にかゝる（大町役場）

一五、淺間山古代大燒の事　天明年間の大爆發に關する古文書（小諸町林勇氏）

一六、信濃地型圖（八木貞助氏）

一七、信濃國大地震大洪水の寫　此書き本の終に天明三年淺間山爆發のものがある（上田市飯島保作氏）

一八、天明三年淺間山大活動記錄、大日本地震資料明治三十七年出版（長野測候所）

一九、癸卯天變記古文書（屋代町唐木鷹三郎氏）

二〇、天明淺間山古文書（長野市戸谷長次郎氏）

二一、大正七年大町地震報告（長野測候所）

二二、大正七年大町地震報告文書（長野測候所）

二三、大町地震關係書類（大町役場）

二四、上田地震報告（長野測候所）

二五、信州の地震（西澤順作氏）

二六、濃尾震誌（長野市蓮華院）

善光寺地震關係

二七、善光寺地震大繪圖　松代眞田伯爵家の所藏にかゝり善光寺地震後松代藩で小縣郡塩尻村の學者原與左衛門に依頼して書かせたものであつて一間に二間半といふ大地圖である頗る詳細を極む（眞田伯爵家出品）

二八、善光寺大地震小林日記　日記にして詳細に認められてある其當時を知る好箇の資料（小縣郡長久保新町小林繁雄氏）

二九、善光寺地震記事（長野測候所出品）

三〇、善光寺大地震一件書類四冊　此内三冊は松代表の記錄で其當時の動靜及被害諸調査を悉く網羅しある分厚なもの他の一冊は江戸表の動靜を認む以上四冊を通讀する時は大地震の詳細を手に取る如く知ることが出來る（眞田伯爵家出品）

三一、岩倉山崩壞跡に生せる湖水（右）岩倉山崩壞の跡（左）の寫眞（長野測候所）

三二、善光寺地震及水害被難の光景を寫した掛物二軸（上水内郡安茂里村正覺寺出品）

三三、地震後世俗の種七冊　長野市權堂代々庄屋永井俊郎氏の祖先善左衛門氏が善光寺地震の慘憺たる光景を直視し悉く繪祠傳風の作品としたものにて今日では頗る貴重な品になつて居る本書の寫しが長野小學校にある（長野市永井敏郎氏出品）

三四、善光寺地震山川崩壞之圖其一　地震後木版すり彩色にして發行されたが今では數が非常に少ない（長野市藤澤長次郎氏）

三五、仝上其二　此の方は犀川洪水の地域だけを主としてある（長野市威德院出品）

三六、善光寺地震見舞狀　堂照坊へ來た文書（長野市堂照坊）

三七、善光寺地震後七年目に震死した文人墨客の追吊會を開くため仝志の人が出した回文の木版すりにしたもの〻原稿（長野市威德院）

三八、善光寺地震讀賣其二　所謂瓦版なるもの（日比谷圖書館）

三九、信濃國大地震其三（仝上）

四〇、善光寺地震見聞記下書三冊　これも善光寺地震當時毎日市内を視察して光景を認めた貴重なもの（長野市德武喜久二氏出品）

四一、善光寺地震見聞記　書き本である（長野市白蓮坊）

四二、大地震　善光寺地震を瓦版にして其直後に於て賣つたもの（長野威德院）
四三、弘化四年略暦（長野市威德院）
四四、善光寺地震くどき　卷末に狂歌あり曰く「死度くば信濃へござれ善光寺うそではないぞ本田善みつ」（仝上）
四五、善光寺地震諷刺書（日比谷圖書館）
四六、善光寺地震番附（仝上）
四七、善光寺地震の肉筆の地圖其一（更級郡更府村柳澤虎一郎氏）
四八、仝瓦版の地圖（長野市山本保吉氏）
四九、仝上（日比谷圖書館）
五〇、善光寺地震地圖（更級郡西寺尾村宮澤濱之助氏）
五一、善光寺地震諷刺書（日比谷圖書館）
五二、善光寺地震讀賣其四（上田市飯島保作氏）
五三、善光寺地震肉筆の地圖其二（更級郡更府村柳澤虎一郎氏）
五四、仝上其三（長野市飯島幸雄氏）
五五、大地震之節御動座日記帳一冊　大勸進に於る門外不出の重要書類にして善光寺地震當時の動靜や被害調査を認めしものである仝寺には元錄時代からの日記があるが本書も亦その一部である（長野市大勸進）
五六、善光寺大地震後の雜記（仝上
五七、善光寺大地震書類三冊の內二冊（仝上）
五八、善光寺地震稻垣日記（上田市稻垣正路氏）
五九、善光寺地震調材料（長野市藤澤長次郎氏）
六〇、善光寺地震日記（東筑摩郡神林村牛越政治氏）
六一、善光寺地震記錄（更級郡西寺尾村後藤要太郎）
六二、震洪鑒（長野市威德院）
六三、善光寺地震中野代官屆書寫（埴科郡森村久保田菊雄氏）
六四、善光寺地震水火錄（更級郡西寺尾村杵

淵唯喜氏）
六五、善光寺地震讀うり其一（長野市岡登作藏氏）
六六、常樂寺奉納　善光寺地震にあひたるも別所觀世音の利益に依つて奇蹟的に一命を助かれる尾州知多郡市之助なる者の奉額である（小縣郡別所村常樂寺）
六七、仝上肉筆地圖其四（長野市飯島幸雄氏）
六八、仁王門重建上棟の圖　仁王門は大地震にて燒失したが慶應元年重建の運びとなり仝年七月上棟式を行つたのである現存の仁王門にはあらず（長野市威德院）
六九、善光寺地震に付觸れ書（埴科郡寺尾村禪福寺）
七〇、仝地震肉筆の地圖其五（長野市德武喜久二氏）
七一、仝地震地圖（長野市小林政次郎氏）
七二、仝地震功勞者への賞狀（上水內郡鬼無里村宮下綾之助氏）
七三、仝地震書類三冊の內一冊　善光寺地震にて如來は箱淸水に五十餘日間避難されて仮小屋に安置したが本書には其圖面がのせられてある（長野市大勸進）
七四、更級郡川中島村の池田なにがしが犀川洪水に溺れんとしたのを漸く助かつた記念の一軸（更級郡川中島村池田菊治氏）
七五、弘化大變記（更級郡東福寺村荒川氏）
七六、善光寺地震屆書寫（長野市飯島幸雄氏）
七七、善光寺地震日記（更級郡更府村柳澤虎一郎氏）
七八、善光寺地震記事三冊　松代藩の鎌原桐山氏の手記に成るもので珍品である地震の大小を黑星の大小に依りて現はされてある（長野市鎌原重正氏）
七九、丁未地震私記　桐山氏自邸の消息だけを記したものである（長野市鎌原氏）
八〇、曖翁刪稿　本書は桐山氏の作に成るものに對し、佐藤一齋が添刪を附したも

のだ、卷末に善光寺地震に關した漢文が添へてある（仝　上）

八一、地震變更御屆（長野市齋藤敏雄氏）

八二、善光寺大災由來（長野市小林幸五郎氏）

八三、仝上屆書（長野市小林政次郎氏）

八四、信濃國地震歌（仝　上）

八五、善光寺地震屆書（仝　上）

八六、永鑑雜記三冊　善光寺地震に關するものをも載せてある（屋代町唐木鷹三郎氏）

八七、見聞集錄（埴科郡森村久保田菊雄氏）

八八、信越大地震記（長野市渡邊敏氏）

八九、善光寺地震記事（仝　上）

九〇、仝上取調材料二冊（仝　上）

九一、信濃大地震全尾（仝　上）

九二、大地震後軒並改（長野市柄澤雅治氏）

九三、善光寺地震聞書（北佐久郡北御牧村小宮山議一氏）

九四、仝上御屆書二冊（上水内郡古間村柄澤相輔氏）

九五、淺間岳天明信上變畧記（小縣郡滋野村丸山高氏）

九六、淺間放火記（仝　上）

九七、佐久間象山翁發明地震計　善光寺地震後の其歳の夏、象山翁の發明したものである（松代町羽田桂之進氏）

九八、象山翁考案地震用金挺　此金挺を常に座側に置き前記地震計によりて地震のありたることを知らば金挺を持て飛出せば人を助け自身も一命を失ふ事なしとの事（仝　上）

關東の地震と本縣關係

九九、縣下各地の救護實況寫眞二十餘枚（本社出品）

一〇〇、東京大地震火災當時の公文電報の一切（本縣社會課出品）

一〇一、震災避難者數調　九月二日より三十日迄の分（仝　上）

一〇二、縣内焚出し穀數一覽　九月三日より九月十五日迄の分（仝　上）

一〇三、本縣臨時相談所成績概況（仝　上）

一〇四、義捐金收納金額調（仝　上）

一〇五、義捐品郡市別明細表（仝　上）

一〇六、震災當時の官報（長野縣出品）

一〇七、仝上文書の一部（仝　上）

一〇八、内閣更迭を本縣より各府縣に通報せる際の文書の一部（仝　上）

一〇九、入京證明書（仝　上）

一一〇、使用せる腕章（仝　上）

一一一、善光寺大地震肉筆の地圖其六（上伊那郡手良村竹中八十次郎氏）

參考品　小學生の自由畫と感想文關東の震災當時東京より本縣小學校に就學した兒童の數は非常に多くそれ等の兒童をして當時の感想文を記述させ又自由畫として震災地圖を書かせたものである（上諏訪小學校及長野市鍋屋田小學校出品）

一一二、長野縣相談所の寫眞四枚（長野縣社會課出品）

一一三、關東震災救護報告（仝上）

一一四、臨時相談所にて取扱ひたる救護票（仝上）

一一五、仝所にて取扱へる求人票求職票（仝上）

一一六、震災義捐金人名記錄（仝上）

一一七、本縣警察部震災調書（本縣警察部）

一一八、地震關係書五冊（長野圖書館）

一一九、地震書類並に繪はがき（長野市新井義一氏）

一二〇、震災漫畫帖一冊（屋代町鈴木玉羊）

一二一、震災當時の信濃毎日新聞（本社出品）

一二二、仝上長野新聞（長野圖書館）

一二三、仝上官報及省令號外（本縣社會課）

一二四、仝上寫眞及繪はがき百餘枚（本社出品）

一二五、米國邦字新聞（長野市尾崎章一氏）

一二六、震災繪卷物安本亮一氏筆（長野市丸山辨三郎氏出品）

一三七、仝上二卷落合かんも氏筆（長野市新井義一氏）
一三八、依規模燒失生糸百釜對表（本縣蠶糸課）
一三九、震災と收繭の處理（仝上）
一三〇、震災と繭相場（仝上）
一三一、震災燒失生糸（仝上）

江戸大火と地震

一三二、明暦大火當時の江戸——二間四方大のもの（日比谷圖書館出品）
一三三、明暦大火後（九ヶ年）復興の江戸（仝上）
一三四、明暦大火繪卷（仝上）
一三五、延寶版むさしあぶみ二冊（仝上）
一三六、明暦談　明暦大火に關する記錄（仝上）
一三七、明和大火繪卷（仝上）
一三八、明和大火後（二ヶ年）復興の江戸火元大圓寺（仝上）
一三九、明和大火當時の江戸（仝上）
一四〇、江戸東京大火延燒の方向と長さを示す圖　縮尺二万分ノ一（仝上）
一四一、明和九年壬辰二月江戸災記二冊（仝上）
一四二、安政と大正の地震内閣（仝上）
一四三、大正安政大震災善後策一覽表（仝上）
一四四、東京大震災年表（仝上）
一四五、地震のたびごとに首の落ちる上野の大佛さん（仝上）
一四六、安政地震の際江戸の慘狀が日本各地に幾日後知られたか（仝上）
一四七、昨年の暴利令（仝上）
一四八、地震のおまもりと避難心得の四點（仝上）

安政以前の地震に關するもの

一四九、安政以前の地震に關する地圖其の他瓦版十一點、他に本朝地震記　元錄十六年地震記錄　なまずくにぶるひ　嘉

永七寅年地震記　安政見聞記三冊（仝上）
一五〇、安政二年大地震の瓦版地圖五點（仝上）
一五一、江戸幕府の御救小屋（現今のバラック）（仝上）
一五二、安政見聞錄二冊（相澤庄兵衛氏出品）
酒井家安政地震留書五冊
一五三、安政地震の消息文二點（長久保新町小林繁樹氏出品）
一五四、御江戸大地震大破一冊（上田市稻垣正路氏出品）
江戸大地震並に出火細鑑　地震類燒場所明細書の寫外六點
一五五、江戸大地震並に出火明鑑一點（長久保新町小林繁樹氏出品）
一五六、江戸關八州大地震出火細記（仝上）
一五七、前代未聞大江戸地震語敎（上伊那郡手良村竹中八十次郎氏出品）
一五八、江戸大地震並に大火方角圖（更級郡共和村越川嘉平氏出品）
一五九、大江戸類燒大地震（長久保新町小林繁樹氏出品）
一六〇、安政地震のよみうりと大正のよみうり　九點（日比谷圖書館出品）
一六一、安政の地震と當時の諷刺畫七十枚
諷刺畫は當時の世相を知るに最も貴重なるもので畫面は、躍如せる人物とその皮肉な文句とは他の摸倣しあたはざるところで正に現代の漫畫と匹敵するものである（仝上）
一六二、吉原の慘狀とその復興　遊女生活その他二十二點（仝上）
一六三、遊女黨の善行　三點
佐野槌の抱え黨は自分の髪飾り其他を入質して金子貳十兩を得それにて行平鍋潮戸物等を求めバラックの罹災民に配付した　それが町奉行の耳に入り銀一枚を褒美された、その名江戸市中に響きまもなく松の位に昇格し

た（仝上）

一六四、吉原の職員錄　昂格後の黨（仝上）

一六五、昂格前の黨（仝上）

安政三年の春の寶船　寶船にも諷刺のあらはれてゐるところに氣をつけること

安政三年春の繪暦　二點（仝上）

一六六、吉原の假宅　市中二十三ヶ所で安政二年十一月下旬より安政四年秋まで假營業を續けた（仝上）

一六七、兩國橋の渡初　震災前より修復工事中の仝橋は震災のためさらに數ヶ所の大破損を生せしも工事を中止せず十一月二十三日盛大なる渡初式を擧行した　四點（仝上）

一六八、震災後の最初の祭禮　安政三年十二月より深川八幡境内にて成田不動の出開帳があり境内ところせまきまでに「大からぐり　生人形」などの見せ物が出きて震災後始めての人出であつた（仝上）

一六九、名古屋に逃げなかつた安政三年の春場所　三點

淋しい江戸のお正月　安政三年のお正月（地震後三ヶ月目）は江戸は火の消へたやうな淋しさでそれは市民が唯一の娯樂機關であつた劇場が三座共地震の厄に遭つて燒失した爲めであつたけれどまもなく三座は復興した即ち五ヶ月後の安政三年三月に市村座を皮切りとし中村、森田の順次に開場した、茲に出品してある錦繪はその時の舞台開きの狂言でその當時のものである（仝上）

關東大地震の部

一七二、各地測候所より見たる震源地（仝上）

一七三、世界各地にて感ぜられたる地震（仝上）

一七四、東京帝國大學地震學教室の地震計と記象（仝　上）

一七五、東北帝國大學の記象（仝　上）

一七六、東京市街地震度分布圖（仝　上）

一七七、關東戒嚴地域内警備配置要圖外二枚（仝　上）

一七八、東京地圖（仝　上）

一七九、仝　（仝　上）

一八〇、帝都大震火震系統地圖（仝　上）

一八一、全國各地發行の諸新聞約百種（仝上）

一八二、帝都震災寫眞二十枚　本社寫眞部が九月三日に撮影したるものである（本社出品）

一八三、相摸灘變化圖（日比谷圖書館出品）

一八四、震災中に發行されたる官報多數綴込み（仝　上）

一八五、震災彙報（仝　上）

一八六、非常震災救護情報九冊（仝　上）

一八七、震災調査時報（仝　上）

一八八、東京集團バラック居住狀態調査要覽（仝　上）

一八九、大震災画報二冊（仝　上）

一九〇、東京市附近火災・地域及罹災民集團地要圖（仝　上）

一九一、仝上救護品配給要圖（仝　上）

一九二、仝上食糧分配位置要圖（仝上）

一九三、横濱附近罹災地域警備隊配置圖外四點（仝　上）

一九四、東京市復興地圖（仝　上）

一九五、悲しき極みのお寫眞三枚（仝　上）

一九六、震災寫眞畫帖十點

一九七、東大地震學教室の踏査撮影せるもの十一枚

眞鶴半島三ツ石の隆起外二枚　根府川の山津浪仝上上流大山崩れ外一枚　大磯照ヶ崎河岸の隆起外一枚　安房那古の斷層外一枚

一九八、外國の新聞雜誌に現はれたる大震災英米獨佛各國發行のもの二十二點（日比谷圖書館）

一、ポスター　震災當時使用されたるポスター七枚（仝　上）

參考品

一、善光寺古瓦　五　點
一、向原寺ノ古瓦
一、大安寺ノ古瓦
一、藥師寺ノ古瓦
一、橘寺ノ古腰瓦　二　點
一、大和國山田寺ノ古瓦
一、大極殿ノ古瓦

（以上威德院出品）

主催　信濃毎日新聞社

○木崎好尚が訪ひ来たれから今年は上洛しようと思ふ
鈴山陽に序を乞はんとて、俳句は真と流しとて、余が印人中
之山陽を以て許すこの北人のおこりこの、彼なる点を
固しく思ふ。ある余が序を落する不快ひ者、
依つて大略若の大略を語つて、木崎を慰めしも一冊
を出しこの十年が出来ないからあるといふ、又べ俳句
わ竹の傷ひ、況こ年文て一言もなるか出んひ
時を待ひ、依次搜んの山集を乞ひ、武蔵の金
石巷を出んと欲し必ず余に訪ふと曰ひ書しれ
語つて、一二年心つきなるあ 弱冠名刺を無つく此文流
寧天因のこと及ひ、うしと死とうと学くと死因を
脳底ひあつたとて、竹の序あが或る抵の後ウワ言を言ふ

の比長篇を詩話を作り比較果す為陵を入つ法が餘
庶て表弱と仆れとなるふまく実は入洗のまも自之を
收るを特殊ミ文状があるとは初めて学くことがある

（十月十日記）

茶の係を侯を氣の付いたを家郷を八井
の世婿後藤松陰が高父の井に家のセル長の為
の詩が一幅あることを北の幅は井の客の
文章詩を称賞して賞めある流れ
寄つてある、殊に朱が朱
を以て各句に対をかくし、敢てあらぬとう、
其事を面りたとを欲ついろう表人ろしを
者とを新一幅の内に表人の座論があ

る、若し好為の北の海若の家あることを
早くもつたら、必ず進つて資料を供す
べきであるに、生の中に北詩と完しきるが表
現を収めて為る、勿論井の詩は欠けもみ
る、為附記す、北侍の後ろを松蔭の為
附載したである

○四国通沢郡塩津の鈴木氏は北紙雪語の著
者牧之の家で、北の著述の関係から書を西琴
と山東京山と云きうは往復し、表人の云問が多
からず為したある、前年信濃を一度し、毎
の度奥に駆えて、北紙新報の為め、京山と牧之
と等しを十数の談話を筆録せしめたことが

ある、片貝の新田真右衛門といふ人から北陸一冊の写しが出て来たと、所々不載の記事を下寄する事なりしかるに、浴くに吉狀なる事頗の仮名と何か異してくれるのでなるべく、字一句も誤りなかるべく、左のことも亦味を変行して田舎一巻を寄せ、

生着と何か考ひとの おもとめ ある所、牧之と京山のるの就ては北一帯を行る所の異説限りと傾ける書して、今更別といふことも無い、去かし強て拾り出した所感を云へば、段味れを境界からそく略あ石と湊合すると云ふ一事もある、鈴木牧之といふ人は著述家といふ格の人

だけはそく、あんまり海外しに比較雪譜の材料ことを北人のすから出てはいあんも、編集ふ者々南時江戸で名を変つた山東京山で、其人の著述成つたからそ片田舎の雪の隠者の頃なるものが二篇まも出で、それが今日国音異と時命を特してあるのと保し牧之は自の面もかき俳諧もやり家もれ面と富み、公書やは説書まる記しも俗裕もあつて、浦紀江に名の高い文人と交はる動機が生したのである、爽し読もんは牧之が雪譜の片田舎と産を守るの文を偏るもず、ある種の文義趣味があつて人情、その者き集めた雪の隠者を世の間に心もおこす、それ

かゝるうまれつき盛名ある馬琴と親類にうまれさる懸隔をかさねて馬琴が編纂を続てそうろういつまでも約を果さるゝのでもどかしくてうち鶴しを山東京伝と交りを結び其の手ぬかりを果すことを得たのである、最初牧之が北の四日論見をうけて、其志を果すまでうち十年その年月が費うこんてみる、北方馬琴と京山との間に往復して此間八年ばかりの時文通の便の折から、酒肴を贈りて寄せたる数や書物をもたらしめうるこの、偉えん一書を出す意いかんに起係の出来あるべきを期して終に果し得たのを大体の趣味

類推に数無課うまれて居しうちとはいふが穏南の解釈ひあらう、全体馬琴と京山との間柄の和さうの関係もあるのに、一方の手から一方の手へ移すことは面倒の業であつたに違ひない、うまく操縦つて、馬琴を怒らせず、京山の手でやり果せたのを、牧之が面倒に深く交つた結果なのである、コンナ面倒な仕事が長い間に渡り、馬琴京山から牧之に宛て毎年幾度と寄せた書翰の間を実に良然大冊子の幾冊をうけたもの、法螺のものでなく、其答礼の手紙は今の南田舎の間柄のものと異うて京に雪諸のもの、関して反答に対りたうく相

互の家庭を語りまむコマ〳〵と悉されてゐる、和歌
云へば北越雪譜全体の巻の後の山寺の話も千紙の
各方文人各々の自書賛の巻が多い位のものゝ
ある、旨文人の傳ちど書かんとする牧之家に所蔵する者
同じ家に保存の抜料で、ある四巻の表紙から
北の手紙は雪譜を貴い價値がある、斯くも
フンダル江戸に集れあるもし旨文人の書簡が、紙
後の巻奥深き四巻に収まるといふも一言とす
べきものである、殊に江戸の往来もちろん
の同格のもの文人が、互ひに競ふ様子
塩梅一通の書簡乃至式十枚と云ふ細書
を寄せたものを更に大なる者と云ふべきで

あらう、恐らく北越雪譜と第七北国文人から
この十七一通書簡四の投寄を得た人とは或人と
一通あるまいと思ふ、自分が所有家から書簡集
を借り受けて一読した時に切に感懐を即
ち是れ如何なる文字の縁と云ふ、あの実に不思議
なるものと想ふた、赤面し恥へたもの不思議
四八五の中に本刷り文字の他の半分は斯のくある
若四のものゝ、そこに文字の徳が存するの用志が
し牧之ハ何んといふも四巻の表家の陰に文
字の上に自筆の京山もたカ打の出来るに
等級に居してゐる、先ずが居るうちして光明の
書簡を恃し四得たのち、四巻古い河縫館うち

繪ハ比交情ニ依ることあらうが、著述といふ趣味が
面白を捉へつけて、その力のあるものと謂ハ為ハる
るまい。（終）もるく亭山もしくは塩谷青山を（達）ハ
なるべき型つけことを考へると、当時の江戸と張後ハ
遠くて赤ゆい。い教もあるが、光亮牧之が一種の趣味
に駆られて、仲間の方文人を引つけ
坐をうつして面文人の書答を見る度毎に変く
なるもし、殊に面文人の互ひに罵り（手紙）合ふのを
一面で笑ひきつけもし、また、ちうく興味の
あることゞ道楽としてい実に上乗のものと云
ハざるを得ず、花や月が媒をして文人の新し
き例ハいくらもあるが、雪が媒をしたものハ

例ハ唯此等の張後殊に塩谷のあることゝあるべき
であらう、ありあまる雪に苦しむ北人の多き中
に牧之ひとりが美味を感じ比べ媒として雪
雪に趣味を感じ比べ媒として雪
譜を不朽に伝へるまつと、趣味ハ所
きものあるも知れず、何ものか
親しも持つ比べきものである、（ことを考へると）

○喜平鴻鈴須の日本に著わす連の講演、北人久しく外
国に在りて其の術を研究す、英語流暢、其の説く所
往々肯綮に当る、高文部人の陳腐と異
を異にす、彼れハ二十年間張之洞の幕僚たり彼れ

三く支那出世の大人物と
実国篇とを、書の時宜
以下時論する所とを
と、彼れの講演の一斑を
こゝに収む、

支那の文化史的進化

行に敏き日本
饒舌の支那

◇…辜鴻銘氏（第二回講演概要）

◇—私は多年聞到なる研究を重ねた結果エヂプト、ユダヤ、ギリシヤ等歐洲古代文明の進化は、大要支那の古代文明の進化と同樣であることを發見した。私は支那文明の道德的方面について述べたいのであるが、まづ第一に注意すべきことは支那古代文明の第三期となつてゐる周代の文明の主知的傾向である。これは歐洲の古代文明の第二期をなしてゐるユダヤ文明と著るしき對照をなしてゐる。ユダヤ文明であつて主知說の片鱗をも認むることは出來ない。支那の古代文明が周代において全成期には入つたやうに、歐洲の古代文明はギリシヤ時代に至りて百花撩亂の壯觀を呈した。現代の歐洲文明の醜さは歐洲人がギリシヤ文明を忘却したことに原因してゐる。

◇—元來文明は花のやうなものであつて、綺麗の美と凋落の醜と相代謝するとは自然の約束である

然らば何故

に凋落するかといふに、それは主知的傾向が跋扈するからである。國民は知ることに急であるが、知つたことを實行しようとはしない。私はいひたい、日支兩國の相違は、支那人が饒舌せんとするに反して、日本人は實行せんとする點にあると。知るばかりではいけない、實行が必要である。日本人としては武士道を語ることが必要なのではなく、武士道そのものになり切ることが必要である。文明の花の一部が滿花となる時、その文明は既に凋落の第一歩を踏み出してゐる。かやうな文明には、哲學がおは過ぎる。哲學者と自稱する支那の新人の饒舌するを見よ。彼れ等は學者ではなくて饒舌者である。繪畫、彫刻のみが必ずしも藝術ではない。行爲が藝術である、活動が藝術である。周代の骨董を買込んで藝術の殿堂を築いてゐるかに考ふるナリキン、ナリキンの考へは間ちがつてゐる。私は、眞の日本の藝術をつたへてゐるあはれなる

日本の婦人

に、骨董を買ふ金をくれてやれと、ナリキン者に忠告したい

哲學を投げ棄てらるべきものである。タゴール、ラッセルその他の徒は、哲學者ではない。ベルトランド・ラッセルの哲學は、病的な歐洲にとそ必要あれ、われら日支人は、かやうな哲學を必要とする程病的にはなつてゐない。

◇—孔子の苦心は知と哲學とを相共に存續して文明の命脈を救ふことに在つた。然も孔子の時代に保險に付するとは出來なかつた。ここにおいて、孔子は文明の設計圖を後世に殘して、文明の命脈を救ふことにした。この設計圖こそは、支那人のバイブルたる五經であつてこれあるがために、支那の文明は幾度破壞されても、なほこれを再建することが出來るのである。漢代の文化は、舊來の傳統を統一した眞の道德的文化であつたが、國民に對して『勿れ』を敎へながら、積極的に何事をなすべきかを敎へないといふ一つの

缺陷を藏し

てゐた。われ等はこゝに佛敎の發端を認める。

◇—支那の文明は、周代において開花と凋落とを示し、漢に至つて再び

復活

を開き、孔子と共に國家

歐洲と支那

との時代的對比を試みるならば、漢代はローマ・カトリックの文明型を示し、宋代は新敎の文明型を示してゐる。

◇—歐洲に於て宗敎改革の大旗をひるがへしたものは、マルチン・ルーテルであつた。而して支那のマルチン・ルーテルは韓愈である。韓愈とは唐代に生存した人である。

醫學博士招聘
専門 にいづま医院
日町停留場前

あつた。この結合が、支那のローマンチックな時代をうむ。吳、魏、蜀三國の對峙が即ちこれである。

◇—二世紀に亘つた五胡の中國侵寇後、支那文明のルネッサンスたる唐の時代となつた。唐の文明は、餘りに纖細、濃艶にして、美に過ぎたるがゆゑに、餘ばまれた。その毒虫とは、社會に過ぎた。美に過ぎたるがゆゑに、餘ばまれた。その毒虫とは、社會の墮落である。かくして、文藝復興期後の歐洲とひとしく、暫くの分解時代がつゞいた。

◇—大いで、支那の救濟者たるべく舞台に上るものは、宋の文明である。眞の學者は、社會の墮落を認めて、これが救濟に志した。

餘録

我田引鐵は三派の委員各〻大いにメートルを上げてゐるが涼しいのは革新の關直彦君、御存知の通り河擧は江戸の眞ん中でも鐵の餘地などもない京橋區である。さて、政二派の委員より餘程穩健な實だ、首相官邸で鐵相の說明をきいて來て『いや政府の尤もで』と贊意さへ表してゐる始末

▼…仙石鐵相は總惣で、建設改良のふり合ひなど定めてしまふ程專門家だから局長などはいまゝ

▼…支那の文明は、周代において開花と凋落とを示し、漢に至つて再び開花と凋落とを示し、漢に至つて再び開花と凋落とを示し、漢に至つて再び

○十月十七日　図書二三を獲る

一　異疫草紙　　彩色　完本　一冊

徳川時代流行病の記録として
貴重なる書、図と説明あり、此の書
八多く世に多く伝はるも、これを冊子体の
と落葉と影印あるのみ、俗本と仮名
なる婚礼、江戸化の新資料

一　日本年表　　洋装　一冊

義公直筆か記紀の年を考
証したるもの、帝国紀年私案」
といふか寧ろ北畠の実録、初め
て客観的日本史研究と共通

の也　　二冊

一　新図紀行

北海道流四年細川周次郎交命
うて蝦夷利加と国境の紀
行を、漢文の見聞を録す
此人の著余多く花す、これも共通と
加ふべし、北海道を稱し、琴
常紀風紀行と同かるも、天立開拓に関
○偶と日本石油史を漁り中と文化歌彰会の紀
念録とかくて可き材料か荒干あることを気付
いと、其内一二を先に紹介する
余か郷里城後北蒲原郡の岩船郡又は

いろこ黒川といふ駅がある北道にて古くから石油が
地上に滲出するを見る、黒川といふ名も若し原油が川に
流れて色を濁すより上から来たのもあらう、昔古の
須院に新潟県に稼き高があつたらしいが、古い時
代のことは且つく措き、文久頃井六七尺掘鑿して
七十石の日量を得たことがある、それは何人の業か
とつまり中村濱の高野家平四郎家であることが知る
動機なるべし、此人は人望の厚い家を沖
貿易に富を積つたと謂はれる人で、自分の幼
少の頃雲州の侯爵家に仕へたことも有る
が立流な洋装で頗るハイカラの人であつたことが
多く眼底に残る、此人は文武道を修め、邸内

に道場を設け、剣術を修行し撃剣の会合を催すを楽とし、身を自由を失ひ、その楽みも埋もれ、ひとく困つて居た所へ、上州の剣客、片岡吉郎といふ
がやつて来て、その道の悦みを告げる医学人
シンリロートンルから紹介状を持つて来き
りに、この功能を説くに、終に手術を施すに
出うけて、此人から一ヶ月計治療を受けた、その結果
に満足し、同国の佐野の石油業の
ことを傍さに吹聴し、同を勧めるに、石油採掘
の大切なことを志ること感じて、已が自己出資して
油が湧出する所潟来たのペトロレアムは、えびハ

あるまへのかと、委細其の状畧を語りて七年前白
鳥恒道といふ豪族が附近の敵と戦ふや、北海を極
こ海の水、光を野に散して人を放つて奇捷を得
たるの傷痕も消えるに至れり、これを少へて光
い光を元通に戻す、と断し、採掘を手伝ふ為に逗留
しこの砂金を買ひ、これ求むるもの無し、城後に来り果て
米国のものと同じきやを検別せんことを以てし
たに、これ七洛に流れ出でたる時外人は米国の
足を踏みいれることを許さんとすること、これまで
聞も市長一人が京都より来る有力者と運動し此結果
やうやく許可を得たが、志かしこの地の旅行は三日を踰
へていたるべしと和銀さえこれを城後新潟

抵くるを知る、当時すでに汽船の便
船なるものは無つたので、不便を大勝する人、第八千あを
掛つて一度の里船を買受けたが、そこで文久元年十
月二十日里船にこれを載せ新潟に向着した、
新潟から里川まで外人を出かける譯にゆかず、こ
の地方任かせて、あらゆる免人力車を出つ好
きなこと載せて中条の斎藤治右衛門方に宿泊
させた、北の往復に二日間を費したが、志かしこの
物価の高価を為す程は無つたのだが、志かしこの
差図で掘下げて廿七間三尺と成ると、西面の一
時に著くが如き湧水を見て、一日七十石
の量を得るものといふ、其の掘鑿の地は里

川村宮下鶴宮里侯の地内で、北井を異人井しと
いふと、陳ぶる三の河を約して外人を徙後に引入れ
箱館に六番八千四百三里船を繋ぎ初めて
人力車を造るなどいふて傷むべきもの
である、維新後の文明の後政の狀態は北海等の実
を以つて推すべきものである、平地のハイカラは古時仕入び
あらうと、

徙後の石油と離るる可らざる関係のあるのを米人ライマ
ンである、北人は明治五年政府が開拓使を置き北海
道の拓殖を図るに付、種々恩賞の外人として傭
ひ入れ、其海地震科学技術として来たのが
北人である、勿論石油等と云ふものは北海道は

勿論徙後の地質も北人に依り調査されたのである、
日本の石油界と北人が記臆さるべき北越の地は
人ハヒドロ日本貿易であつたが、自分が使つてゐた日
本人の事実夫婦の間に一人の子があつて、その名を徙
して父母が殺したのを、氣の毒と思つて貴的
を子養にした、米国にて人へ大学を卒
業したるに、教育し家庭をなすに死子も死
し、ライマンも毎年十月三日をトして費府
に於て生留日を人を回府の墓の料理店に
招き宴を設け、自分は其
節羽織袴で出席し、日本天皇陛下の祭
礼を祝したとのこと、北人に一つのロマンスのあるのは

日本婦人として妻となるべきものがあるべし、されば開拓使女学校（後に札幌に移さるるもの）の学生中に秀才と美貌とを兼ねたる孫娘ツネ子といふものあるべし、之れを妻に娶らば、（中略）佐藤秀顕氏は主として難波しこのことが有力なる競争者があるも、されど奪ふべし、されば大林有禮であるべし、ラは矢野氏の家庭を脅すことを断念したといふ

石油のもつとも悲しき犯罪

明治の初年余が家を一時雲峯に移したる時、父なる勇者といふ人が石油業者を思ひ立ち雲峯附近の村落の間を巡回して金を集めて歩き

を不規模に試みたることがあつた、されば海を倒んとするて徒らに余が父を炊しなら（ひ）むあつたが、其際の原料八里川の辺から取つたのであつたが、此頃の河辺の附近に業を目論むものがあつて、或る地域八町歩ばかりの原油の悪臭で行人をして鼻を掩はしめたる時代がありて明治十七年頃余が郷国雲峯の主第として所有せる折、柄目木の矢柄商衛と手沢の中空貫一が鑛業権のもの鑛區のもとから、或人と日々の様し身を設け来つて、諸新者の様なるもの、熱市を頼まれ家田が労さんとて、其間に面人死活の場合であつたらしい、あとまるつて居ること、柄目木の矢柄といふ家に生ま

年間に田家宮谷生れの山深く荒蕪地を開墾
すること陶しく石油の産出を見るに、そもそも不生
油脈を探つて遂に七年遂に家を開坑の為
を興らんと志す物家の猶兵に向ひしことがあつて其
高明の士数人同家に寄宿してゐる中野氏のるハ
毒しく知らるいが矢張り祖先者元猶兵の経歴が
あるとみいんてゐるかの五十九年の頃特権を
元治し此ことが為つて政府と新しく訴訟を件が
起り、政府も為めに元事に困んだが中野貫一ハ為に
根強く抗争し此の訴、終に勝訴となつて自分の日
々炊いさんとの事此際のるもあるが中野が紙幾一の
財産家となつたのも此訴訟が其原因となつてゐる

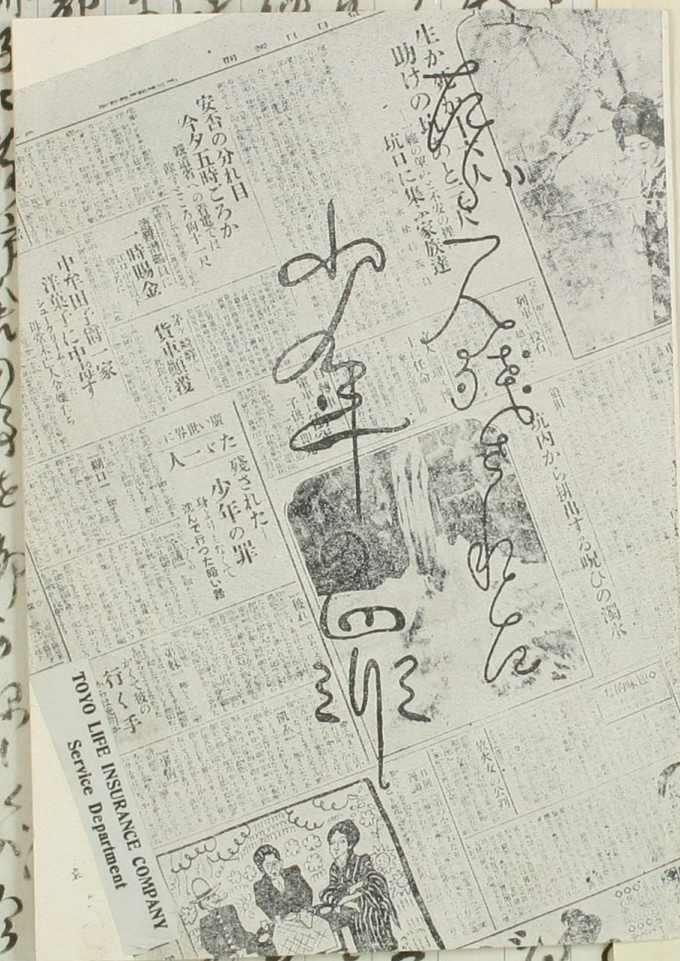
（十月廿八日の録）

○金が陶録中特に〇里の二新聞に連載したあ
を編纂して試みに部隊事として出版せんと
擬し、猶々編つたる前頁に列記したが人名
又異つた、彼の内に余の経歴に関する〇混す
ふハ如きもの、寧ろ全く抜味淡討りを以つて
一冊とするに若かずと気付いたつき彼の目録の内から
「初学面白」「鉄宗四夢話」の二を省き其代り
「春風趣味淡」「主馬燈」「御口号」「赤保々」
等を加へふることゝし、別に経歴に関する
ハ、出版前にそれを期するもあるも謝する
に見目録を心つて見んハ、たの如きものがある、

一　初学所感
二　維新四年夢後
三　新潟学校時代
四　新潟銀行における改革経歴　（新潟銀行時代の経歴）
五　余の趣味遍歴
六　自傳

一、三、四、五、六は四月八日より新聞紙に一日載せらるること、なりたれども、何れも長い間、立六八家に稿を留む、但し自傳は未完本也

○近来自宣傳何れも新聞も漸々変れるもきと宣傳法を練る様々言葉を飾る



廣い世界に

ただ一人

残された——

少年の罪

身よりもなくて

沈んで行つた暗い路

大震災でやしないの親から兄弟まで失つて天涯孤獨の身とされた一少年がたよるに知己もなく悲い心をいだきつゝ路頭にさまようてゐるうち遂に

糊口に窮するやうになりその擧げ句は世にも恐ろしい罪を犯す身となつた一場の社會悲劇がある。こゝに述べる少年某がその

やもめの賃仕事

人間は
後から分るほど
前には分らない
けれども
前に出來るほど
後には出來ない

主人公である。彼れは日ごと重い車をひつ張つて上野のバラックを一軒ごとに訪れながら炭を賣つて歩いた。話題に乏しいバラックの人々はいつとはなしに彼れについていろ〳〵の

詮議　を初めたところが少年は商賣のことになるといつも口を緘して一言も語らぬので人々は不思議な少年もあるものだと思つてゐた。そのうち噂はいつかそれからそれへと傳はり遂に外神田署の刑事の耳にそれがはいつた。そのころ神田秋葉驛の炭が頻々として盗難にかゝつてゐたので刑事はもしやと思つて十日いつもの樣に炭俵を積んで現れたところを途中から引致すると

彼れ　はわつとばかり泣きふした。あつけにとられた湊司法主任がなだめながら色々聞きただして見ると彼れの父某は震災前母

某と雇ひ人一人を使つて本所區某町に手廣く青物商をして何不自由なく暮らしてゐた。大震災の當日には少年は友人と稲毛の海水浴場に行つてゐたがおどろいて家へかけつけて見ると附近は一帶火の海でそこには懐しい父母の姿も愛らしい弟妹の姿も見ゑなかつた某は父母戀し

弟妹　戀しと三日三晩さがしまはつたがごうやら被服廠あとの灰となつたらしく幾日たつも何等のたよりもなかつた。

かくて彼の　行く　手　からは光明が消え去つた

一　初蕚面会
二　郷愁四夢境
三　新潟学校時代

それからの彼は今までとは打つて變つて働かねば食つて行かれなかつた。ところが身にふさはしい仕事は見つからず家業はばつたり駄目になつてしまつたので今更

飢ゑ

と寒さにたへかね悪いとは知りながらも心にもない盗みをしなければならなかつた。一月の四日京橋區某町一五番地先にあつた荷車を盗んで秋葉驛構内の某運送店の保管してゐる炭俵を一回に十俵乃至十五俵づゝ前後八回に亘つて百俵の炭を盗み出しそれを上野のバラックに賣さばいてはその日その日の生活を立てゝゐたのであつた。當局でも

事情

をきいて見ると今更檢事局に引渡すに忍びず、いろいろと引取人をさがしたが全くのひとりぼつち、身よりもなければ世

話しやうといふ篤志家もない。

皆さんの中で東京日々新聞をお讀みになつてゐらつしやる方はきつとこの哀れな少年の物語を御存じでせう。

これは三月十五日の夕刊に載つてゐた記事でありますから、皆さん御覧になつたことでありませう。

この慘めな少年の境界を見るにつけても、若しその両親が生命保險を附けてさへ居たなら、たとへこのやうな不時の災で身寄の者が皆なくなり、彼の少年たつた一人取殘されるやうな事に立ち至らうとも、彼は、かうまで暗い路に迷ひこんでしまうことはなかつたら

うにと泌々それを思ふので御座ゐます。

親達の僅かの手扱かりから、家庭生活の楔ともいふべき大切な生命保険を等閑にして、これを顧みなかつたばかりに、何も知らぬ可愛いい自分の子供を罪の子として都の街頭にその姿を曝させねばならないといふことは決して他人事として見逃しておくべきことではありません。

我れ人共に人の子の親として深く心すべきことではありますまいか。切に皆様の御一考を煩したいと存じます。

東洋生命保險株式會社

見り、毎日の飛び込み廣告、その投式さまざまなる
国語一々見るの如く拵へます、仕出屋を為すも
皆奏坑の焚料と供す、既に同々一廠を
傾するこの如く、愛に牧田の保険会社宣傳用
の摺物のごときも、一紙悲惨なる家庭の状を画
作る弱虫を挿入す、六冊子の美紙も亦
の意味を寓す、以て宣傳の一標とせんこと
叔めおく

○京都の蒲柿食を訪ねんと欲して未だ果さざる先代
も此冊子に蒲柿食のことを聊か記しおく、今又某
旅館にて左の記事あり、これも聚まる出来が唐柿を蒲柿と
為つけ記す

落柿舍と金福寺

松田竹の島人

五月十六日午前十時、京都から嵐山電車に乘つて、嵐山停留場に着くと、乘客は總て道を左に取つて、渡月橋の方へ行くのであつた。此日東道の主人と爲つてくれた牧民次郎君は、嵯峨通であるだけに、反對に右の方へ導かれた。そして先づ清凉寺に三國傳來といひ傳へゐる釋迦如來を拜し、其背後の墓地で、例の『廓文章』で名高い夕霧の墓だといふを見た。次いで楠正行の首塚、定家の厭離庵、尙ほ祇王、祇女並に其母刀自と佛とが、哀れをとゞめた祇王寺を見て、それから二尊院、常寂光寺、小倉山の時雨亭を見て、去來の墓を展した。

私が本誌に記する目的は、落柿舍と蕪村の墓のある金福寺とであるから、前記の古蹟古刹は、ほんの通り一遍にとゞめて置く、去來の墓のある場所は、藪際で、共同墓地ともいふやうで外に十數基の石碣が立つてゐた。竹の四つ目垣の中に、上の方が尖つて、一見烏帽子のやうな形の、高さ二尺もあらうかと思はれる自然石に、單に去來の二字が刻されてあるのが、私の目的のそれであつた。そして墓の眞背後に、樫のやうな木が立つて、翠蓋墓を覆ふてゐるのは、趣きがあつた。粟津義仲寺の芭蕉の墳墓が、餘りに掃除が行屆いてゐたから、翁の唱道した幽玄閑寂に缺けて、風趣がなかつたけれども、去來の墓は、四邊のもの寂びた工合、墓石の工合、如何にも俳人の墓らしい感じがした。次いで牧君から導かれて、落柿舍に行つた。門前に建てられた落柿舍云々と書かれた建札が、ペンキ塗りであつたのは、落柿舍の價値を損するものと思ふた。門は古く寂びて、如何にも俳人の棲家らしい感じがした。門を入ると、突き當りが玄關で、左手に竹の四ッ目垣があつた。案内を乞ふと、應と答へて出て來たのが、庵主の第九世堀晩翠詞宗であつた。切望こちらへとのことに、四ッ目垣の間から、庭の飛石を傳ふて、座敷の

の椽に腰をかけた。有繋に古い草庵だけに、庭には蘚苔滑かに、一木一草捨て難い風趣があつた。去來の落柿舍の記に

嵯峨に一つの古家侍るそのめぐりに柿の木四十本あり

とあるだけに、庭に一と本の柿木があるのは、其當時の面影を殘して幽しいと思つた。尙ほ同記に

鴛鴦に取られなば、天のみかどの惠みにも洩れなんと、常は屋敷守る下人をいと罵りける。今年長月の初め、彼處に至りぬ。折ふし都より、商人の來りて、木立に買ひ求めなんとて、一貫文差出し、悅び歸りぬ。予は夜此處にとゞまりけるに、ころ〳〵と屋根走る音、ひし〳〵と庭につぶるゝ聲、夜もすがら落もやなす。明れば商人の見まい來りて、我むかふ髮の頃より、白髮生るまで、此事を業とし侍れど、かくばかり落ちぬる柿を見ず、きのふの價かへしくれ給ひてんやと詫びぬ。いと便なければ、ゆるし遣りぬ。此者の歸へりに、友達のもとに、消息送るとて、自ら落柿舍の去來とは書き始めける。

とあつて、夜嵐に柿の實の落ちたので、落柿舍と名付けたのである。今尙庭に柿の木があるから、秋にはころ〳〵と落ちて、去來の滑稽な風懷を偲ぶことが出來やうと思つた。

去來が落柿舍記を書いた時、

柿ぬしや梢は近き嵐山

の句を詠じてゐるが、嵐山は近く眼の前に聳へて、此句が實寫に爲つたことが首肯された。座敷は數奇を凝してはなく、普通の小座敷に過ぎぬが、其質素なところは、有繋に塵俗を超越した去來の別寮だと思ふた。此建物は以前のまゝでせうかと訊くと、時々修繕は致したが往時のまゝですと庵主いふ。座敷の次の間は三疊敷程で、卽ち玄關の上り口である。芭蕉が、元祿四年四五月の交、此落柿舍に來て、十七日間滯在した。

卯月十八日嵯峨に遊びて、去來が落柿舍に到る、凡兆共に來つて、暮に及びて京に歸る、予は猶暫くとゞむべきよしにて、障子つゞり、荓ひきかなくり、舍中の片隅一間なるところ伏處と定む。机一、硯、文庫、白氏文集、本朝百人一首、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集を置き、唐の蒔繪書いたる五重の器に、さまゞ〳〵の菓子を盛り、名酒一壺さかづき添へたり、夜の衾調藥のものとも、京より持來つてまづしからず我が貧賤を忘れて、淸閑を樂しむと、其嵯峨日記に記してゐる。翁は去來が灰吹の掃除、隣の据膳、理屈と大斲の禁制を唱へて、風雅の佗びを極めた此別寮に幽

栖したに、去來、及び凡兆夫婦が度々來訪したし、尙史邦、千那、丈草、曾良、李由、乙州、羽紅尼なども又其門を叩いてゐる。これ等の俳人が、此處に師翁と膝を交へて、風月を談じたかと思ふと、言ふべからざる幽趣を感じた。定めて什物として、古俳人の墨蹟がおありでせうなと訊くと、如何にもあります。けれども獨身の私ですから、外出するに留守居がない爲め、先年盗賊が入りまして、取られたのは衣服のみで幸ひにも什物は何一つ取られませんでしたが、それから萬一を氣遣ふて、全部外へ預けて置くことにしましたから、鳥渡御覽に入れるといふ譯にはまゐりませぬと庵主いふ。縱令短い日數ではあつたけれども、芭蕉が滯在したに、名ある門人等が來訪してるだけに、それ等の筆蹟が什物としてあらうに、見るを得ざりしは、遺憾窮りなかつた。切望御寛りなすつて下さい。時鳥は啼きますし、夜に入れば水鷄も鳴きますと庵主はいつて茶を出してくれる。名刺の交換をして、繪葉書を求め、再遊を約して野の宮へと行つた。

天龍寺の境内を拔けて、渡月橋畔へ出ると、今迄の閑寂の境と違ひ、橋上から大堰川の兩岸を、遊覽人は踵を接するばかりに續く、けれども靜に立つ嵐山の翠微に對しては、何んとも言へぬ快感起るのであつた。嵐山といへば何人も花をいふが、私は寧ろ新綠の嵐山を取る、花は艶であるけれども、新綠の幽微に及ぶべくもない、船を傭ふて大堰川を溯つた。嵐峽館の傍で船を捨てゝ、山路を登ること二三丁で、大悲閣に達した。芭蕉いふ『花の山二丁登れば大悲閣』と、今にして思へば、此句能く大悲閣の景勝を詠じ盡してあると。

住職に乞ひ座敷を借りて休憩した。欄に倚つて見れば、重疊たる山、其間を縫ふて流るゝ大堰川の風色は、何んともいへなかた。時偶々十五日の月出でゝ、杜鵑頻りと鳴く、夕靄山を籠めて、淡きこと夢のやうであつた。どうせ旅の身の、何處へ泊るも同じことゝ、牧君と共に一夜の宿泊を乞ふたけれども、旅館の許可を受けて居らぬ當寺とて、嵐峽館から故障が出るから折角だが御斷りするとのことであつた。嵐峽館に泊るのは欲しない、辭して大悲閣を出ると、河鹿鳴き連れて、丁度私を送るやうであつた。

越えて十八日の正午頃、京都日々新聞社の藤田君と白石君とが、自動車で私の旅館を訪はれ、今から詩仙堂を案内するから、直ぐ支度せよとのことであつた。これより前私が詩仙堂を見たいと白石君に言つたことがあつた。それで白石君は京都の地理に明るい藤田君と共に誘はれたのであつた。直ぐ三人は自動車で、鳴

水の東、臺岳の麓なる一乘寺村の詩仙堂へ行つた。恰もよし二三日前丈山忌が營まれて、陳列した遺物が未だ其儘に爲つてゐたから、幸ひにも其遺愛品を見て、丈山其人を追慕するを得た。辭して門を出る時藤田君いふ、蕪村の墓のある金福寺は、近くですから御案内致しませうと、期せずして詩仙堂に遊び、そして丈山の遺愛品を見、尙蕪村の墓を展するとは、此日程幸多い日はなかつた。始めは詩仙堂が目的であつたけれども、近くに蕪村の菩提所があると知つては、平素其風格を慕ふてゐたゞけに、金福寺が主と爲つて、詩仙堂が從と爲つたと笑ひながら金福寺つ門を入つた。同寺は臨濟宗で、南禪寺の末寺だとのことである。近く改築する爲めに、本堂も庫裡も取崩されて、庭園は取り散らされてあつた。庭の躑躅の間に一基の碑が立つてゐた。表には蕪村と百池の句とが並べ記るされ、裏には二人の傳記が記るされてあつた。これは明治十五年蕪村の百年忌と百池五十年忌に、百池の孫百僊が建てたものであつた。庭に沿ふた山の半腹に、蕪村の墓があつて、墓石の表面に與謝蕪村之墓とあり、これと並んで、月居の墓があつた。少し離れて月溪と其弟景文の墓が並んであつた。月溪の墓は以前七條大通寺にあつたさうであるが、後此金福寺に改葬されたのであると。何れも死して師翁の下に集つたもので、此墓地天明から天保にかけての俳壇と畫壇の雄とが長き眠りに就いてゐるのである。什物としては記念帖などがあるさうであるが、庫裡取崩しの爲め取込んでゐたから、遠慮して見せて貰はなかつた。

◎『西多摩郡名勝誌』同郡の史蹟名勝を網羅し、寫眞挿圖約一百、記事精確、裝秩優雅、實に好箇の名勝誌である……東京府西多摩郡役所發行（非賣品）。

◎『日本北アルプス登山案内』近來同趣味の勃興と共に登山者年々に激增せるより是等登山者の爲に發行せるもの、初めての探嶮者と雖ども毫も遺憾なき樣懇切鄭寧なる案内書にして、寫眞挿圖數多を加へ、然も裝釘簡潔携帶至便の好冊子なり。（鐵道省運輸局發行）

◎『內容としての自然感』臼田亞浪先生著、石楠パンフレットの第三輯として發行。「新標語としての自然感」「表現の自由と季感の擴充」「眞實に還れ」「意力的表現としての俳句」「實相に徹せよ」等の各項を載す……東京府代々木山谷一七五、石楠社（定價金參拾五錢）

◎『墓碑史蹟研究』今回第十三冊を發行せらる、太平記場起原の碑、朱樂管江墓、河竹默阿彌墓、山莊の碑等あり……東京府代々木四三〇、同研究所發行（定價參拾錢）

墓碑月浦墓又の墓碑は往年まで訪低堂
を訪ひし折、訪問し記、金福寺の庭傍くに
ありき五陵墓、高尾と比墓のあるに
ことを記臨する、此の墓のある所が墓所無
趣味で、墓碑一面と引立たず、何等感興ル
記らなくなるとの如き矢印しに、こんな所の
印かしたい金もなきに、前歌の記るは三墓
に渡つて刻るから略か附記しておく
○一夕細川潤次郎の新國紀行を讀む漢文を
二冊本例の書國義版式半紙本なり、此人の著書
は皆同式なる、楽邦といふ〻出版されたもの
金が陸時と略ひなるに大なる七種あり、自

家の隠業校のものを陸時刊行するに至れ乗るとし
たるも、此人漢文なる故、讀難し、刊行物
はすべて一讀の價値あり、新國紀行は明治四年
官命を帶び米國へ渡航し途の紀行なり
農事視察が主用なるし故に紀事多く事業の
事に関し信ら観るの事に及ぶ、記事極めて精細
明治初年事業の外國紀行としては此
なる上出来のものなるべし、書紀行を書かんと心掛
る者は必ず此書を参考すべし、此時代の洋行者の記行
の如き珍らしかるべきも、こんなに文章の整ひたる
ものあるべし、墓碑を叙する業務の如きも

かくれ味山窟し、ナヤガラウ観瀑の記の如きハ数紙に
亘る大手業にて、シカゴ大火を回くるの記(もまた)
也一読の価あり、北人余外に文業に長ず、漢文
の著他多しあれども、北紀つを来(に)推すべし
さんとす

○異疾草紙といふ絵巻物中の一異彩にして、種々の
異疾を画ける中に往々臍下秘部ことに
るものあり、男女の性器をかくるに形代、虎
の穴の数個あるもの、男根の陰毛に毛虱のの
発生したるもの、陰部に腫瘍を生じたるもの
陰つを腫し、巡れるもの個中おのつから訴訟滑稽
秘部を寓し、人をして面を掩ひしめ、印つを人を

て一嘆を禁じ得さらしむ、想ふに北海道の本欲
ハ日多くあるか、他の図を見るに口鼻俗面口く
眉端黒色の血統、口鼻糞を口ら吐く、口く重
毛(二枚の毛)陰疾の酷なるもの而して人をして
見るを厭いしめず、印つて頤を解かしむるもの
ハ、土佐亟者の如しあるかんか、北の侍医の目的
能て醫術に資ちんとするにあるか、滑稽
を離れ真とするものに似たり

十月廿五日記

○西中教業一二の図を得(十月廿二日)

高江村鋪真録　三冊

北吉珠とすべからざるも、四ちんを活人

顧鐵山の四季詩冊并に表題
に印記あり、伴梅屋の彩泥の六花
人の印也、陶園詩話に此人の事を載
す、夢中一婦人に会す、後に其婦人と
飛鴻酸似の仙子を見るの不詩八詩法
未六卷十三枚に成り、和して冊の
前端に収め、彩者の大業とす

上下二冊　合一冊

一　四時幽賞

野間三竹が京深南の適（導）生八歳中蹄
幽賞に倣ひて四季山水の図に題し
詩并に款賛をもとめ、もって名
紙狩唯風の図あり、寛永年間の著

あり寛文八年京洛に於て梓に上せ
しなり也、木羅山の序跋あり、稿
数の出入あり、清書に清換あ
り

一　絵本鏡歌仙　寸法本　二冊

歌仙流行時代歌仙に擬らひなる多
くの出世なり、絵本鏡歌仙とは小杉
堂八婦女子の玩具に作りなるべし
金八寸本中すなわち北鏡歌仙也、
倣れ武将を歌仙に擬しなる也
古谷川光信の画するもの也大板版
に出版の際恢に代へて此り冊其

侍に附属す、一種玩具なるも余の初めて見る所也

一　正法眼蔵　　落款本　二十一冊

永平寺流の聖書にして名高きものなるも花山天皇の時に出でたるものなり、惟北条氏の家本は明らかなり、北条は尚文化年間の書入本にて各冊の終に「梅」を収む、架中に挿むべし

なる所以なり、寛政二年の刊本なり、

面山は近世の名僧なり、北傳加衣袈裟を主とし、鉢を以て環と策杖を帯し、咄嗟吉祥を祈するの

風を為す、ここを以て盗を為すを面山と呼ぶの為なり、鉢を転記しいるなれども北傳と為すは寃也、又記す曹洞永福寺住職なりしことあるか、巻中に永福主人の印を見る

又記す才七巻（仏祖宗禮）末八巻（嗣書）

全然面山の補宮なり、北二巻寛政版と

関くか、補宮の用紙版本と同じく輪廓

廓撰心刹宮階版本と同じ一（輪廓）

解す前刹、今勅校の他版を有せ

す且つ記して留疑を存す

心：補宮巻の目録の字

見くて刹しあるか

尚拾遺正法眼蔵巻之五（傳衣）全部
十五紙闕ケ前（前田校補写ナリ、紙共
他前ニ同ジ（次行の墨あるべし）
三巻の補写西山の筆ニ（成るとまれ）矢書寧
ろ珍とすべきか
尚は面山の本倩に列と指くべし　一冊
一　評利千程録
出の評利記ニ寛永七年版ニて
五百時出の評判記ニも此方ニ
しる
一　席新詩集　二冊
著者蒲村席新ハ儒者ニて

十二

当ハ三宅元羊と山崎闇斎ニ受け
茶道ハ千宗旦ニ学ぶ茶人ニて
特ニ知られ
ものハ集ハ寛和三年京都ニ刊
行せられ駿の稲歌の也ニて
二十五冊也

○春陽堂の国康雅訪ひ来り版書禮談の序
を需められ任ぜられ序一大言を著はし其不出の
梗概ハ版書といふの浮世絵を主のごとく浮世絵の
レートとして彩色を施し比所謂る錦絵と称す
るものの特の特なるものにて内業ニも却て優る

所があるので、必ず刻を招かれる。北斎は世界と云んで版画に無いびみょう、保し錦絵は何人も多くも多数もし且つ優位のあることを知らずにかく、殊に三人と雖も如何する及ばず、且童に図者の挿絵とうつるみる版画ハ本二：買かん先生と閑印さうく氣味がある、はんとん、本一量の著しくまい所に於て、本二多くの場合無彩色び画の手法も刻衣も露はんとみる所に於て、点晩輝絵が文章よりも印象を與へる所に於て、明るる童人すべきことあることを自分ハ特に工ムアアサイヴーしないどうやら浮世絵錦賞家の注意も進と北方面に注かんと来た所なり、挿絵

の著図出ハ月ジンく頃が昇騰してゐる、全体錦賞家の浮世絵を真に味ふべき細い印象挿絵爛熟期を奪ふ彩色絵ようも骨法の露出北版画とあると思先ら、版画礼儀の世を出るのもハ北の鼓吹の著あびあるべきハるべ云と十月井上記

○書籍村幸其外四人の著浮世絵本二七十種多く手に入る中に新き五種婚入

一 絵本東童郎　二冊

享和二年　歌川豊廣の画する所江戸市井の年中行事を描く、彩色あり、すべて書く所云と板あり、凡伝巻

考と云うべきものなり也 此價三十八匁

一 朝加田書 二冊

文化十四年四時庵形影の著す所、朝顔の書の名を桂を以て、図に形象を施し、俳諧に物を拾ひ、男女の序あり、本併新つゝ入るべし

小菊版本 一冊

一 潮来絶句

潮来絶句と図冊の半分を占む北海の著述にて画、俗謡すべし皆彩色を施す、巻尾に馬琴の潮来曲後集の文を附す、博もく巻の首尾後了

あり

一 桂庵和尚家法條目 一冊

今の文部の教書を読むが如きなり、お
のゝ〳〵遺法あることを條目といふ今
八家人と習慣の人とを、日の人も其の
七とを習ふることもきくことをなるも、
條目を定めし人の切に忘るゝ勿れ桂
庵和尚は北方面に指を枕して大名な
人をも、その家法の法を刊行したる
は極めて稀覯の書と尾し今は年を経
ること久し雖も幸にその不朽なる
は貴し價十八枚の書

價十二四とのふハ法のうれとも、高ハ記
誤多けれハとて略へる

一 宇津山ふ餘抄 古元 八冊

此書ハ三年京の栗山宇左衛枝
りうとの森田吟夕の化也、此者
の著人ハ未詳なれとも、[illegible]の
[illegible]、[illegible]のつけ方なれ[illegible]ハ四文
字尾なれ[illegible]輝紙なれ[illegible]
んなれ共殊[illegible]輝紙なれ[illegible]
[illegible]、各冊ニ沼氏抄[illegible]
飾なれ、巻名なれ[illegible]
第二巻名なれ第三巻片手[illegible]

併し文章ハ七七
調なれ西鶴流
ハ同しかなり

十二

ふ類也 北價八十四大改のふ四の高
尾本也

○石見濱四の四ふ高義彦著が萬葉四是
ニ寄せる書簡の写一冊 美濃紙二十枚計り
長文也、四是ハ村田春海の歌集琴後集
序しる漢文を是ハ也しるすとへ
[illegible]ふ論ふ[illegible]四是ハ漢文者とその主旨
ふ四歌を論し、又皇紀の典例をとり支那の
ふ、較文を[illegible]ふ、美し漢文の高義
清き春海ニ對して新ふ抄やるとん恐とく
春海の文を所とし、自家の集四の首編

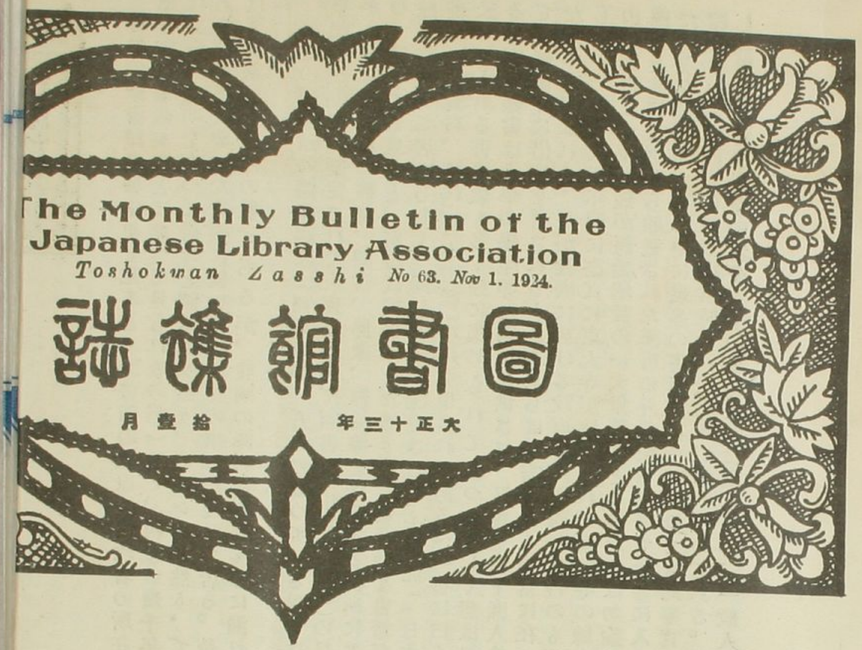
こ置きなるもうん亦四歌の集の序の四文用
を採ふを考とするもの漢文と載せるは必異
すもあれど漢文殊味あるもの他の四文者もおのづか
ら異なる所あるしかるに不ちうん、既に信らるる
四文者から此序文をとるべしば氣のうの所の
多くも、默して居うんすうるは、なるし四藩
のあるこ鴻藩のあるしやを家かを得べし、因
是の文ふ新強ら不南のあるを、係し支邸のる
を以て動比較さるすると既に不秋に伝くさるし
るるし、敵を駁するるものことるもあるさる
絶力を剝さす攻撃し措かさるは寧ろ序替
の題を異なるるるまるる序式し、係し退て考んへ

四文は序替こ取て一派の宗教なるうし、後の本
居こ教を受けも四文を侵すべからざる神聖なる
ものとなる、なる、行る者ら漢文者を凡ば異
端とも邪道とも見なく、変考汚いしとなるる
るうん、此の一日序の論の所く四文者の心祀
を解釈するものとなるべき歟、首面の此の書
状を得ざるるるとるるとこるる理由を以て開始も
せず六大き疑しとるるは、序替の歌こ序、此一
巻は異なる竹事いとらふ文化八年二月朱谷の
日附こ

週間讀書

催	主	後援	期日
帝國圖書館秋季展覽會	日比谷圖書館演劇展覽會	中央佛教會	家庭に書と讀書の人の定心抄
東京市立本郷圖書館	東京市立牛込圖書館	婦人と子供の天使	文學博士
協調會簡單生活講演	東京市立本郷圖書館	婦人と子供の天使	文學博士
東京市立本郷圖書館	東京市立牛込圖書館	婦人と子供の天使	文學博士
東京市立本郷圖書館	東京市立牛込圖書館	婦人と子供の天使	文學博士
東京市立本郷圖書館	東京市立牛込圖書館	婦人と子供の天使	文學博士
東京市立本郷圖書館	東京市立牛込圖書館	婦人と子供の天使	文學博士
東京市立本郷圖書館	東京市立牛込圖書館	婦人と子供の天使	文學博士

催	主	後援	期日
東京市立本郷圖書館	東京市立牛込圖書館	婦人と子供の天使	文學博士



. A. (Nihon Toshokwan Kyokwai). 32 Gasumbo-cho, Azabu-ku, Tokyo.

まで零細な後出版の住書を選擇し、之れを社會推薦する為、大学図書館の高度な利用を終了せし後、更に便利な方法を取り、又各和こ渡米後の諸資料を聞く事となり、為至細の点に於ける印刷物と又よりの印刷物の即ち裏面に出版の原生を如何に宣傳するの一種なり

十月三十日記

図書館デーを刊行された機関雑誌と一二他の参考となるものがあるらしく、こゝに収めて置く、海内諸文家の参考に供し、特に興味を感じ、せしむる

The Monthly Bulletin of the
Japanese Library Association
Toshokwan Zasshi No 63. Nov 1. 1924.

圖書館雜誌

大正十三年　拾壹月

Published by J. L. A. (Nihon Toshokwan Kyokwai), 32 Gasenbo-cho, Azabu-ku, Tokyo.

まで愛吹後出版の住書を選擇し、之れを社會推薦すること、大学図書館ルーム不給の高度を和を修了せし程度に使用する方法を明り、又各和に渡者投吹の講演会を開くことも亦り、各番組の右に收めたる印刷物と又よ、その印刷物の即ち裏面に出版の廣告を收めたる宣傳びうの一種なり

十月三十日記

図書館デーは刊行されたる機関雑誌と一二他の巻頭とするものがあるが、こゝに收めて、海内一文学者の多い物に興味を感せしむる

我國の圖書館の回古

和田萬吉

世界の圖書館の發達史を見ると、圖書館の起原は爲政者の所在地と宣教家の本據とに遡つて見られるのが一般で、西紀前幾千年に立派な文明を有つて居たと謂ふ埃及然り、アッシリア然り、である。其後に興つた諸國に就いても同樣の事實が現れて居る。是は人文發展上自然の數であるが、我國の圖書館も其多分に漏れぬ。

日本の圖書館の慥な起原は判らぬが、吾人の知つて居る限ては皇紀十四世紀に制定された大寶令の中に圖書寮（中務省所屬）の目があつて、官府の經籍、圖書、佛像、經論等を保管する役所になつて居るのを見ると、當時民間にはまだ餘り多く無い樣な書籍が茲に收まつて居たらしく、同じ世紀に選進された「古事記」「日本書紀」の資料、殊に「日本書紀」中に引用されてある「一書に曰く云々」とある書籍類も多く茲に集められてあつたらしく想はれる。寮の藏書は大學の學生等の需用に供され、又親王以下庶人まで或制限下に借覽を許されるとあるからは、需用者も相當に在つたものと思はれる。是が我國に於ける政府の圖書館の最古のものらしい。其後天平年間に奈良に東大寺が建てられて勅願寺の總本山の形になつて、茲が經論聖敎の一大集積場となつたのは勿論、佛典と共に支那から舶載された漢唐の外典類も先以て此寺に入つた。現存東大寺文書の中に幾多の書目が在るのを見ても此事實が證明される。同寺の經藏は當時の一大文庫であつたのである。但し利用者は官邊關係の者や寺中の上司などに限られて、一般人民には全然沒交渉のものであつた。此頃入唐の僧俗は求法學問の後歸朝に際して許多の道釋儒書を將來したもので、是に依て支那の典籍類の日本に傳はるものは非常に多く、就中吉備眞備、僧玄昉の私有文庫の如きは有數の收貯であつた。眞備は私立の學院を設けて居たから、其文庫は學院に出入する生徒等に使用されたものと想像されるが、悉しいことは判らぬ。眞備と殆ど同時で稍後れて大納言石上宅嗣が奈良朝の末期に出て芸亭文庫を建てゝ有志の登覽に任せたことは著明の事實であるが、是こそ我國に於ける最初の公開圖書館と稱すべきである。平安朝になると、有力の搢紳家が自家自流の子弟敎育の爲に私學（和氣氏の弘文院、藤原氏の勸學院、橘氏の學館院、在原氏の奬學院以下釋空海の綜藝種智院等）を設けたが、此等は孰れも學院即文庫と謂つて可なるものらしい。和氣氏の弘文館の如きは藏書數千冊とあるを見ると、其他の學院文庫も相當の收儲を有つたことゝ思はれる。入唐の僧侶が彼國から將來した佛書類は其目錄の傳はつて居るものに據つて見ても數量はなか〳〵多いが　其所藏の寺院文庫即ち經藏も次第に大きくなつたに相違無い。無論舶來の唐本ばかりで無く、日本高僧等の撰述した聖敎類も其中に入つての事である。

平安朝期は奈良朝期を承けて漢學隆盛の時代で、漢籍の渡來は頗多くなつたが此等を最も多く集められた處は朝廷の後院たる冷泉院で、茲には書物の外に珍寶奇什も澤山に在つた。尤も當時の書籍は寶物に近いものが數多であつたらしい。處が此貴重の冷泉院が貞觀十七年の火災で亡びて了つた。其時燒失した書物（漢籍）の如何なるものであつたかを偲ぶべき記錄は有名な「日本國見在書目錄」（藤原佐世、宇多天皇の勅を奉して撰述）である。此を繙くと當時の學問の趨勢も分り、又後世本元の支那に亡佚して名目も判らなくなつた書物が曾て我國に存在した事證を示す。眞に有力有價の記錄である。長い平安期には段多の圖書蒐集家が現れて幾多の私有文庫を作つた。前揭搢紳の私學の後を承けたものに菅原道眞の紅梅殿が有名である。茲で菅家等の子弟を敎養して多數の秀才を出したとある。今も京都高辻の北、西洞院の東に其遺蹟を偲ぶことが出來る。世稍降つて大江匡房が父祖傳來の藏書に自分の所集を加へて二條高倉の地に千草の文庫と云ふを建てたが、是は其頃日本一の大圖書館として世人の推稱したものであつた。匡房薨後仁平三年火災に遭つた時の事を「兵範記」に「江家文庫、不能二開闔一萬卷群書片時爲レ灰了、是朝之遺恨、人々愁歎也」と記してある。但し例の私有文庫で公開では無いが、公卿等は緣を求めて借覽する位の事を得たものであらう。匡房以前後冷泉天皇の永承年中（皇紀十八世紀の初）に藤原資業が山城日野の山莊に立てた法界寺文庫や、匡房以後近衞天皇の久安年中（皇紀十九世紀の初）に藤原頼長が京都大炊高倉に立てた一文庫の如きも知名のものである。頼長は無類の好書家且好學家で其家乘たる「台記」に講學讀書の記事頻々であつて、其中に此文庫の建造整頓の有樣をも載せて居る。火難を恐れて用意周到の造方をして居る處は感心であるが、自分等が起した保元兵亂の爲に文庫は滅茶々々になつて了ひ、其身は敗亡の憂き目を見たのは、何と無く辻褄の合はぬ樣な氣がする。元來偏僻の本性であつたから、其藏書を他人に利用させる事などは無かつたであらう。頼長と同時の人で頼長には師匠筋であつた藤原通憲（信西）も平安朝末期の藏書家であつたが、是亦野心に累はされて、平治の亂の大立者となつて、結局非業の死を招いた。此人の私有藏書目錄が今日に傳つて居るのは不思議である。邸宅が敵兵に焚かれた時藏書も烏有に歸して、何一つ殘らなかつた趣である。

此頃朝廷では歷代の記錄簿籍類を官務文庫に收めて壬生官務家の所管に屬せしめてあつた。然るに所謂源平時代に於て此文庫の事が端無く世間に表れた。それは壽永二年源義仲が京都に上つたので、平宗盛等が安德天皇を奉じて都落をしようとした時、大切な朝廷の記錄類を抄掠して持行かうとする虞があつた。そこで後白河法皇の命で義仲は手兵數十騎を以て官務文庫を守護して平氏の暴手から免れしめた。此文庫は二條天皇の永萬元年の建立に係り、東西五間南北三間の倉で壬生官務歷世の人の記錄した文籍が悉く集められ、文庫の修理は時々あつたが凡て官費を以て支辨せられ、後年江戸時代まで繼續したが、皇室の式微と共に何時と無く衰廢に歸したのは殘念である。

鎌倉時代に移つて、北條氏は典籍の保存に注意し、貞永年中北條泰時は天下の遺書を求めた。又問注所執事三善康信は鎌倉に名越文庫を設けて爰に將軍家の藏書及公務上の記錄類を收めたが、久しからずして承元二年の火事に燒亡して了つた。併し此文庫の存在は鎌倉武士中學問に志のあつた者を動かして金澤文庫の如きものを作らせる基因をなした。金澤文庫の創立年代は慥には判らぬが建立者の北條越後守實時であることは明白である。實時は非常の爲學者で同廢清原敎隆を師として經史の講究に心を委ね、稀親書類の求得に力めた。文永七年其邸宅が燒けて幾多の藏書も運命を共にしたが、其後更に志を勵して再購復寫の勞を積み、遂に相州金澤の采地に金澤文庫を創して天下の祕籍珍書を收儲した。實時齡三十歲頃から五十三歲の歿年まで二十餘年間の求書の部數などは詳て無いが、其採訪が京都の御所を初として諸寺諸山に及んで到れり悉した樣は感ずるに餘ある。而も單だ集める許りで無く、書寫校點を自らして命終の年に至る迄一日も懈怠しなかつた根氣の旺盛は驚くべきものである。後世近藤守重は實時を激賞して、「金澤氏ノ典籍ニ大功アリシコト千歲ノ賜ト謂フベシ既ニ其功績ヲ賞スル時ハ其人ノ出處進退正邪忠不忠知ラズンバアルベカラス之ヲ異邦ニ求メバ孔廟ニ從祀スト雖モ可成云々」と云つて居る。殊に感嘆に勝へぬ事は古典の蒐集保護の業が創立者一代に止まらず、子顯時、孫貞顯貞將と三世に涉つて曩祖の志を紹繼したことである。貞顯貞將は否運に遭つて宗家一門の難に殉じた處は武士の典型として天晴である。さて金澤文庫は兵亂の街を離れて居たのが幸で、所有主は亡びても文庫は殘つて、隣地なる六浦の稱名寺の住僧の手に管掌され、南北朝から室町時代の永享頃まで儼存した。

鎌倉時代は宋元から來朝の禪僧及我國から求法の爲に彼國へ渡つた僧侶の將來に係る佛書類を本として覆刻本の流行を來したので、書籍の流布が急に多くなり、隨つて文庫の發生に都合が好くなつた。京都及鎌倉各五山の經藏の充實は想像に餘りある。併しながら佛典專門の文庫であるから、無論世俗とは沒交渉であつた。東福寺の普門院や海藏院の文庫の如きは殊に有名で、後者は多數の儒書をも包藏した。是は「元享釋書」の著者虎關和尙の所集である。

此頃朝廷の御文庫の存した事は北朝文和三年の撰「仙洞御文書目錄」に依て判る。藏書の種類及整頓の模樣も凡そは何はれるが、規模は小いものらしい。書籍を文車に載せて隨處に牽出される樣にしてあつたのは、後世外國にある移動書架（ムービングシェルヴス）の用に似たものと見えて面白い。尤も文庫は平安朝時代から行はれて居たものらしい。

室町時代の藏書家としては一條兼良を推さゞるを得ない。其桃華坊の文庫には攝關家傳來の公私記錄及和漢典籍が無數に收められてあつたが、應仁の戰亂に半兵半賊の輩が庫中から七百餘合（一合に約五十冊入と算じて總てで三四萬冊との見積りを本居宣長がした）の圖書を拋出して路上で蹂躪した。それを見て居た公

の無念さは如何許りであつたらうか。此文庫平常火防の用心から（邸宅の大部分の檜皮葺であるに反して）瓦葺の頑丈造りであつたのが賊徒の眼を牽いて、寶物の倉と見違へられたと兼良も嘆じて居る。兼良の文庫のみならず此時の亂に社寺公衙から貴紳の第宅の大部分を焚いたから、圖書の罹災も非常であつたに相違無く、此頃まで辛うじて持傳へられた古記舊典の滅びて後代に遺らなくなつたものが多數に上るのは殘念千萬である。

室町時代の文庫事業の最も著明なるは皇紀廿一世紀の末に上杉憲實が下野の足利學校を再興し、茲に多數の漢籍を寄附し、鎌倉から圓覺寺の學僧快元を招びて管理の任に當らしめ、僧俗の生徒を延いて學問させた事である。學校即文庫であつたのは昔の貴紳等の作つた學院と同一例である。地方に在つた爲に應仁の大亂にも災害を被らず、幾變遷を經ながら大體の形を江戸時代に持續した。憲實は當時廢滅に瀕した金澤文庫をも修理して再興せしめたから、結局文庫の保護者として尊敬すべき人である。尚後年の談に屬するが、德川家康の文學復興計畫を援けて偉大の功績をあらはした禪僧元佶は曾て足利學校に庠主たりし人である。若し足利學校の文庫と云ふものが無かつたならば、さしもの家康も據る所が無くて逸書の採訪などに思到らなかつたかも知れぬ。それから憲實の後嗣憲忠、憲房二代合せて父祖三世に亘つて好學の人であつたことは金澤文庫の實時父子の場合に酷似して居るのも面白い。金澤文庫と足利學校とは半公開の圖書館の始祖と稱すべきであらう。

それから組合即ち會員組織（サブスクリプションライブラリーズ）文庫の初らしいものは南北朝の初葉に伊勢の神主荒木田經延が宇治鄕岡田村に一文庫を建てゝ岡田文庫と稱した。然るに貞和三年火災に罹つて建物も藏書も灰燼となつたと云ふ。後に江戸時代の貞享三年に宇治會合所の人々が相謀つて內宮文庫を作つたのは此岡田文庫の昔を釋ねての事かとも思はれる。

室町時代から戰國時代に移るが、後者は期間も短く且其名の如く兵馬倥偬の爲に特に此間に於て文庫創立の事あるを聞かぬ。

江戸時代に入ると、彼の德川家康がまだ駿府に在つた頃から着手して居た集書事業に源を發し、慶長七年江戸城內富士見の亭に文庫を建てたのが政府所屬（見方によつては將軍私有文庫）の大文庫の濫觴である。後同じ城內の楓山に移されて所謂楓山（又紅葉山）文庫の稱を得た。此文庫の內容は家康の學術文藝に對する趣味の無局限に起つて、儒釋道家政書史傳は言ふに及ばず、和歌、俳諧、遊藝、醫藥其他種類の何たるを論じないで凡そ網羅的に蒐集されたものである。家康の度量の廣大であつた事は爰にも想像され集書の規模から言ふと楓山は遙に金澤、足利諸庫の上に出て居る。此文庫は德川幕府二百五十餘年間を通じて存續し且擴張され、以て我國に於ける官設文庫の範を示した。もとより將軍家の手許本を收藏する處で、公開の性質を帶びず純然たる祕庫として取扱はれたのであるが、佳本貴書を尊重して常に保存に注意し、知名の學者（例へば桂山彩巖、青木昆陽、近藤正齋、林復齋等の如き）を擧げて監理者（書物奉行）とした事は、間接に日本の上下に少からぬ影響を及し、漸次諸侯、幕臣等の間に圖書蒐集熱を盛ならしめた。殊に德川宗室の紀尾水三家は各家とも賢明なる始祖以來藩學を起し又は編纂局を設けて文敎の隆興に努め、學校なり編纂局なりの附屬文庫を設けた。就中德川光圀の大集書は彰考館の文庫を作つた。一般諸侯の藩地にも皆學問所が備つて其處には大小の文庫が書生の爲に開かれた。其著しいものは加賀の明倫堂、熊本の時習館、出雲の明敎館、福井の明善堂、長府（豐浦）の明倫館、米澤の興讓館、彦根の弘道館、松山の明敎館、津の造士館等である。此等は單だ學生の敎養所たるのみならず、有益なる書籍の出版局ともなつて當時の所謂官版數百部を刊行した。幕府自らも多數の官版を出したのは言ふ迄も無い。世稍降つては桑名の松平家、信州須坂の堀家、豐後佐伯の毛利家、上野佐野家、紀州新宮の水野家の如き集書家の私文庫も有名のものであつた。

併し學校文庫としては當時の官立大學たる昌平黌の文庫の上に立つものは無かつた。此文庫の創立は德川氏の初祖の時から學政掌理の任に在つた林道春である。初め道春は邸第を忍岡に賜つて、爰に學校を建て多數の漢籍國書を蒐集した。道春の後嗣林鵞峯の時には藏書既に三萬册に達したと云ふ。其後元祿三年學校は湯島に移されて所謂聖堂（大成殿）を有つた官學となり、林家は大學頭を世襲することになつてから、文庫も彌擴充されて我國最高の講學機關となり、以て幕府の終局に及んだ。其最後の

藏書數は無慮二三十萬册に上つたであらう。

昌平黌の漢學張りなるに對して起つた和學講談所は寛政四年塙保己一によつて建てられた。規模に於て昌平坂學問所の堂々たるに比ぶべきで無く、且純然たる官學では無かつたけれど、其勢力はさゝ〳〵侮り難いものであつた。保己一は此處に據つて國書の底本を集めて「群書類從」を編纂した。塙氏の私有温故堂文庫と講談所文庫とは差別の有無を判じ難いが、假に兩者を別々のものとして合計二十萬近くはあつたらしい。卽ち我國の國書本位の圖書館として楓山文庫に次ぐものであつた。此も看版を打つた公開圖書館では無かつたが、學者研究家の間には相應に利用されたらしい。

江戸時代に於ける庶民間の文庫は寛永年中の昔に淺草に板坂卜齋と云ふ醫師が開いた淺草文庫と稱するが始てであらう。明暦の大火に燒亡して了つたので其詳細は傳つて居らぬ。地方では慶安三年伊勢山田の神職度會延佳等の發起した外宮豐宮崎文庫の建立がある。林道春の記文によれば佛書以外の和漢書を多く收めたとある。次て貞享三年に同じ勢州宇治會合所の大年寄數名の協同で同處丸山に內宮文庫を立て、元祿三年之を林崎に移して林崎文庫と稱した。是れ今の神宮文庫の前身で、現在は宮崎文庫を購入して大に收儲を增した（近年の所算約十萬册を超ゆと云ふ）。神社關係の文庫は此神宮文庫の外に常陸鹿島神宮の文庫、山城賀茂社の賀茂三手文庫、同北野社の文庫、大阪天滿天神社の文庫、攝州住吉社の文庫等が有名である。孰れも紹介を經て參觀を得る程度であつた。

個人の文庫の近代に顯れたものは寛政年間陸前鹽竈の社官藤塚知明が父の遺書に自己の所集を併せて開いた名山藏文庫と云ふがある。部數は和漢洋書合せて一萬餘部。有志の來覽を許した。又一つ同じ仙臺の人靑柳茂明が天保年間私財を損てゝ書庫を作り爰に二萬五千卷を收めて普く書生に開いた靑柳館文庫は全くの公開圖書館として當時異數であつた。

江戸時代になつても寺院の知名なる者は大抵相應に大きな文庫（經藏）を有つて居た前期から引續いて繁昌して居る奈良京都の諸大寺及江戸時代に興つた寛永寺、增上寺の如きは其經藏の富は盛なものであつた、其外尾張大須の眞福寺、近江の石山寺、三井寺、紀州の高野山等はそれ〴〵に往時より傳來の典籍、聖敎、寺記類を保存する文庫を有つて居たが、其大部分は秘密のものであつて、多くの人は其內容を窺ひ得なかつたが、明治以後其中に貴重な書籍類の在ることが判り殊に稀覯の品は國寶として特別の保護を受くるに至つた。

文運隆盛を極めた江戸時代は圖書蒐集に種々の便宜があつたので、所謂集書家が頻々として現れた。諸侯等の私有文庫事業の一端は既に前に揭げたが、是と並んで京都の搢紳家の中にも前期以來の藏書家が五攝家を初として稍多數に在つた。此は家職世業が公卿の間に定つて居たから、自然分科的に圖書記錄の蒐集保存を努めたものであらう。就中近衞家の陽明文庫の如きは古今の珍籍佳書を藏して最も豐富なるものであつた。之より下つて中院家、冷泉家、東坊條家、野宮家等も各藏書目錄から推して相當の文庫を有たれたと察せられる。江戸其他に門戶を張つて居た多數の儒者和學者等は大小の差こそあれ、大抵一廉の藏書家であつた。新井白石、荻生徂徠、村瀨栲亭、平山兵原、木村蘆菴堂、立原杏所、山崎北峯、間宮士信、龜田鶯谷、本居宣長、荒木田久老等は皆其藏書目錄を遺して居る。又大田南畝、屋代弘賢の如きは雜書蒐集家として名高く、丹波元簡父子、吉田篁墩、狩谷棭齋、市野迷菴、小鳥實素、新見正路、山直瀨養安院、福井榕亭、伊澤蘭軒、澁江全善、鈴鹿河內守の如きは古典籍愛藏家として著聞した人々で、其藏中の逸品が經籍訪古志を賑して居る。併し此等は悉く私藏家で、公開文庫には緣の遠いものである。されど諸氏の愛書翫籍熱が無かつたならば、貴重なる古典類の明治時代に持傳へられることも危かつたであらう。書籍が實用になるならぬは利用者の如何によつて定ることであるし、又大正の今日の樣に公開圖書館が自由に容易に其所收を一般讀者に提供するので無ければ讀書が出來ないと云ふ譯も無い。而して今日の圖書館の有難みを知る爲には昔の讀書家が如何に困苦に堪へて其欲求を果したかを偲ぶのも興味あることである。（了）

洋式圖書館の嚆矢

橘井清五郎

標題のやうな觸れ出して、此處に掲ぐる決議書の一片と我が圖書館協會との因緣談を致します。

歴史家の最も興味を持つのは江戸幕府の末造上下混亂の一時代である。恰も熟柿が枝から落ちて自ら地上に打ち潰れるか、黒い鳥が天から降りて來て啄き碎くか、何れにせよ其まゝには居れない時節となつて來て、幕府の政治家も大變狼狽の姿であつた容子が見える。今迄調法がつて居た蘭醫に制限を加へるやら、和氣清麿を俄かに護王神に崇め出すやら、商傑として默認して居つた外國貿易商の錢屋五兵衛が忽ち奸商の名の下に誅せられて財産を沒收されるやら其内治外交に手が廻りかねた狀態が、年表を一覽しても直ぐ解るのである。嘉永の末年黒船一艘浦賀の沖に現はれたが、上下驚愕して世論鼎の湧くやうな大騒ぎで、日本の國も内地の政治家の爲めに亡びるか、外國の黒船に打ちのめされるか、一かバチかの瀬戸際に迫つて來た。

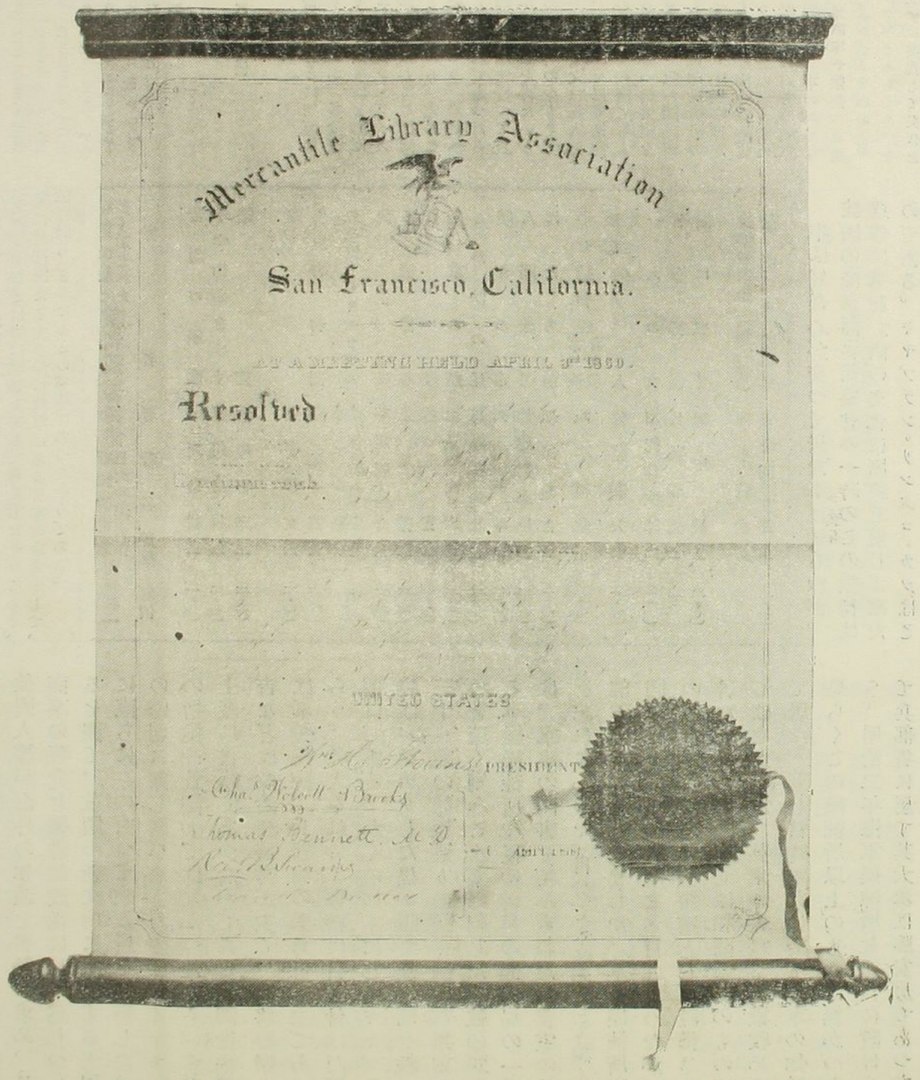
右の大騒動を起して居る間でもチャンと前後の思慮を整へて、國家の休戚を考へてゐる大政治家もあつた。我が漁民が黒船に脅かされてから三年目に、チャント和蘭から螺旋仕掛の蒸汽船といふものを、大枚七萬弗を出して一艘買ひ込んで居る。百馬力（二百五十トン）の小型の船であつて、和蘭の船將キャピテンディキや後にペレスレイケンなどを雇入れて操練をやつた。政府では洋式の兵備を俄かに觸れ出すやら、蕃書取調所が設けられて、盛に外國事情を知りたがる一方、蕃書に捻閲を爲して居る。遂に米使の居催促になつて互市を約する。次いで五箇國條約が出來上る。今迄攘夷を振廻して忠君愛國を叫んで居た徒は掌を反す如く狼狽に遇ふ。此うなつては熟柿は自ら潰れた許りか天から降つた黒鳥の爲めに啄き碎かれて仕舞つた。此れで滅亡したら其れまでだが、此處が日本人で、碎かれた果實から堅實な核が芽を出して來る。尻をまくつて鍬を立て、石造の大家屋の立て並んだ木張の大道を、ブヒーヒョイト、ヲケーショーと皇威を新世界の一都市に耀かしたのであるから驚く可しである。

大使新見豊前守正興副使村垣淡路守範正監察小栗豐後守忠順などいふ面々が、ポーハタンと種する赤筋入の米艦に乘せられて太平洋を横切り條約の批準を求めに行くことになつて、安政七年（一八六〇）二月十一日日本國海岸を離れ、決死の勇を奮つて米國サンフランシスコに着いたのが三月九日の午後であつた。此は新世界へ日本使節が行つた最初である。所が此船の到着する十數日前二月廿六日既に日本人が自分の腕のみで太平洋の怒濤を乘り切つて、チャンと此港に正使を持つて居た一船がある。其は一月十三日品川を發し、軍艦奉行木村圖書頭を乘せた咸臨丸である。此れが則ち和蘭から購入した螺旋仕掛の蒸汽軍艦で、之を操縦した指揮官は勝麟太郎といふ當年三十八歳の「黒い眼のパッチリした凛々しき姿の小造の日本人」である。麟太郎とは義邦後ち安房と稱した海舟先生のことである。黒船を始めて見てから三年目に軍艦を購ひ、更に三年後に外人の手を借らず、自分の腕一つで世界の際から際まで乘り切らうとはサスガ海舟先生である。

勝海舟先生當時は海軍教授頭取の役で、咸臨丸の船長の事務を執つて居たが、船が桑港に入るや長い航海から疲れた軍艦奉行始め船員等が早速上陸して土の上を履み、外人の饗應に應じたいと申出でた時に、正使の來らざる間は相成らずと頑張つたが、其中に正使が到着した。西暦一千八百六十年の三月廿一日に桑港各區監理委員の決議を以て、此日米兩國未曾有の事件、而かも米國難破船ゼ・フェニモア・クーパーの海員を護送せられた厚意等に對し、木村攝津守始め咸臨丸一行を歡迎せんとしてあらゆる

試待を準備した容子が見えるが、其れと別に四月三日桑港の商事圖書館協會が日本軍艦咸臨丸の船將及士官を特別に招待せんとの決議をなし、五名の招待委員を設けて準備をして、其決議書を送つて來た。原本は今寫眞に掲げて居る所のものである。縦一尺二寸五分横九寸二分の羊皮紙で、上下に花瓣のやうな木質の軸が附つて居て、文字は悉くペン書きである。殊に米國のシムボルである鷹が止つて居る書物の一冊には、ペリーのジャパンとあるなど彼國人相當の意匠が施されて居る。其印章には（ワックス・イール）臘印の代りに（エムボッシングスタンプ）盲押印を樺色紙に押し出し、細い紐章を飾つてある。

Mercantile Library Association
San Francisco, California.
AT A MEETING HELD APRIL 3d 1860.
Resolved That, inasmuch as the Correspondng Secretary of the Association has extended an invitation to the Admiral and officers of the Japanese Steam Corvette Candinmaruh, to visit the Rooms of the Association and toavail themselves of the Privilege Sheret of, a Com-



商事圖書館協會から勝海舟に贈つた歡迎決議文

mittee of five be appointed of which the President shall be Chairman, to wait upon the Admiral and request him to name some day when it will suit his pleasure to accept the invitation in question, and that said Committee officiate upon the occasion as a Committee of Reception, for the purpose of entertaining them in an appropriate manner, this being the occasion of the first Visit of a Japanese War Vessel to the UNITED STATES.

W.m H. Stevens, PRESIDENT
Cha.s Wolcott Brooks,
Thomas Bennett, UD.
Rolt. B. Swains,
Frank Baker
} COMMITTEE

以上は全文である。此時の商事圖書館協會とは如何なる組織であつたかは私は取調べて居りませぬが、多分彼地の貿易商其他外國關係の若干の人々が外國事情を研究し、貿易擴張を研究するコントリビューション・ライブラリーかの如く思はれる。この組合が心を盡しての招待には、麟太郎先生も衷心感謝した事と思はれる。尤もこの招待には種々な意味が含んで居つたであらう。米國へ始めての日本の軍艦に敬意を表するとは勿論であつたらうが、その他に日本人としての船將等に好意を持つて貰つて置いて、他日貿易開始の時に何かと便宜を得たいと思つた人もあつたらう。又日本研究の一資料のつもりで日本人に接して見たいとの考もあつたらう。又は婦人連中になると全く千里外の異人として、好奇心を以て見物するつもりであつたらう。併し先方のことは如何でもよい、我が皇國の船將等は眞面目である。協會の圖書室を訪問して、海外研究の書籍の積重れを見て、我が國民が時世に後れて居たのを嘆息したであらう。東印度會社の報告其他の外國調査の書物なども見せられて感慨に打たれたらう。又彼地の總督の館を訪問して、庭園の花卉愛すべき異花異艸に奇異の想をしたらう。磚造の三層製の家を飾る美麗なりと感じ、屋上の遠望臺上の四方玻璃窓から灣内の光景を見せられて、風光明媚は日本のみでないことに氣が付いたであらう。その他臥床や敷氈の立派で且清潔なのに感じた事が日記文にはある。その他ホテルやレストラン・商品場等へ出掛けた事であらうが、その時にはこの協會の委員役員等は親切に案内して呉れたやうである。又咸臨丸で送り歸してやつたキャプテン・ブルックなどは實に親切を盡して奔走したやうである。兎に角茫漠たる太平洋の彼岸にある日本の珍客として、款待到らざるなしとの有樣であつたやうである。

震災後最も多く讀まれた

新刊圖書目錄

帝國圖書館日比谷圖書館調査其一

書名	著者名	冊數	定價
○苦悶の象徵	廚川白村	一	一・八〇
十字街頭をゆく	廚川白村	一	二・五〇
超克	倉田百三	一	二・二〇
○鷗	金子洋文	一	二・〇〇
啓吉物語	菊池寛	一	二・〇〇
此悲愁・レ・ミゼラブル	佛・ユーゴー著 久米正雄譯	一	二・三〇
黄	風芥川龍之介	一	二・三〇
多情	雀佛	一	二・三〇
心里見	薛	一	二・三〇
眞	菊池寛	一	一・四〇
東京の顔	加藤武雄	一	二・八〇
とかげの尾	正木不如丘	一	二・二〇
嘆きの市	久米正雄	一	二・三〇
人間繁榮	豐島與志雄	一	二・三〇
はたち前	細田源吉	一	一・八〇
半七捕物帳第三輯	岡本綺堂	二各	二・〇〇
短篇美人集	佐藤春夫	一	一・三〇
一人の女	加能作次郎	一	一・七〇
春話	佐藤春夫	一	二・〇〇
暮れに哭く	田中純	一	二・三〇
○綺堂戲曲集（第一卷）	岡本綺堂	一	二・三〇
無明と愛染	谷崎潤一郎	一	二・二〇

半は好奇心が交つて居たかは知らぬが、彼國の商事圖書館協會の一時のこの款待は意外にも我が國の文化に脈絡を通じて來たのである。キャプテン・リンタロ・カツはこの商事圖書館協會の圖書室を仔細に巡覽し彼國人等が海外の知識を書籍に求め、且つ商事の研究を圖書館設備に於て爲しつゝあるを觀て、彼國の新文明に感服すると同時に直ちにその由つて來る所を洞察した。彼の歸朝に際し購ひ來りたるはダイヤモンドの指輪や首飾りではなかつた。その多額の土產は書籍であつたのである。調役福澤諭吉などは政治經濟書が主で、船將勝麟太郎は軍艦操練、兵器等の參考書が主であつたらう。各人それ〴〵書籍に目を付けた所は悧口である。かくの如くにしてキャプテン勝はバツチリした黑い眼で新文明を觀て、三十八歳の智慧盛りの頭へ圖書館事業の印象を深く刻みこんで歸朝した。彼の頭取たる軍艦操練所や後の神戸の操練局の一室には、軍事の圖書を積み重ねた圖書室の設備を忘れなかつた。自分でも勉强して讀んだ。部下にも喜んで讀ませた。軍艦操練所附屬圖書館といふ近代的な名目は無つたが、その事實は操練所の書籍室として設備されて居た。この操練所では和蘭系統のもののみではなかつた。英米の書籍も多數收められて居た。蓋し當時本邦に於て海軍の知識は恐らくこの操練所以上のものは無かつたらう。明治二年海軍操練所を江戸に設けられて兵部省に屬す其大丞は勝安房であつた。

明治三年には文庫の規則が出來てゐた、而も公開であつたのである。海軍省は明治五年に八省の一として設けられ、其の大輔は勝安房で後海軍卿になつた。省の一室には圖書室の設備が直に整へられて居た。その係役人もあつた。圖書館員の名目が特別に設けられては無いが、庶務の一部には圖書係りの役人があつた。圖書の整頓法は多少新式に行はれてゐた。殊に兵學寮（海軍操練所の改名）の分は、その時のことゝしては全くハイカラな新記錄法を用ゐてゐた。帶出規定までもあつた筈で、貸出記帳法も洋式に倣つて作られて居た。また各署聯絡組織も立つて居たさうである。恐くは本邦に於ける新式圖書室の嚆矢とでも言はれよう。この新文明の圖書室設備の元祖は實に勝海舟先生の達見に基いて居たのである。勝先生はその後明治の何年であつたか初期の頃に、華族一般に檄文を發して、華族が一致して圖書館を設けて其の子弟の修養に資し國家有用の材を作ることに努むべきことを奬勵した。誠に達見な人であるが、その達見の種を明せば、實は萬延元年の昔に桑港の商事圖書館協會の役員達に、同協會の圖書室を說明して貰つた時の印象に基くのである。一協會の役員が一言過ぎか知らぬが、面白半分に盡した親切でも、受入れる人が眞面目であるから、直に一國の公用機關の設備に貢献することになつた。これから考へて見ても、外國人などに對する應接は等閑にせず、思ひ切り親切を盡さねばならぬ事が解かる。

右の通り海軍部內の圖書室の設備に直ちに影響があつたのみならず、我が日本圖書館協會の設立に方つて最も熱心であつたのはその海軍文庫の連中であつた。こんな事を申せば或は和田先生あたりから御叱りに會ふかは知らぬが、明治廿五年に日本文庫協會の名で我が協會の創設せられた時には只今の元老連よりも寧ろ海軍文庫連中が中心で且つその必要を認め、從つて熱心であつたといふことを、當時の海軍中央文庫主管の菅野退輔氏より直接に承つたことがある。かくの如き因緣が前の一決議に存して居たとして見れば、我が日本圖書協會にとつては誠に大切なものであり、且つは外國の圖書館團體と我が國人との最初の接觸文書として、最も趣味あり且つ貴重の史料たることは申すまでもないことである。

震災後最も多く讀まれた

新刊圖書目錄

帝國圖書館日比谷圖書館調査其二

書名	著者名	冊數	定價
○大・猫・人間	長谷川如是閑	一	一・八〇
隨筆集文鳥	戸川秋骨	一	二・〇〇
○烟霞勝遊記	德富猪一郎	二	七・〇〇
風景の科學	渡邊十千郎	一	二・八〇
○ウォリアム・モリス	加田哲二	一	三・〇〇
○經濟學の實際的智識	高橋龜吉	一	二・〇〇
日本民法總論（上）	鳩山秀夫	一	一・七〇
○異性を見る	千葉龜雄	一	二・五〇
○大正大震火災誌	改造社	一	非賣品
○最新生理學	越智眞逸	一	六・〇〇
○最新自動車工學	關口定伸	一	六・〇〇
無線の知識	伊藤賢治	一	三・五〇
○一平漫畫	岡本一平	一	二・二〇
浮世繪	藤懸靜也	一	五・二〇
○現代人の生活と音樂	田邊尙雄	一	一・八〇

明治初代の海軍兵學寮文庫に就て

谷信次

我國で圖書館が創設されてから、最早五十年以上になります。この間、世運の發展と從業先輩諸賢の努力と、我が協會の後援などによりて、圖書館事業は駸々として發達を遂げつゝあることは、御同慶に堪へません。隨つてこの機會に於て我が書史學研究上圖書館發達史を編纂さるゝことも、この際適切の事業かと察せられますので、自然この方面に筆を染めらるゝ方もあらうかと思はれます。然し特に軍術方面の文庫の事情に就ては、軍術そのものが部外の方の窺知され難い場所であるため、詳悉されないことと考へられますので、誠に寡聞であつかましう御座いますが、私の關係した海軍のその創設時代の文庫の模樣を概說致して敢へて諸賢の一粲に供さうと思ひます。幸に考古の一資料とならば、仕合の至りに存じます。

因に、海軍創設時代の文庫の記錄は海軍省に於ても今日では概ね散逸して詳明してゐませんので、玆に揭げまするお話は、私の祖父がその創設時代に文庫の事務に鞅掌してゐたため、その當時の文書の一二が小家に傳つてゐるものがあるので、これに據つた次第で、固より完全でないのは頗る遺憾とする所ですが、それでも、これに依てその片鱗を窺はれようと信ぜられるので、わざと御覽に入れることと致しました。玆に出所を申上げて御諒解を願つて置きます。

明治二年九月東京築地舊幕府海軍所跡に海軍操練所を創設せられ、十一月より教授を初められましたが、三年十一月にこれを海軍兵學寮と改め、兵學寮の中に文庫が設けられました。當時兵學寮の中に文庫に關する規定が設けられて右の規則の中にありました。この規則は、今日に於て當事の文庫の狀態を察知するの便となりますので、少々冗長に亘るの嫌ひがありますが玆にその全文を揭げる事に致します。

海軍兵學寮規則

（抜萃）

明治三年十月設定

文庫

第九十五條　文庫ノ儀ハ書籍器械等拜借致居候事

第奉シテ書籍器械ノ出入ヲ管轄致シ其目錄精細ニ取調置可申事

第九十六條　兵學寮諸官員並生徒ノ外書籍器械拜借不相成候事

但拜借ノ者預リ居候拜借書籍器械等ハ掛ノ者ハ即刻返納申候事

第九十七條　書庫組數官員ハ三部生徒ハ一部ニ限リ候事

クノ外文庫ニ於テ拜借ノ者ハ休日ヲ除ヒ拜借及ヒ返納ノ儀ハ毎日午前十時ヨリ午後二時ニ限リ拜借ノ者ハ午後四時ヨリ五時マテニ限リ等ノ儀ハ三八ノ日ヲ越ユヘカラサル事

第九十九條　凡拜借致居候書籍器械等兵學寮ニ於テ取調之儀有之時ハ即刻返納申候ヘ共九十日ヲ越ユヘカラス器械ハ五日ヲ越ユヘカラサル事

第一百條　寮ニ於テ付候兵學頭ノ差圖ニ可有之事

第白一條　拜借ノ節掛者當人立會ノ上相違無之時ハ即刻返納申候事

第百二條　改損失等ノ情相糺シ兵學頭ヨリ償申付候儀モ有之事

但第九十六條同斷

第百三條　書籍器械等ハ賣拂等ノ儀兵學頭ノ差圖可有之事

第百四條　必用之品ハ文庫ヨリ差出シ可申事

第百五條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百六條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百七條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百八條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百九條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百十條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百十一條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百十二條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百十三條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百十四條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百十五條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百十六條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

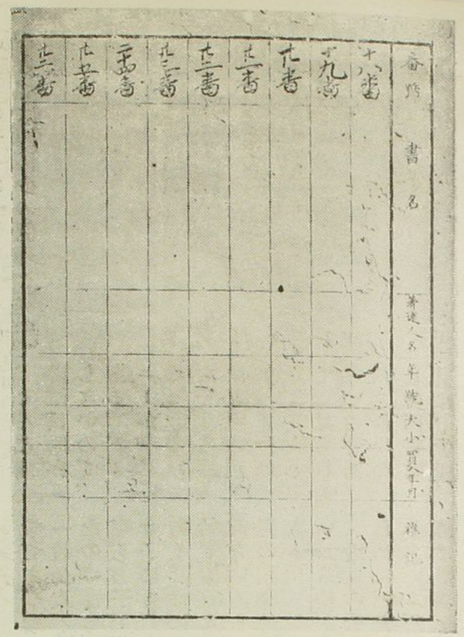
第百十七條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百十八條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百十九條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

第百二十條　書籍器械等拜借ニハ掛ノ者ハ必用之品ヲ整ヘ其目錄ヲ文庫ニ提出シ可申事

但第九十六條同斷



左―圖書原簿　右―圖書出納帳

兒童讀物六十種

日比谷圖書館聯合婦人會教育部共選　其一

こゝに揭ぐるものは兒童の好むで閲覽するものゝ中から選擇を施したものである。但し震災後絶版になつたものは遺憾ながら省いてある。

書名	著者名	數冊	定價
赤い鳥の本	鈴木・菊池・宇野・小山内等	一・二・四・六・七・五合	一・二〇
新しい童話	久米・小島・政二郎	二・四・六・七・一一	正價五合 八五
いたづら子のツツフイさん	科學研究所 宇宙の不思議	本野久子	一・八〇
お菓子の城	山村暮鳥	一	二・〇〇
幼きものに	島崎藤村	一	一・八〇
おさなものがたり	島崎藤村	一	一・八〇
お伽講壇	久留島武彦	一	一・八〇
お伽十八番	巖谷小波	一	一・〇〇
お伽花見車	巖谷小波	一	一・八〇
お伽バラダイス	巖谷小波	一	一・〇〇
お伽百話	巖谷小波	一	三・八〇
お伽文學	巖谷小波	一	三・四五
子供の自己教育	科學玩具の作り方	藤五代策	一・〇〇
家庭お伽噺	水島寒月	一・二・三・四・五・六	吉河寒月・高野紫山・甫山 六各 八五
家庭用兒童劇	自第一至第三巻	坪内雄藏	三各 二・二〇
騎士物語	矢口達	一	一・七〇
新童話劇 くしやみ太郎	伊藤松雄	一	一・五〇
健男兒	上井磯吉	一	一・七〇
國史美談 上・中・下	北垣恭次郎	三	四・五〇
國民西洋歷史	柴田親雄	一	三・三〇
國民日本歷史	高橋俊乘	一	二・八〇
西遊記	兒童文學研究會・吉田助治	一	二・二〇
自然界の話	自第一至第六編・吉田弘芳・澤田喜久雄	六	一〇・〇〇
兒童源平盛衰記	奥野庄太郎	一	一・八〇
自動車の卷	最新知識子供の科學叢書第一編・原田三夫	一	一・七五
自動車の理工と操縱	黒木莽樹	一	二・五〇
趣味の發明界	松平道夫	一	三・五〇
春浪快著集	押川春浪	四	九・二〇

兒童讀物六十種

日比谷圖書館聯合婦人會教育部共選　其二

書名	著者名	數冊	定價
小學年歷物語三・四・六・七	小倉・お伽噺・沼田笠峰・小說・小倉・島加藤朝鳥	一	一・〇〇
少年歷史物語	補習教育研究會	四各	一・二〇
波			三・〇〇
小新お伽百話	巖谷小波	一	五・六〇
新課綸入模範家庭文庫	杉谷代水・外五名	二各	三・八〇
世界一週お伽旅行	世界・蘆谷蘆村	二各	一・二〇
世界お伽噺	巖谷小波	一〇	三〇・〇〇
世界童話集	自第一至第二十編・鈴木三重吉	二〇各	八五
世界の奇觀	横山又次郎	一	二・三〇
世界の奇觀	松本苦味	一	二・三〇
地獄から歸つた少年の話	子供に知らせたい地獄・たかから船	金子洋文	一・二〇
地震の知識	少年少女科學叢書・古川龍城	一	一・〇〇
お伽歌劇集	安倍・久留島・松美等	四各	一・七〇
ギャンケン國	澁澤青花	一	八〇
七色文庫	一・二・三・四		
日本昔噺	巖谷小波	二各	一八
猫の市長さん	松本苦味	一	二〇
鳩の家	大井冷光	一	三〇
花咲爺さん	北原白秋	一	一・九〇
發明物語	松平道夫	四各	九五
母を慕ひて	野邊地天馬	一	一・五〇
不思議な窓	松山思水	一	七五
不思議な窓	西條八十	一	二・三〇
ふるさと	島崎藤村	一	一・八〇
砲臺	島崎藤村	一	一・〇〇
魔王の首	牛沙童話集・水島牛歩	一	九五
魔法の小馬	白鳥省吾	一	一・二〇
無線の知識	伊藤賢治	一	三・五〇
夢の橋	山崎光子	一	九五
露國民衆文學全書	第一・二編・昇曙夢	二各	一・八〇
爆彈	松山思水	一	七五

明治初代の海軍兵學寮文庫に就て

谷　信次

我國で圖書館が創設されてから、最早五十年以上になります。この間、世運の發展と從業先輩諸賢の努力と、我が協會の後援などによりて、圖書館事業は駸々として發達を遂げつゝあることは、御同慶に堪へま

所を申上げて御諒解を願つて置きます。

明治二年九月東京築地舊幕府海軍所跡に海軍操練所を創設せられ、十一月より教授を初められましたが、三年十一月にこれを海軍兵學寮と改め、兵學寮規則を定められ

兒童讀物六十種　日比谷圖書館　聯合婦人會教育部　共選　其一

こゝに掲ぐるものは兒童の好むで閲覧するものゝ中から選擇を施したものである。但し震災後絶版になつたものは遺憾ながら省いてある。

書名	著者名	冊數	定價
赤い鳥の本	鈴木三重吉・小山内薫・宇野千代	一・二・四・六・七	五各一・二〇
新しい童話	久米正雄・小島政二郎	二・四・六・七・一一	五各一・八〇
いたづら子のソッフィさん	本野久子	一	一・八〇
科學浮世語	宇宙の不思議	松平道夫	一・八〇
お菓子の城	山村暮鳥	一	一・二〇
幼きものに	鳥崎藤村	一	一・八〇
おさなものがたり	鳥崎藤村	一	一・二〇

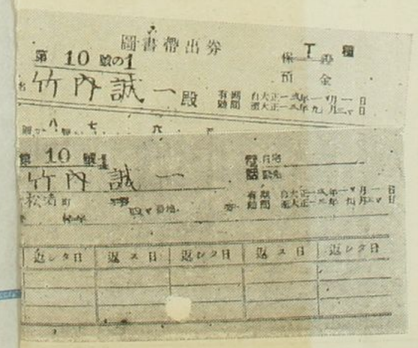
圖書館事業の擴充と組織の改善

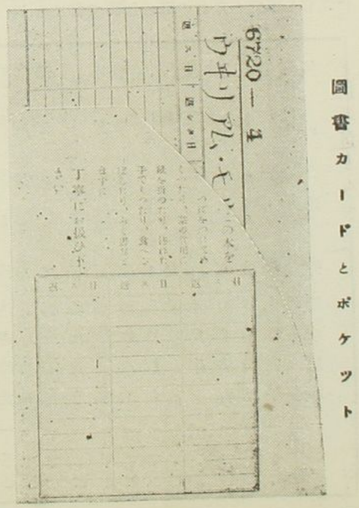
今澤慈海

昔英國にドミニー・サムソンといふ人があつた。毛髮は伸ぶるに任せ、著る衣とても少しも構はず、唯毎日々々薄暗い書庫へ入つて行つては幾年代の塵に埋れた本を探し出して讀み耽り、蟲に喰はれた書物を取り出しては「あゝこれだ〳〵」などゝ喜びの聲を發したといふ。今日に於ても圖書館經營者といへば、兎角この古へのドミニーの末裔のやうに想像する者が多い。しかし今日では極僅少の例外を除いて、こんな圖書館員は存しないのである。ドミニーが初めて掻きのけたやうな塵は近頃の圖書館には見ようとして見られない。

家でなく、又單なる研究家でもなく、斯業本來の使命たる對民衆の唯一無二の教育機關であるといふ信念と事實から生れ出てた實際的事務家なのである。否教育家と事務家とを打つて一丸としたやうなものであつて、圖書館は卽ちこれ等の人々の勤務場所なのである。公共圖書館に於ては、これが特に眞實なのである。

又昔の圖書館は、專ら僧侶、學者たちに奉仕する殿堂であつたが、今日の圖書館は專ら大人の圖書館、しかも一般公衆の爲めに奉仕する公會堂のやうなものとなつたのである。又昔の圖書館であつたが、今の圖書館は兒童にも專ら男子の圖書館はこれ等の者をも含めて女子にも對等の權利を與へ、同等の取扱ひをするのである。特に人の生涯的教育の準備は、幼少の時から開始せられなければならないといふ論據から、兒童圖書館といふものゝ不可缺のものとなり、兒童に對する各種の積極的措置せられるやうになつたのである。又こゝ學校と圖書館との連絡活動とせられ盛になつたのである。





圖書カードとポケット

片上伸氏事件顚末公開狀

（印刷を以て謄寫に代ふ）

去る大正十三年六月二十四日突如として片上伸氏が早大文學部長並に教授[illegible][illegible]漂然としてロシヤへ去つたことは當時都下の耳目を聳動せしめ、その因つて來たる所の那邊にあるやを疑はしめ、流言蜚語頻々として起り、その爲めに我等の蒙る非難の聲、實に聞くに堪へないものがあつた。が何しろ露西亞文科の興廢に關する重大事だつたので、隱忍今日に及んだのであるが、最早我等はこれ以上排斥者であると見らるゝことに堪へ得なくなつた。一同の將來のため且つ又片上伸氏の將來の爲めにも誤りなき事實の眞相を發表し、大方の批判に訴へんとするものである。

事件の發端

早稻田大學露文科一年生牛島高次君は片上伸氏より受けたる苦痛を忍ぶに堪へず六月五日大隈會館に於て學友露文科三年生大隈俊雄、同二年生小宮山明敏、同岡澤秀虎の三君に片上伸氏より性的行爲を强いられたることの委細を告白し、既にこのことは大學附屬高等學院教授松永材氏を經て、常務理事田中穗積氏に申告されてゐると附言した。所謂片上伸氏の同性愛乃至男色事件なるものゝ言葉に出して表示された、これがそも〳〵の初めである。

牛島君告白の內容

牛島君は一身上の都合より本年三月第一高等學院卒業と同時に從來の露文科入學志望を棄てゝ大學部哲學

科へ轉科すべく片上教授、馬場、原兩講師の了解を求め、上記三教師の間に之を認めることになつてゐた。

然るにその後高等學院の露文科志望學生の送別會の折り、會々出席せる牛島君を親しく目睹せる片上伸氏は突如同氏獨自の同性愛乃至性的慾望の衝動を感じた結果、急に轉科の難しく且つ不利なるを說きて、或は恩賜館研究室へ招き、或は自宅に宿泊せしめて接吻、抱擁を强行し、卒業後は露文科の教師たらしむるといふ暗示を與へて、遂に性的行爲に及ばんとした。牛島君は煩悶の結果次第に片上氏を避くるに至つた。とそれが片上氏の憤怒と嫉妬を買ひ、罵詈讒謗、聞くに堪へざる辱蔑を加へられたる上句、毆打足蹴等の迫害をさへも加へられた。激昂せる牛島君は遂に意を決し上記松永材氏を訪ね、一切の顚末を告白し、哲學科へ轉科するなり他の學校へ轉ずるなりしたいと哀願した。その際牛島君が激昂のあまり之を社會に公表し兼ねまじき勢なのを看取し、且つ同樣の被害者の他に累々たるを確知した松永材氏は事の重大なるに驚き牛島君を慰撫する一方證據材料の一端を添へて、直に田中理事に申告した。上記の如き事情によつて、露文科關係の心ある者の間に密かに憂ひられてゐた問題が、一足飛びに表沙汰になつて終つたのである。（元來片上伸氏の教へ子に對する同性愛の極、性的關係は十數年の昔よりのことで、その爲めに中途退學せる學生續々あり、現に牛島君の場合でも內容の一端を聞き知つた級友小沼達君の如きも上記の如き事情の結果到底公平なる力量審査の行はれ難きを慮り通學を中止するに至つた。之を知つた片上氏が同君に與へた罵詈讒謗の如きも聞くに堪へないものがある。）

經過の一

上記の如き告白に接した小宮山明敏、岡澤秀虎、大隈俊雄（同君もまた關係があつた）の三君は、暫時茫

然としてゐたが、漸て小宮山明敏君が『上記のやうな性的關係の是非善惡は暫く措いて問はずとするも、學生の關係であり且つはそれが表沙汰になつた以上、到底教授として仰いでゐる譯には行かない。片上伸氏の去ることは露西亞文科に取つて不幸なことではあるが、どう考へても斷然教職は去つて貰はねばならないと思ふ。が兎に角我々だけでは仕方が無いから露西亞文科全體の問題として熟議したい。』

と提議した。他の二君も之れを諒とし、不敢取馬場、原兩講師、第三年生黑田辰男（同君も被害者の一人であつた！）二年生村田春海、同八住利雄等一堂に會して前後策を協議した。協議の結果も略同樣で、さうした關係が對學生の事實であり、學生を傷け、不公平の行はれてゐる以上、斷然教職を退いて貰はねばならない。が師弟である關係上我々から詰腹を切らせることはよくない、どうしても同氏から自發的に自決して貰ふように努力することが必要である。兎に角かう云ふ事件が、一足飛びに學校當局の耳に入つたことを報告して男らしい氏の處決を見ようといふことになつた。依つて會合者の中より禮儀上特に關係者を除き、他の人員卽ち馬場、原兩講師、學生小宮山明敏、村田春海、岡澤秀虎、八住利雄の六名にて同夜片上氏を自宅に訪ね、八住利雄君の希望により同君の口より上記協議の內容を陳述し、氏の自決を求めた。然るに片上伸氏は我等の期待を裏切つて遂に眞相を告白せず、應答數詞の後辛うじて接吻、抱擁のみは肯定したが、遂に性的行爲のあつたことを否定した、剩さへ田中理事への交涉方を再三再四依賴したが勿論それがこの場合到底不可能なことであつたので、誰一人右の依賴に應ずる者なく、苦き失望と幻滅とを感じながら引取つた。

經過の二

その翌日再協議の結果再び小宮山明敏君の提議により露文科卒業生梅田寬三郎、杉木喬、小泉修一、宇賀

三十三（增田隆彥、平岡雅英、三宅賢の三卒業生は事故のため不參）の諸君に通知を發し、尙ほ前回集合の問に合はなかつた學生三年生小林信司、小平善幸、二年生横澤芳人、同太田義照（同君も亦功名心を畯るやうな甘言の下に被害を受けてゐた一人であつた）一年生丸山秀平、同中島一郎、卽ち露西亞文科の卒業生、在校生の殆ど全部、之に馬場、原兩講師を加へて一堂に會合し、諸氏の告白により男色的行爲の動かすべからざる事實なるを明かにすると共に、その被害の余りにも多方面なるに驚嘆し、矢張前日の協議通り斷然自決し教職を退かるゝやう再省を促すべく決議した。依つて自から調停役たらんと席に加つた英文科教授日高只一氏、及び最初よりの當事者として出席せる學院教授松永材氏に右の決議を報告し、尙ほ馬場、原兩講師及び日高只一氏を選び再び片上伸氏に退職自決の交渉を依頼した。『我々は決して片上伸氏を葬らうとするものではない、從つて我々の方からこの事件を社會に公表するやうなことはしない。片上氏さへ立派な態度で男らしく自決して呉れたら教職以外の「人として」の同氏とは今後も溫かな氣持で相見ゆるであらう』これが一同の意向であつた。尙ほこの際既に上記三氏に一切の交渉を委任した以上爾余のもの一同は交渉の結果報告あるまで個人的に片上伸氏を訪問したり諸種の交渉に與つたりすることは絶對に避けることを盟約した。

經過の三

一同より上記の如き委任を受けたる日高只一、馬場哲哉、原久一郎の三教師は熟議の結果日高氏の發議により名譽教授坪内雄藏、前文學部長金子馬治、文學科主任吉江喬松の三氏に謀つて飽くまでも文學部内で解決しやうと決し、翌七日の早朝、證據材料の一端を携帶して坪内氏宅に參じ、そこで金子、吉江兩教授列席

の下に、改めて事件の概略を報告し前後策を謀つた。尙ほその際日高氏は上記元老諸氏の解決方の參考材料として露文科全體の決議――卽ち片上伸氏の辭職を條件としての自決を促すこと――を提示し、この際コソクな手段に訴へて退職手續を延引したり曖昧にしたりされたのでは、露文科全體の諸君に對して我々の立場がなくなるのみならず、延いては如何なる騷動が起るやもはかられずと附言した。『片上君が辭職しないのでは委任を受けた我々の立場がありませんから』かう再度ダメを押したのは日高只一氏なのであつた。そこで元老等協議の結果露文科全體の決議を片上氏に提示する前に、兎に角友人として吉江喬松日高只一の兩氏が片上氏に一應會見して親しく同氏の意のある所を聽取し一同の希望に添ふやう取りはからふことが穩當であらうといふことになつた。

經過の四

翌日及び翌々日、日高只一氏は馬場、原兩講師を自宅及び研究室に招き、片上氏に會見した時の印象を述べ同氏が深刻なる悔悟に馳られ、はたの見る目も痛々しく、辭職などは問題でないほどだと告げたので、右馬場、原兩講師はそれを信じ密かに片上伸氏のためにそれを喜んだ。

然るに同じく友人として片上伸氏に會見した吉江喬松氏は、原、馬場兩講師を大隈會館の食堂に招き、自己の印象を述べて曰く、『何しろ今回の片上君の行爲は正氣の沙汰ではないのだから、病人と之を見做さねばならぬ。從つて我々は當分彼を病院へ入れてその病氣を根治してやらねばならない。そして病氣が恢復したら再びさうした病氣になることもあるまいし、若し又萬一さうした徵候が見えたなら不肖ながら我々が何とでもして之を未發に防いでやる。だから一定の期間を置いて再び教職に立たしめてもいゝではないか。片上

君も相當悔悟はしてゐるやうだ、然し同君は御承知の通りあゝいふ性格の人だから、悔悟はしてゐるといつても外見上懺悔者のやうには見えず、現に自分に對してなどは最初の間警戒的乃至敵對的な態度を見えてゐた位ゐであつた。だから君等が同君と會はれるにしてもこの點をよほど考へないと却つて惡い結果にならんとも限らない云々……。』

だからいつそ適當な時期が來てこちらから知らせる迄、會見を見合せたらよからうとのことであつた。

茲に於て馬場、原兩講師は前記二氏の陳述に大なる距離あるを案じ、再應日高只一氏を訪ね、純眞懺悔の態度の眞であり、教職を退くことの眞であるやを質問した。その時の日高氏の返答も何故か甚だ曖昧で辭職云々のことは學校當局の意向を待たなければ何とも返事し難いとのことであつた。馬場、原兩講師はこの返答を聞き心中甚だ意外には思つたが、兎に角その旨を一同に傳へ是非の判斷を大方に任せて、委員の職を解除して貰ふべく決心した。

經過の六

約に基きその翌々日第二回の露西亞文科一同の會合が催された。この日將來は大學教師にしてやるといふ内約を與られてゐた學生岡澤秀虎君は何故か從來の決議を無視し、純眞懺悔の態度さへあれば、をの儘教職に止まつてゐても差支ないと稱し、それを一同の議決だつたかの如くに誣ひ馬場、原兩講師が直接片上伸氏に向つて辭職を迫つたかの如くに誤解し、非禮にも兩講師に喰つてかゝり、他の大多數者よりそれが誣言であり、曲解であることを難じられて、右兩講師の前に謝罪した。

尙ほこの日小宮山明敏君は盟約に背き、一同に無斷で片上氏宅を訪問し、同氏と單獨協議の結果、同氏の旨を受けて坪内名譽教授その他の元老のもとへ釋明に赴いたことを告白して、自己の冒瀆を陳謝した。その際片上氏が一同に傳へて呉れと依頼したといふ辯明の内容も一同に取つては不滿至極のものであつた。曰く『俺があゝした行爲をやつたのは社會の罪であると言へば言へる。社會が俺に生命の全的發現を許さないからだ……云々』そして被害者諸君に對する陳謝の色は甚だ稀薄なものであつた。（この日から小宮山明敏、岡澤秀虎、黒田辰男、八住利雄、村田春海の五君は漸次留任運動者的色彩を帶びて來たやうに見受けられた。）

この日の日高只一氏の報告も頗る曖昧であり片上氏の教職を去るや否やの言明を避けて、只だその態度の純眞であることのみを力説した。事こゝに至つては最早片上伸氏の處決の結果に待つほか無かつたので、その處決を見るまでこの問題を一時保留し、その上で又善後策を講じようといふことになり、前記三氏の委任を解き、各自自由の行動を取ることにして散會した。

經過の七

上記の如き事情によつて一同は片上氏の男らしき自決退職を期待しながら數日を過ごした。然るに當の片上伸氏は露西亞文科の社會的事業の一つとして教師、卒業生在校生によつて着手されつゝあつた飜譯事業の後仕末に名を藉りて、十數人の關係者の中より何故か特に梅田寛三郎、三宅賢君等のみを招致し、縷々自己辯護に努めた後、元來今回の事件はさほど醜惡な點まで及んでゐるのでなく、且つ自分の決意は明かであるにも拘らず、馬場、原兩講師が私情から殊更事件を誇大にし一味不良の徒と謀つて自分を陷れんとするものであると斷じた。これを聞いた三宅賢君は日高氏から傳へられた恩師の態度と餘りに大なる相違のあることに驚嘆すると共に、激怒に近き不滿を感じて不敢取馬場、原兩講師並に卒業生在校生の大多數に之れを傳へた。この時以來馬場、原兩講師を初め露文科關係の大多數の者は片上氏に對する信頼を失ひ、その純眞さに痛き疑惑を挾むに至つた。

適當な機會を待つて馬場、原兩講師は片上氏を面詰すべく考へてゐた。然るにすべてを社會に公表し公平なるその審を受けて純眞懺悔の人となつて九月頃ロシヤへ行くと信ぜられてゐた片上伸氏は六月二十四日うやむやの中に突如ロシヤへ立つて終つたのである。その當時同氏が取られた態度にも甚だ面白からざる所あれど、一々記述する煩に堪へず。――兎に角三宅君の口を通じてもうふゞはれる如く、この間諸種の忌まは

しき宣傳あり、諸方面より馬場、原兩講師を難じ、辯明を得て勸めて落意し同情を表する向きさへあつた。

結末

前述の如き釋明によつてもうかゞはるゝ通り我等は「人として」の片上氏の態度に疑問を挾むものであり排斥者であるといふ一味の宣傳に對しても憤怒を感ずるものであつたが、露西亞文科の將來を思ひ、在校生の將來を考へ、陰忍自重して今日に及んだのである。然るに九月に入つて、學校文學部當事者は片上氏去つた後の露西亞文學科存續の議に關して、片上氏排斥者として、馬場、原兩講師の提出した案をも斥け、主として外人講師によつて時間を埋めるに至つた。これを知つた學生の大多數、卽ち三年生、大隈俊雄、小林信司、小平善幸、二年生、太田義照、横澤芳人、一年生、丸山秀平、中島一郎、牛島高次の八君は、右時間配當の不當と不便なのを思ひ、部長五十嵐力氏に連署の陳情書を提出し、委員三人を擧げて右時間配當の改正を歎願した。（但し二年生小宮山明敏君は右陳情の趣旨には賛成したが陳情書には署名せず、その他の學生は歸省中その他の事情により會合に不參。）しかもその陳情書すら不良の徒が馬場、原兩氏より煽動されて提出したるものとして一蹴し去られた。

かくの如くにして露西亞文科を愛し、その存續隆盛を希つた我等一同の誠意はいれられず、あまつさへ片上氏排斥者の譏をうけて諸方面より陰劍なる非難攻擊を浴せられるので、これ以上事件を曖昧にしておくことが不可能になつた。鞭うたるべき所あらば鞭うたれよう。難ぜらるべき點あらば難ぜられもしよう。茲に片上氏事件及び之に關連する經過の一斑を明らかにし大方の公正なる批判にまたむとするものである。

大正十三年十月十二日

馬場哲哉　原久一郎
宇賀三　増田隆彦
三宅十三　大隈俊雄
賢